宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第83集

豊満大谷遺跡（とよみつおおたに）

野添遺跡（のぞえ）

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第83集

『豊満大谷遺跡 野添遺跡』正 誤 表

ページ・図番号	誤	正
例言 4	柳田靖子	柳田晴子
p139	クリア	クリ

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第83集

豊満大谷遺跡（とよみつおおたに）

野添遺跡（のぞえ）

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

豊満大谷遺跡　１．上空から豊満大谷遺跡方面を展望

豊満大谷遺跡　２．遺跡全景

野添遺跡　１．上空から野添遺跡方面を展望

野添遺跡　２．遺跡全景

序

宮崎県教育委員会では、緑資源公団九州支社の委託を受け、農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設事業に伴い、豊満大谷・野添遺跡の発掘調査を行いました。

豊満大谷・野添遺跡では縄文時代・古墳時代・古代・中世の遺構・遺物が検出されました。特に当地域において、発掘調査例の少ない縄文後期から晩期にかけての遺構や遺物が豊富に出土したことは、今後、当地域の歴史を解明するうえで貴重な成果といえるでしょう。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関および地元の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成16年１月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長　米良弘康

例　言

1．本書は農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路の建設に伴い、宮崎県教育委員会が行った豊満大谷遺跡、野添遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、緑資源公団九州支社都城建設事業所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査の期間は、次のとおりである。

豊満大谷遺跡　平成13年７月24日から平成13年10月９日

野 添 遺 跡　平成13年11月13日から平成14年２月15日

4．現地での実測等の記録は、永友良典、玉利勇二、田中光、柳田靖子、工藤基志、古屋美樹が行った。

5．本書に使用した写真は、永友、玉利が撮影した。

6．整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは主として玉利が行い、整理作業員が補助した。

7．本書で使用した位置図は、国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図は、都城市作成の５千分の１図、１万分の１図を基に作成した。

8．土層断面および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に拠った。

9．本書で使用した方位は、座標化（G．N.）および磁北（M．N.）である。レベルは海抜絶対高である。

10．本書では、遺構に次の略号を使用している。

竪穴住居跡 …… ＳＡ　掘立柱建物跡 …… ＳＢ　土坑 …… ＳＣ

道路状遺構 …… ＳＧ　溝上遺構 …… ＳＥ

遺構番号の先頭に付したアルファベットについては、それぞれの時代ごとに異なり、「J」が縄文時代、「K」が古墳時代、「T」が中世に帰属するものであることを示している。

11．本書の執筆は第１章第１節を県教育庁文化課の飯田博之、第Ⅳ章第３節６を岩永哲夫が担当し、そのほかを玉利が担当した。編集は玉利が担当した。

12．出土遺物、その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査の組織 …… 1

第Ⅱ章　豊満大谷・野添遺跡の立地と環境 …… 2

第Ⅲ章　豊満大谷遺跡の調査
第1節　調査の概要 …… 5
第2節　基本層序 …… 5
第3節　調査の記録 …… 8
1　縄文時代の遺構と遺物
(1)　土坑 …… 8
(2)　石囲い炉 …… 8
(3)　包含層出土の遺物 …… 13
2　弥生時代から中世の遺構と遺物
(1)　竪穴住居跡 …… 26
(2)　掘立柱建物跡 …… 31
(3)　集石状遺構 …… 31
(4)　土坑 …… 34
(5)　溝状遺構 …… 39
(6)　畝状遺構 …… 42
(7)　包含層出土の遺物 …… 44
3　近世から近代の遺構と遺物
(1)　道路状遺構・溝状遺構 …… 54
(2)　包含層出土の遺物 …… 54
4　石器 …… 58
第4節　総括 …… 66
1　縄文時代の遺構と遺物 …… 66
2　弥生時代から中世の遺構と遺物 …… 66
3　近世から近代の遺構と遺物 …… 69

第Ⅳ章　野添遺跡の調査
第1節　調査の概要 …… 79
第2節　基本層序 …… 79
第3節　調査の記録 …… 82
1　縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡 …… 82
(2) 土坑 …… 92
(3) 包含層出土の遺物 …… 99
2 古墳時代の遺構と遺物
(1) 竪穴住居跡 …… 107
(2) 土壙墓 …… 111
(3) 包含層出土の遺物 …… 118
3 古代の遺物
(1) 包含層出土の遺物 …… 120
4 中世から近世の遺構と遺物
(1) 土壙墓 …… 122
(2) 土坑 …… 122
(3) 溝状遺構 …… 125
(4) 道路状遺構 …… 125
(5) 包含層出土の遺物 …… 130
5 石器 …… 132
6 付．植物遺存体の取り上げ …… 139
第4節 総括
1 縄文時代の遺構と遺物について …… 142
2 古墳時代の遺構と遺物について …… 143
3 古代及び中・近世の遺構と遺物について …… 143

挿 図 目 次

豊満大谷遺跡 挿図目次

第1図 豊満大谷遺跡・野添遺跡位置図 …… 3
第2図 豊満大谷遺跡・周辺地形図 …… 4
第3図 豊満大谷遺跡 グリッド配置図 …… 5
第4図 豊満大谷遺跡 基本土層柱状図 …… 6
第5図 豊満大谷遺跡 土層断面実測図 …… 7
第6図 豊満大谷遺跡 縄文時代の遺構分布図 …… 9
第7図 豊満大谷遺跡 3号土坑実測図 …… 10
第8図 豊満大谷遺跡 石囲い炉遺構実測図 …… 11
第9図 豊満大谷遺跡 石囲い炉出土土器実測図 …… 12
第10図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(1) …… 15
第11図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(2) …… 16
第12図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(3) …… 17
第13図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(4) …… 18

第14図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(5) …… 19
第15図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(6) …… 20
第16図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(7) …… 21
第17図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(8) …… 22
第18図　豊満大谷遺跡　古代から中世の遺構分布図 …… 27
第19図　豊満大谷遺跡　1号竪穴住居跡実測図 …… 28
第20図　豊満大谷遺跡　1号竪穴住居跡出土土器実測図(1) …… 29
第21図　豊満大谷遺跡　1号竪穴住居跡出土土器実測図(2) …… 30
第22図　豊満大谷遺跡　1号竪穴柱建物実測図 …… 31
第23図　豊満大谷遺跡　1号集石状遺構実測図 …… 32
第24図　豊満大谷遺跡　1号集石状遺構出土土器実測図 …… 33
第25図　豊満大谷遺跡　1号土坑実測図 …… 34
第26図　豊満大谷遺跡　2号土坑実測図 …… 35
第27図　豊満大谷遺跡　4号・5号土坑実測図 …… 36
第28図　豊満大谷遺跡　6号・7号土坑実測図 …… 37
第29図　豊満大谷遺跡　1号・2号・6号土坑出土土器実測図(1) …… 38
第30図　豊満大谷遺跡　6号土坑出土土器実測図(2) …… 39
第31図　豊満大谷遺跡　1号・2号・3号溝状遺構・畝状遺構実測図及び土層断面実測図 …… 40
第32図　豊満大谷遺跡　4号・5号・6号溝状遺構実測図及び土層断面実測図 …… 41
第33図　豊満大谷遺跡　7号溝状遺構実測図 …… 43
第34図　豊満大谷遺跡　8号・9号溝状遺構実測図 …… 43
第35図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(1) …… 44
第36図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(2) …… 45
第37図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(3) …… 47
第38図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(4) …… 48
第39図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(5) …… 49
第40図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(6) …… 50
第41図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(7) …… 51
第42図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(8) …… 52
第43図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(9) …… 53
第44図　豊満大谷遺跡　古銭・土製品実測図 …… 54
第45図　豊満大谷遺跡　近世から近代の遺構分布図 …… 55
第46図　豊満大谷遺跡　1号道路状遺構実測図及び土層断面図 …… 56
第47図　豊満大谷遺跡　8号溝状遺構実測図 …… 57
第48図　豊満大谷遺跡　石器実測図(1) …… 58
第49図　豊満大谷遺跡　石器実測図(2) …… 59
第50図　豊満大谷遺跡　石器実測図(3) …… 60

野添遺跡　挿図目次

第１図　野添遺跡　周辺地形図 …… 80
第２図　野添遺跡　グリッド配置図および基本土層柱状図 …… 81
第３図　野添遺跡　縄文時代の遺構分布図 …… 83
第４図　野添遺跡　Ｊ１号竪穴住居跡実測図 …… 85
第５図　野添遺跡　Ｊ２号竪穴住居跡実測図 …… 87
第６図　野添遺跡　Ｊ３号竪穴住居跡実測図 …… 89
第７図　野添遺跡　Ｊ４号竪穴住居跡実測図 …… 90
第８図　野添遺跡　Ｊ５号・Ｊ６号竪穴住居跡実測図 …… 91
第９図　野添遺跡　Ｊ１号土坑実測図 …… 92
第10図　野添遺跡　Ｊ７号・Ｋ２号竪穴住居跡、Ｋ１号土壙墓実測図 …… 93
第11図　野添遺跡　Ｊ１号竪穴住居跡出土遺物実測図(1) …… 94
第12図　野添遺跡　Ｊ１号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) …… 95
第13図　野添遺跡　Ｊ２号竪穴住居跡出土遺物実測図(1) …… 95
第14図　野添遺跡　Ｊ２号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) …… 96
第15図　野添遺跡　Ｊ３号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 97
第16図　野添遺跡　Ｊ４号竪穴住居跡出土遺物実測図(1) …… 97
第17図　野添遺跡　Ｊ４号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) …… 98
第18図　野添遺跡　Ｊ５号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 98
第19図　野添遺跡　Ｊ７号竪穴住居跡、Ｊ１号土坑出土遺物実測図 …… 99
第20図　野添遺跡　包含層出土土器実測図(1) …… 100
第21図　野添遺跡　包含層出土土器実測図(2) …… 101
第22図　野添遺跡　包含層出土土器実測図(3) …… 102
第23図　野添遺跡　包含層出土土器実測図(4) …… 103
第24図　野添遺跡　古墳時代の遺構分布図 …… 108
第25図　野添遺跡　Ｋ１号竪穴住居跡実測図 …… 110
第26図　野添遺跡　Ｋ３号竪穴住居跡実測図 …… 111
第27図　野添遺跡　Ｋ１号土壙墓実測図 …… 112
第28図　野添遺跡　Ｋ１号竪穴住居跡出土土器実測図(1) …… 113
第29図　野添遺跡　Ｋ１号竪穴住居跡出土土器実測図(2) …… 114
第30図　野添遺跡　Ｋ１号竪穴住居跡出土土器実測図(3) …… 115
第31図　野添遺跡　Ｋ１号竪穴住居跡出土土器実測図(4) …… 116
第32図　野添遺跡　Ｋ１号土壙墓出土遺物実測図(1) …… 116
第33図　野添遺跡　Ｋ１号土壙墓出土遺物実測図(2) …… 117
第34図　野添遺跡　Ｋ１号土壙墓出土遺物実測図(3) …… 118
第35図　野添遺跡　包含層（古墳時代）出土土器実測図 …… 119
第36図　野添遺跡　包含層（古代）出土土器実測図 …… 121
第37図　野添遺跡　中世から近世の遺構分布図 …… 123

第38図　野添遺跡　Ｔ１号・Ｔ２号土壙墓、Ｔ１号土坑実測図 …… 124
第39図　野添遺跡　Ｔ２号土坑実測図 …… 126
第40図　野添遺跡　１号・２号溝状遺構実測図及び土層断面図 …… 127
第41図　野添遺跡　１号道路状遺構実測図及び土層断面図 …… 128
第42図　野添遺跡　２号道路状遺構実測図 …… 129
第43図　野添遺跡　Ｔ１号土壙墓出土土器実測図 …… 130
第44図　野添遺跡　Ｔ２号土壙墓出土土器実測図 …… 130
第45図　野添遺跡　Ｔ１号土坑出土土器実測図 …… 130
第46図　野添遺跡　包含層（中世～近世）出土土器実測図 …… 131
第47図　野添遺跡　石器実測図(1) …… 132
第48図　野添遺跡　石器実測図(2) …… 133
第49図　野添遺跡　石器実測図(3) …… 134

表　目　次

豊満大谷遺跡　表目次

第１図　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(1) …… 23
第２図　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(2) …… 24
第３図　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(3) …… 25
第４図　豊満大谷遺跡　出土土器及び古銭・土製品計測表 …… 59
第５図　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(1) …… 61
第６図　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(2) …… 62
第７図　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(3) …… 63
第８図　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(4) …… 64
第９図　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(5) …… 65

野添遺跡　表目次

第１図　野添遺跡　出土土器観察表：縄文時代(1) …… 104
第２図　野添遺跡　出土土器観察表：縄文時代(2) …… 105
第３図　野添遺跡　出土土器観察表：縄文時代(3) …… 106
第４図　野添遺跡　石器計測表 …… 134
第５図　野添遺跡　出土土器観察表(1) …… 135
第６図　野添遺跡　出土土器観察表(2) …… 136
第７図　野添遺跡　出土土器観察表(3) …… 137
第８図　野添遺跡　出土土器観察表(4) …… 138
第９図　野添遺跡　縄文住居跡出土炭化種子一覧（参考資料） …… 140

図 版 目 次

豊満大谷遺跡　図版目次

巻頭１　豊満大谷遺跡　上空から豊満大谷遺跡方面を展望、遺跡全景
図版１　豊満大谷遺跡　石囲い炉・集石状遺構・１号竪穴住居跡・１号土坑検出状況 …… 71
図版２　豊満大谷遺跡　４号・５号土坑、Ａ区溝状遺構、畝状遺構、５号・10号溝状遺構 …… 72
図版３　豊満大谷遺跡　出土土器 …… 73
図版４　豊満大谷遺跡　出土土器 …… 74
図版５　豊満大谷遺跡　出土土器 …… 75
図版６　豊満大谷遺跡　出土土器 …… 76
図版７　豊満大谷遺跡　出土土器 …… 77
図版８　豊満大谷遺跡　出土土器 …… 78

野添遺跡　図版目次

巻頭２　野添遺跡　上空から野添遺跡方面を展望、遺跡全景
図版１　野添遺跡　縄文住居跡出土炭化種子顕微鏡写真 …… 141
図版２　野添遺跡　Ｊ１号・Ｊ２号竪穴住居跡検出状況 …… 146
図版３　野添遺跡　Ｊ３号・Ｊ７号・Ｋ２号竪穴住居跡、Ｋ１号土壙墓完掘状況 …… 147
図版４　野添遺跡　Ｋ１号・Ｔ１号土壙墓検出状況、Ｋ１号竪穴住居跡完掘状況 …… 148
図版５　野添遺跡　Ｔ１号土壙墓・Ｋ１号竪穴住居跡土器検出状況、Ｔ２号土坑・Ｔ２号土壙墓・
１号道路状遺構完掘状況 …… 149
図版６　野添遺跡　出土土器 …… 150
図版７　野添遺跡　出土土器 …… 151
図版８　野添遺跡　出土土器 …… 152
図版９　野添遺跡　出土土器 …… 153
図版10　野添遺跡　出土土器 …… 154
図版11　野添遺跡　出土土器 …… 155

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

緑資料公団（旧農用地整備公団）では、都城地区の農業生産性の向上と安定を目的とする圃場整備事業（204ha）と農産物流通の迅速化を図るための農業用道路整備事業（総延長19.1km）を核とする農用地総合整備事業を計画した。そこで事業に先立ち、県文化課に九州農政局南部九州土地改良調査管理事務所長より事業予定地内の埋蔵文化財の有無の照会があった。それを受けて県文化課は、平成６年３月に予定地内に33の遺跡と試掘調査が必要な29箇所が所在することを回答した。以後、その回答に基づき埋蔵文化財の保護、発掘調査面積の平準化、調査員の確保などについて継続的に協議した結果、現状保存が困難な部分については発掘調査を行い記録保存の措置をとることになり、平成９年度に母智丘谷遺跡から発掘調査を開始した。

今回報告する豊満大谷遺跡と野添遺跡は、農業用道路建設予定地の７工区に位置し、周知の遺跡である王子原遺跡などに隣接することから遺構・遺物の存在が確実視された。そこで県文化課が確認調査を行った結果（豊満大谷遺跡：平成12年５月24～31日、野添遺跡：平成12年10月30～31日）、設定した各トレンチにおいて検出状況や出土量に差異はあるものの遺構・遺物を確認した。両遺跡とも設定したトレンチから縄文時代後期の土器や中世の土師器類が出土したことから、本調査を実施する運びとなった。

調査は緑資源公団都城建設事業所長の依頼により宮崎県埋蔵文化財センターが、豊満大谷遺跡を平成13年７月24日～平成13年10月９日、野添遺跡を平成13年11月13日～平成14年２月15日の期間でそれぞれ実施した。

第２節　調査の組織

豊満大谷遺跡・野添遺跡　発掘調査（平成13年度）

宮崎県埋蔵文化センター

所長	矢野　剛
副所長兼総務課長	菊地茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課総務係長	亀井維子
調査第二課調査第四係長	永友良典
同　主査	玉利勇二
同調査員（嘱託）	工藤基志（豊満大谷遺跡調査担当）

豊満大谷遺跡・野添遺跡　整理および報告書作成（平成14年度～平成15年度）

宮崎県埋蔵文化センター

所長	米良弘康
副所長兼総務課長	大薗和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課総務係長	野邊　文博（平成14年）石川　恵史（平成15年）
調査第二課調査第四係長	永友良典（平成14年）近藤　協（平成15年）
同　主査	玉利勇二

第Ⅱ章　豊満大谷・野添遺跡の立地と環境

都城市は宮崎県西南端の鹿児島県境に接した位置にあり、東側を鰐塚山系、西側を瓶台山や白鹿岳などの山地や高千穂峰をはじめとする霧島山系に囲まれた盆地の中央部に位置する。盆地の北西側と南側には洪積層といわれる台地や段丘が残っているが、シラスとよばれる入戸火砕流やその上層の火山灰などからなる特殊な土壌であり、水利の便に乏しく、畑地や原野が大部分を占める。盆地の中央から東は、北に向かって流れる大淀川に支流河川の沖水川・萩原川・梅北川・横市川・庄内川・丸谷川などが流れ込み、その周辺に広大な沖積低地が発達して水田が多い。豊満大谷遺跡（第１図－１：都城市豊満町字大谷）と野添遺跡（第１図－２：都城市安久町字前畑）は市域南西部の豊満町・安久町に所在し、都城盆地南部を西流する萩原川左岸の金御岳（標高472ｍ）から派生する標高約190ｍの丘陵裾台地上に位置する。

両遺跡周辺の遺跡の時代を追って概観してみると、旧石器時代では両遺跡北西部を北流かる梅北川左岸に細石刃石器群が確認された大岩田上村遺跡（第１図－８）が位置する。縄文時代早期では大淀川と梅北川に挟まれた台地上の宮尾・立野遺跡（第１図－11）で斜縄文を施した深鉢形の土器が出土し、五十市式土器として市の有形文化財に指定され、萩原川左岸の天ヶ渕遺跡（第１図－６）でも早期の土器が出土している。梅北川上流の緩毛原第２遺跡（第１図－21）では前期～中期の土器、大岩田上村遺跡や隣接する大岩田村ノ前遺跡（第１図－７）、梅北川を挟んだ台地上の横尾原遺跡（第１図－10）、黒土遺跡（第１図－９）、嫁坂遺跡（第１図－20）、王子原遺跡（第１図－４）、梅北佐土原遺跡（第１図－３）などでは後期・晩期を中心とした遺物や住居跡が出土している。とくに、黒土遺跡では胎土に炭化籾を含んだ晩期末の浅鉢形土器などの籾痕土器、擦切りの石庖丁などが発見され、南九州の稲作開始に新たな資料を提供している。弥生時代～古墳時代の遺跡としては、黒土遺跡、大岩田村ノ前遺跡、市街地南東部の上ノ園第２遺跡（第１図－５）、鹿児島県に隣接した大淀川右岸の坂ノ下遺跡（第１図－12）、梅北川上流の段丘上に位置する大浦遺跡（第１図－22）など竪穴住居跡を検出した遺跡があげられる。中世～近世では、溝状遺構や道路状遺構を検出した大岩田村ノ前遺跡、大岩田上村遺跡、黒土遺跡、水田跡や畠跡を検出した天ヶ渕遺跡、鏑尾遺跡（第１図－13）、嫁坂遺跡、天ヶ渕遺跡の後背丘陵地に位置する中世城郭の六ヶ城、池平城、中世の砦跡といわれる天ヶ峯陣跡（第１図－19）、金御岳遺跡（第１図－15）、寺院跡の西生寺跡（第１図－17：古代、近世）、千手院跡（第１図－23）、勝軍院跡（第１図－16）、近世の道標である国指定史跡今町一里塚（第１図－14）など、多くの遺跡が確認されている。

［参考・引用文献］

『宮崎県史』資料編　考古Ⅰ　宮崎県史刊行会　1989

「都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）」『都城市文化財調査報告書』第６集　都城市教育委員会　1987

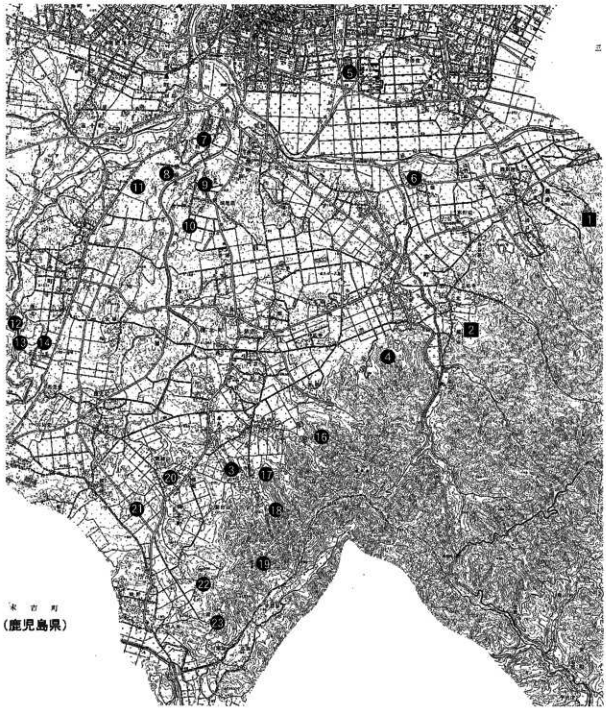
「大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書」『都城市文化財調査報告書』第14集　都城市教育委員会　1991

「黒土遺跡」『都城市文化財調査報告書』第28集　都城市教育委員会　1994

「天ヶ渕遺跡」『都城市文化財調査報告書』第33集　都城市教育委員会　1995

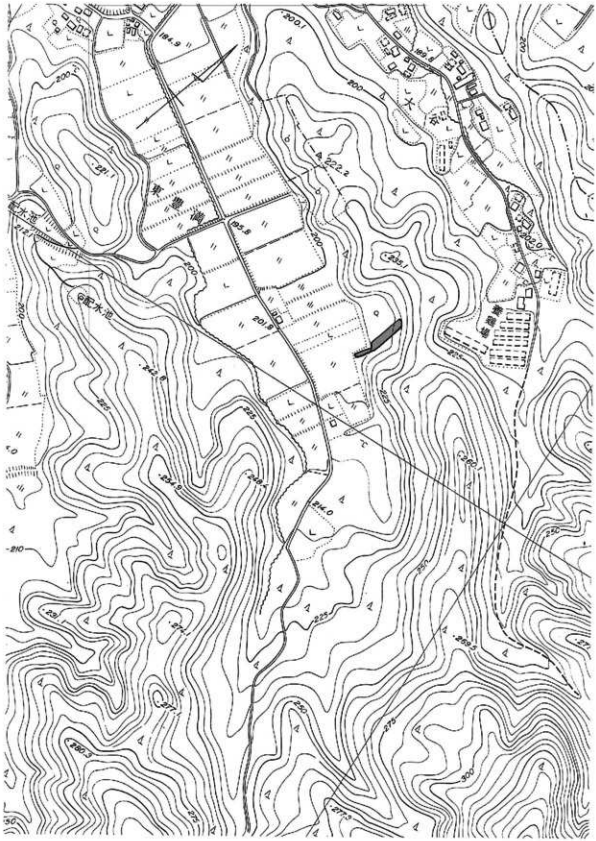
「梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・養原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第42集　2001

「王子原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第45集　2001



1．豊満大谷遺跡	2．野添遺跡	3．梅北佐土原遺跡	4．王子原遺跡
5．上の園第２遺跡	6．天ヶ渕遺跡	7．大岩田村ノ前遺跡	8．大岩田上村遺跡
9．黒土遺跡	10．横尾原遺跡	11．宮尾・立野遺跡	12．坂ノ下遺跡
13．鏑尾遺跡	14．今町一里塚	15．金御岳遺跡	16．勝軍院跡
17．西生寺院（近世）	18．西生寺跡（平安）	19．天ヶ峯陣跡	20．線坂遺跡
21．緩和毛原第２遺跡	22．人浦遺跡	23．千手院跡	

第１図　遺跡位置図（１／50,000）



第２図　豊満大谷遺跡周辺地形図（１／5,000）

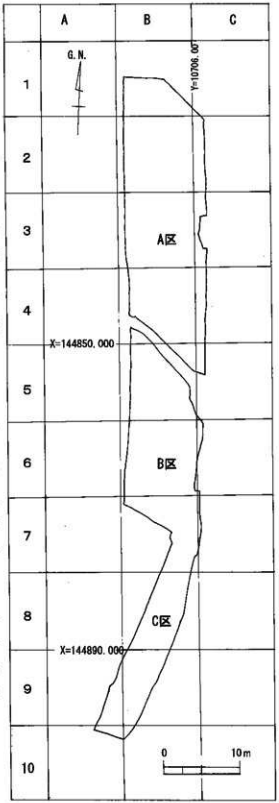
第Ⅲ章　豊満大谷遺跡の調査

第１節　調査の概要

豊満大谷遺跡の発掘調査は農業用道路建設部分である約1,100㎡について実施した。調査ではまず試掘により調査区全体の遺物包含層の確認を行った後、畑境を基準に便宜的に調査区を北からＡ・Ｂ・Ｃと３分し、平成13年７月24日にＡ区・Ｂ区同時に本調査を開始した。調査区全体は、丘陵の尾根筋であったところを過去に開墾したと考えられ、各区はいずれも上部が撹乱されている状態であった。特に、Ｃ区は撹乱の状況がひどく、そのためまずＣ区を排土置き場に設定した。

調査方法は遺物包含層（Ⅱａ層）まで重機により慎重に掘り進め、遺物が多く出土し始めたところで重機を止めた。以後は、包含層を手作業によって掘り下げ、第Ⅳ層で遺構を検出した。遺物は主に第Ⅱｃ層からⅣ層にかけて出土するが、第Ⅳ層からの検出遺構は竪穴住居跡１軒（ＳＡ１）、掘立柱建物跡１棟（ＳＢ１）土坑４基（ＳＣ４・５・６・７）、集石状遺構１基、溝状遺構８条（ＳＥ１・２・３・４・５・６・７・８）、畝状遺構、道路状遺構１条（ＳＧ１）である。さらに掘り下げたところ、第Ⅴ層からは、土坑３基（ＳＣ１・２・３）、石囲い炉１基を確認した。第Ⅴ層調査終了後にＣ区を重機により第Ⅴ層まで掘り下げたが、撹乱の状況がひどいこともあり、道路状遺構１条、溝状遺構１条だけで遺物は確認できなかった。調査区が狭小であったためそれ以上の深掘は避け、平成13年10月９日に調査を終了した。

調査区には、国土座標に準じた10m×10mグリッドを単位とし３つの調査区を覆うように設定し、東西方向にアルファベット（東よりＡ．Ｂ．Ｃ）を、また南北方向に数字（北より１．２．３．…）をそれぞれ付した。



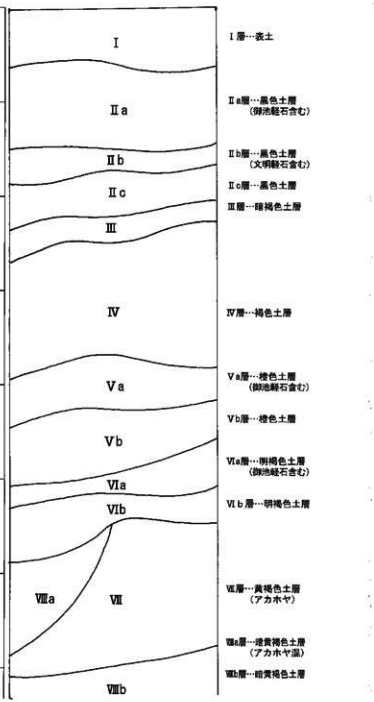
第３図　豊満大谷遺跡　グリッド配置図（１／500）

第２節　基本層序

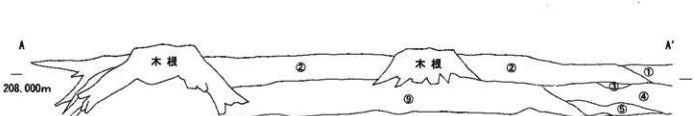
遺跡の地形は、北側から山裾に向けて緩斜面を形成している。また調査区の中央付近は明治以降の開墾地であったため、土層の堆積が一様ではなく、各層とも全体的には調査区南側の山裾に向かって堆積が厚くなる。調査区は基本的に、霧島御池軽石（霧島御池から約4,200年前に噴出したと思われる）上面まで掘り下げたが、より下位の文化層の存在を把握するために、Ａ区北側の壁面に深掘りトレンチを設定し、アカホヤ火山灰層下位面まで確認した。そのトレンチの土層断面図を基本土層として、層ごとに堆積状況について記述する。

第Ⅰ層は、現代の畑の耕作土および、山林の腐植土層で、オリーブ黒色砂質シルト層が20cm～30cm堆積している。第Ⅱ層は文明降下軽石（白ボラ）・御池軽石（御池ボラ）の混入割合によって性質が異なっており、３層に細分できる。上層から１mm程度の御池軽石粒がわずかに混入し粘性の全くない黒色土をⅡａ層とし、１mm～５mm程度の文明降下軽石粒が多く混入し粘性の無い黒色土層をⅡｂ層、１mm以下の黄橙色粒子を微量に含み粘性のある黒色土層をⅡｃ層とした。Ⅱｃ層の下位から第Ⅲ層の暗褐色にかけ古代～中世の遺物が豊富に出土した。第Ⅳ層の霧島御池軽石混じりの褐色土層は遺物包含層が50cm～60cmで堆積しており、縄文後晩期の遺物と遺構が確認された。第Ⅳ層下位には霧島御池降下軽石純層が堆積し、第Ⅴ層も２層に細分できるⅤａ層は粘性のないｌmm以下の黄橙色粒子が30cmほど堆積し、Ⅴｂ層は粘性のない１mm～３mmの黄橙色粒子が40cm～50cm堆積している。第Ⅵ層は明褐色土層で霧島御池軽石の混入の割合によって２層に分かれる。直径２mm～５mm程度の軽石を多量に含む明褐色土で軟質でやや粘性を持つⅥａ層と直径１cm～３cmの軽石を少量含み軟質で粘性がない明褐色土をⅥｂ層とした。約40cmほど堆積している。第Ⅶ層はアカホヤ火山灰層で70cm～80cmある。約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した火山灰である。第Ⅷ層は暗黄褐色軽石混褐色土で上部に直径２mm～５mm程度の黄・クリーム色の軽石粒を多く含み、下部からは２mm～５mm程度の橙・黄褐色の軽石粒を含んでいる。

上記の基本土層はＡ区～Ｂ区で確認されたが、Ｃ区は撹乱の状況がひどく大きく堆積状況が異なる。

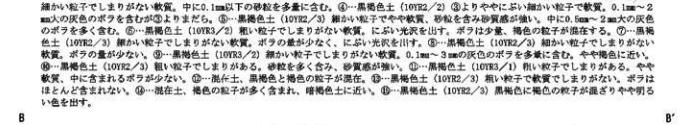


第４図　豊満大谷遺跡　基本土層柱状図



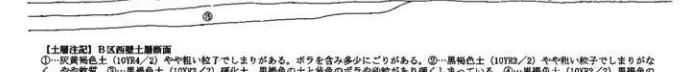
【土層注記】A区西壁土層断面

①…黒褐色土（10YR3/1）細かい粒子でしまりがある硬質。にぶい光沢を出し、中に0.1mm～2mmの灰色のボラを多く含む。又0.1mm大の白灰色のボラを多く含む。②…黒褐色土（10YR2/2）細かい粒子でしまりがあり、中に0.1mm～2mm大の灰色のボラを多く含む。③…黒褐色土（10YR2/2）細かい粒子でしまりがない軟質。中に0.1mm以下の砂粒を多量に含む。④…黒褐色土（10YR2/2）③よりややにぶい細かい粒子で軟質。0.1mm～2mm大の灰色のボラを含むが②よりまだら。⑤…黒褐色土（10YR2/3）細かい粒子でやや軟質、砂粒を含み砂質感が強い。中に0.5mm～2mm大の灰色のボラを多く含む。⑥…黒褐色土（10YR3/2）粗い粒子でしまりがない軟質。にぶい光沢を出す。ボラは少量、褐色の粒子が混在する。⑦…黒褐色土（10YR2/3）細かい粒子でしまりがない軟質。ボラの量が少なく、にぶい光沢を出す。⑧…黒褐色土（10YR2/3）細かい粒子でしまりがない軟質。ボラの量が少ない。⑨…黒褐色土（10YR3/2）細かい粒子でしまりがない軟質。0.1mm～2mmの灰色のボラを多量に含む。やや褐色に近い。⑩…黒褐色土（10YR2/3）粗い粒子でしまりがある。砂粒を多く含み、砂質感が強い。⑪…黒褐色土（10YR3/1）粗い粒子でしまりがある。やや軟質、中に含まれるボラが少ない。⑫…混在土。黒褐色と褐色の粒子が混在。⑬…黒褐色土（10YR2/3）粗い粒子で軟質でしまりがない。ボラはほとんど含まれない。⑭…混在土、褐色の粒子が多く含まれ、暗褐色土に近い。⑮…黒褐色土（10YR2/3）黒褐色に褐色の粒子が混ざりやや明るい色を出す。



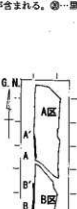
【土層注記】B区西壁土層断面

①…灰黄褐色土（10YR4/2）やや粗い粒子でしまりがある。ボラを含み多少にごりがある。②…黒褐色土（10YR3/2）やや粗い粒子でしまりがなく、やや軟質。③…黒褐色土（10YR3/2）硬化土。黒褐色の土と黄色のボラや砂粒があり硬くしまっている。④…黒褐色土（10YR2/2）黒褐色の土と黄色のボラがあり硬くしまっている。⑤…黒褐色土（10YR2/2）④に類似、黄色のボラが少なく、黒色の土が硬くしまっている。⑥…黒褐色土（10YR2/2）粗い粒子でしまりがなく、やや軟質。⑦…黒褐色土（10YR2/3）粗い粒子でしまりがあり、灰色のボラを含む。⑧…黒褐色土（10YR2/2）軟質土。黒褐色の土と砂粒があり硬くしまっている。⑨…黒褐色土（10YR3/2）軟質Ⅰ、黒色の縁い土の上下に赤褐色の帯が包むように入る。⑩…黒褐色土（10YR2/2）粗い粒子でしまりがあり、やや軟質。⑪…黒褐色土（10YR2/2）粗い粒子でしまりがあり、硬質。⑫…黒褐色土（10YR2/2）細かい粒子でしまりがあり、軟質。中に砂粒お含む。⑬…暗褐色土（10YR3/3）細かい粒子でしまりがあり、やや軟質。中に0.5mm～2mm大の黄色のボラを含む。⑭…暗褐色土（10YR3/2）軟質Ⅱ、暗褐色の上に黄色のボラを多く含む。⑮…暗褐色土（10YR3/2）細かい粒子でしまりがあり、やや軟質。下層に比べてやや明るく、黄色のボラの量が少ない。⑯…暗褐色土（10YR3/3）やや粗い粒子でしまりがあり、軟質。0.1mm～1mm大のボラを多く含む。⑰…混在土。暗褐色土が多く混在する。⑱…暗褐色土（10YR3/3）粗い粒子でしまりがなく、軟質。⑲…黒褐色土（10YR3/2）細かい粒子でしまりがあり、硬質。砂粒が含まれざらざらする。中に0.1mm大の灰色・白色・黄色のボラが含まれる。⑳…黒褐色土（10YR2/2）細かい粒子でしまりがあり、硬質。中に0.5mm～1mm大の灰色のボラが含まれる。



【土層注記】C区東壁土層断面

a…橙色（5YR6/8）1mm～3mmぐらいまでの橙色の軽石の層で、無機鉱物粒を含む。
b…黒褐色土（5YR2/1）粘性があり軟らかく、にぶい黄色の軽石を含む。
c…にぶい黄色土（2.5YR6/3）1mm～10mmぐらいまでのにぶい黄色の層で白色鉱物粒を含む。
d…黒色土（10YR1.7/1）粘性がありしまっている。明黄褐色の軽石を含む。
①…黒褐色土（10YR3/1）粘性があり、しまっている。明黄褐色の軽石を含む。
②…暗褐色土（10YR3/3）粘性があり、固くしまっている。明黄褐色の軽石を含む。
③…赤褐色土（2.5YR4/6）粘性があり、非常に固い。下部はIV層と同じような部分もある。
④…明黄褐色（10YR6/8）0.9mm～1mmと3mm～4mmの明黄褐色の軽石の層で、固くしまっている部分とそうでない部分がある。



第５図　豊満大谷遺跡　土層断面実測図（1/40）

第３節　調査の記録

遺構を検出した第Ⅲ層～第Ⅳ層は、標高208.25m～204.60mの南向き斜面で、調査区の北側から中央（Ａ区）は山頂に向かって急傾斜を形成するが、中御堀部から南（Ｂ・Ｃ区）に向けては緩傾斜となる。確認した遺構は竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟、土坑６基、集石状遺構１基、溝状遺構８条、畝状遺構、進路状遺構３条で、Ａ・Ｂ区全域から検出した。第Ⅴ層では、土坑１基、石囲い炉１基を検出した。遺物は縄文時代後晩期および古代のものが出土した。その中でも古代の遺物が多数を占める。

１　縄文時代の遺構と遺物

豊万大谷遺跡では縄文時代の遺構については、土坑１基、石囲い炉１基が検出された。遺構出土の遺物を概観すると、縄文時代後晩期に属するものであり、遺構もおおむね縄文時代後晩期の所産と考えられる。

(1)　土　坑

３号土坑（ＳＣ３：第７図）

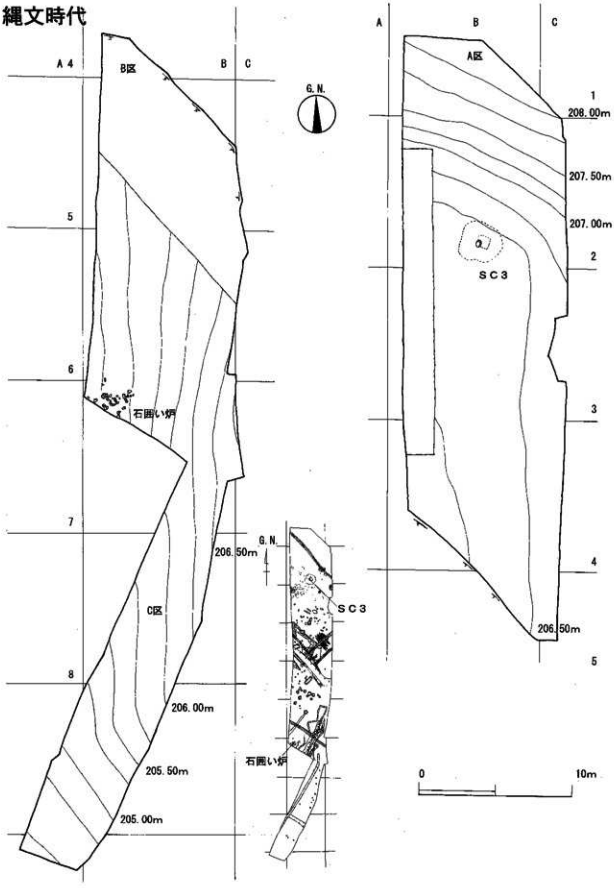
Ａ区中央のＢ３グリッドから検出された。確認面は第Ⅴ層（御池軽石＝御池ボラ層）上面で、平面形態は不整形で断面形態は皿状を呈する土坑である。既掘部分の規模は長軸約１m、短軸約0.52m、深さ17cmを測る。埋土は４層をなし、橙色土の濃度で分層している。上層より径３㎜内外の御池ボラと炭化物粒子を多く含み明赤褐色の焼土が混在する暗褐色土層（硬）、径２㎜内外の御池ボラと炭化物を多く含む黒褐色土層、御池ボラと炭化物を多く含み橙色と明赤褐色の焼土が混在する黒褐色土層、底面は径４㎜の御池ボラを含む暗褐色土で固い。橙色土は土坑内のほぼ中央に集中しているが、炭化物の混在する範囲は、南北方向2.4m、東西方向2.8mである。当初、竪穴住居跡を予測していたが、床面が判断できないことから、上面がほぼ削られた土坑とした。用途は不明で、出土遺物もない。

(2)　石囲い炉

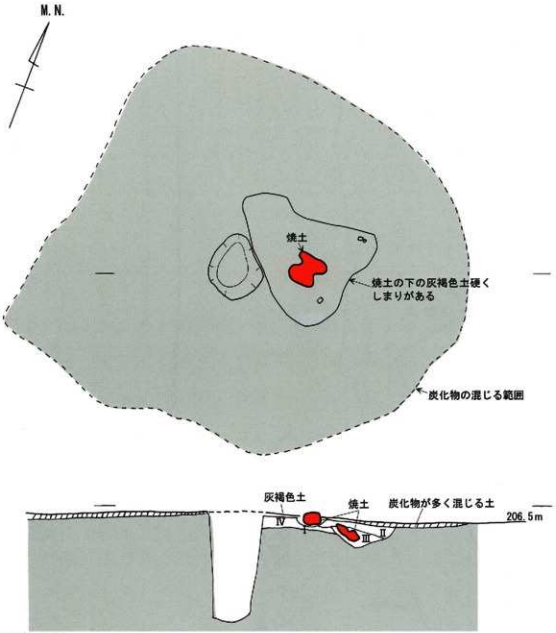
石囲い炉（第８図）

Ｂ区南端西側のＢ７グリッドから検出された。確認面は第Ⅴ層（御池ボラ層）の上面で遺構は260×270cmの範囲に礫が見られた。検出時は平面的に土坑を確認することはできなかったが、約15cmの厚みで重なった礫を除去すると、浅い皿状の落ち込みとなった。10cm前後の大きさの礫が使用され、全体に角張ったものが多かった。赤化した礫も数点あった。底面は径４㎜の御池ボラを含む暗褐色土で固く、厚さ１cm前後の焼土が60×70cm、105×145cmの範囲で２ヶ所で確認された。当初、竪穴住居跡を予測していたが、上面がほぼ削られ床面が判断できないことから検出不可能であった。また、炭化物等は確認できなかったが、遺物は出土している。

出土遺物は第９図に示している。この遺構に伴う遺物は主に中・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。１・３は内湾しながら口縁部が大きく開く浅鉢である。２・４・５は胴部があまり張らずにそのまま緩やかに外反する器形で口縁部に最大径をもつ深鉢である。１は口縁部に穿孔しており、内外面とも横・斜方向にナデ仕上げである。２は内外面に横・斜方向の貝殻条痕文がみられ、一部指押えもある。３は内外面に横方向の条痕が施されている。４・５は深鉢の胴屈曲部である。４は口縁部が緩やかに外反する。外面は横方向の貝殻条痕の後に横方向のナデを施し、内面には横方向の貝殻条痕の後に指ナデを行っている。５は胴上部で屈曲し口縁部がわずかに外反しながら開く。外面に横



第６図　豊満大谷遺跡　縄文時代の遺構分布図（１／250）



【土層注記】SC3

Ⅰ：暗褐色土（7.5YR3／3）固くしまりのある明赤褐色の焼土を含み、2㎜～3㎜の黄褐色の軽石（御池ボラ）と炭化物が多く混じる。

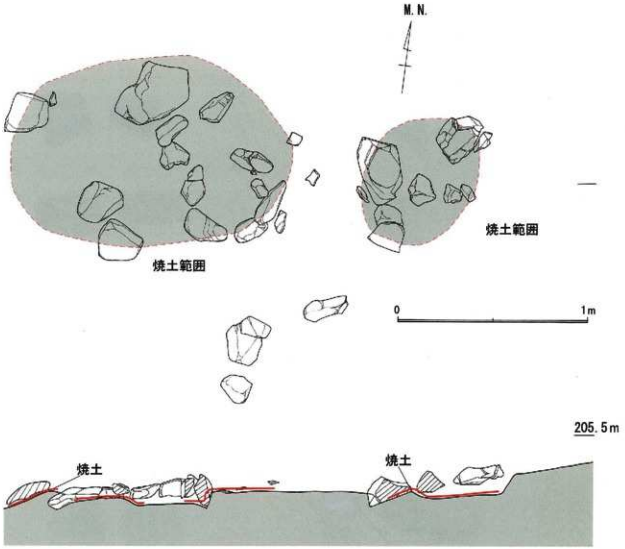
Ⅱ：黒褐色土（5YR2／1）1㎜～2㎜の黄褐色の軽石と炭化物を多く含む。粘性あり。

Ⅲ：黒褐色土（5YR3／1）Ⅱと類似しているが、橙色と明赤褐色の固くしまりのある焼土を含み、ボラと炭化物を多く含む。粘性あり。

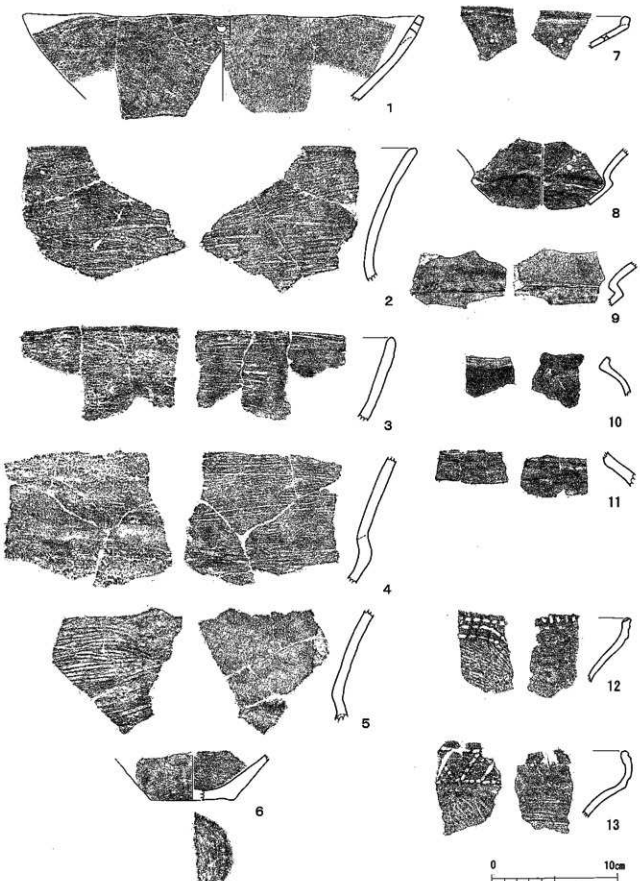
Ⅳ：暗褐色土（7.5YR3／3）Ⅰと似ているが焼土を含まない。粘性あり。

第７図　豊満大谷遺跡　３号土坑実測図（ＳＣ３：１／20）

方向の貝殻条痕文、内面には横方向のナデを施している。6は底部である。7～11は口縁部が短く、頸部で「く」字状に折れ、肩部から胴部にかけて緩やかに湾曲する黒色磨研系の精製浅鉢である。両面には横方向の研磨を施している。7は口縁部に穿孔を持つ。8・9は口縁部が外反し、頸部で短く屈曲している頸部片である。10・11は口縁部が欠損している肩部～胴部片である。12・13は外面が条痕、内面はナデ仕上げで、棒状工具による刺突も見られる。



第8図　豊満大谷遺跡　石囲い炉遺構実測図（1／20）



第９図　豊満大谷遺跡　石囲い炉出土土器実測図（１／３）

(3) 包含層出土の遺物

縄文時代の遺物包含層はA区・B区の第Ⅳ層である。粗製土器、黒色磨研土器を中心に後期・晩期の土器が出土している。これらは、器形や文様によって分類が可能である。ここでは、分類の基準と根拠を示し若干の説明を行う。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺物は第11図～第18図に示している。

1類（第10図14～第14図66）

粗製の深鉢を一括した。器形により6類に分類できる。

A　胴部屈曲部が張り、口縁部が緩やかに外反するもの。(14・33～35・65・66)
14は屈曲部に蝶ネクタイの貼付突帯を有し、器面調整は内外面に貝殻条痕後ナデを施している。
65は頸部が「く」の字に外反する。66は肩部に2条の沈線を巡らせている。

B　口縁部が直口あるいはわずかに外反するもの。(15・17)

C　口辺部が外傾するもので、最大径は口縁部にあるもの。(59～64)
59～62は無刻目突帯文で、63は鳥井原式の口縁帯をもつ中岳Ⅱ式である。64は口縁部にヒレ状の突起を有する。

D　胴部があまり張らず口縁部が直口あるいは外反するもの。(19～32)
25は口唇部直下に1条に沈線を巡らせている。

E　口縁部が外傾しながら直口するもの。(36～40)
36・37は外面に板状工具よる粗いナデ、内面は指圧痕がみられる。

F　口辺部が内傾しながら立ち上がるもの。(16・60)

2類（第13図45～58）

口縁部に突帯が巡るものを一括した。突帯の位置により2類に分類できる。

A　口縁帯に突帯を巡らせるもの。(45～51・54・57)
57は口縁部外面に小孔を連続させる孔列文土器

B　口縁部やや下位に断面三角形の突帯を巡らせるもの。(52・58)

3類（第13図53・55・56）

口縁部が外傾するもの。(53・55・56)

4類（第12図42）

胴部が張り出し口縁部に向かって内湾する精製の鉢(42)

5類（第10図18、第12図40・43・44）

胴上部で屈曲し口縁部がわずかに外反しながら開く粗製の鉢（18・40・43・44)
18は口縁部にヒレ状の突起を有する。

6類（第14図67～69）

粗製深鉢の底部を一括した。

A　端部が張り出し胴部がわずかに外傾しながら立ち上がる深鉢（67・68)

B　端部が張り出し胴部が開きながら立ち上がる深鉢。(69)

7類（第15図70～第17図108）

黒色磨研系の精製浅鉢を一括した。器形により8類に分類できる。器面調整は内外面とも丁寧なミガキ、ヘラミガキが施されている。

A　a　胴上部で屈曲し、口縁部がわずかに外反しながら開くもの。（70～75）
　　70・71は同一個体である。71～75は内外面に沈線を巡らし、玉緑状の口縁を呈するものである。
　b　口縁部が大きく外反するもの。（76）口縁内外面に沈線を巡らせている。
　c　皿状の器形を呈するもので、口縁部にリボン状の突起を有するもの。（77・78）
　d　口縁部が外傾するもので、口唇部直下両面に沈線を巡らせているもの。（79～81）
　　80は口縁部にリボン状の突起を有する。

B　胴上部で屈曲し口縁部が短く外反するもの。（82～85）
　口縁部玉縁状を呈し基本的に内外面に沈線を巡らせるが、沈線が不明で段を形成するものもみられる。

C　胴部が屈曲せず膨らみ口縁部が屈曲して短く外反するもの。（86～91）
　87・89・90は口縁端部に内外面に沈線を巡らせ端部が玉縁状を呈する。91は肩部上方に穿孔をもつ。

D　丸い胴部に直接短い口縁部が貼付されるものである。（92～94）

E　胴部で屈曲し、口縁部が内傾した後大きく外反し口縁端部が屈曲して立ち上がるもの。（95～97）
　95は口縁部にリボン状の突起を有し、97はリボン状の突起を有する。

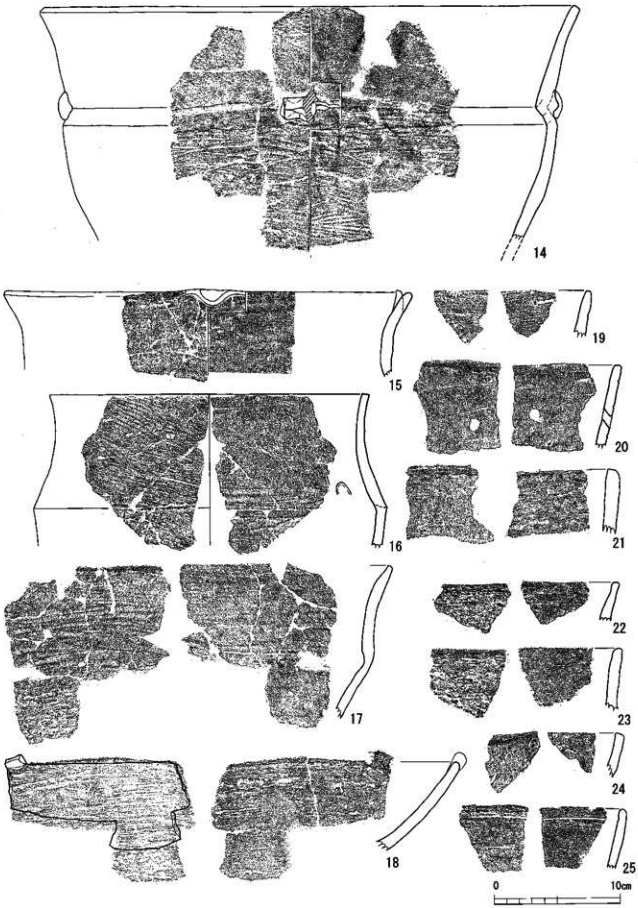
F　胴部が屈曲し、口縁部が屈曲して短く外反するもの。（98・100）
　98は屈曲部にリボン状の突帯を有する。

G　胴部が屈曲せず膨らみ口縁部が屈曲して短く外反すもの。（99・101）

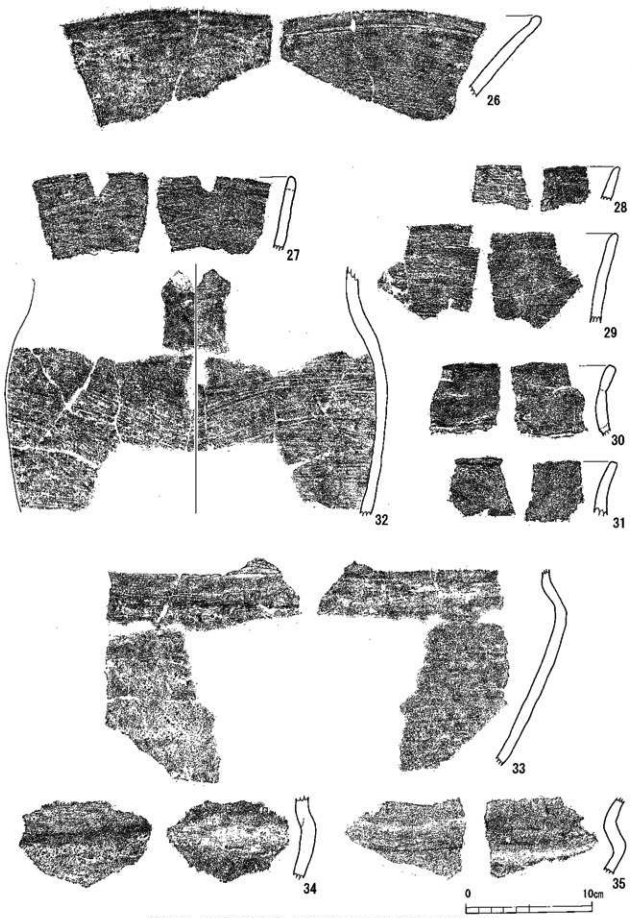
H　胴部で屈曲し口縁部が内傾するもの。（102～108）

8類（第17図109～105）

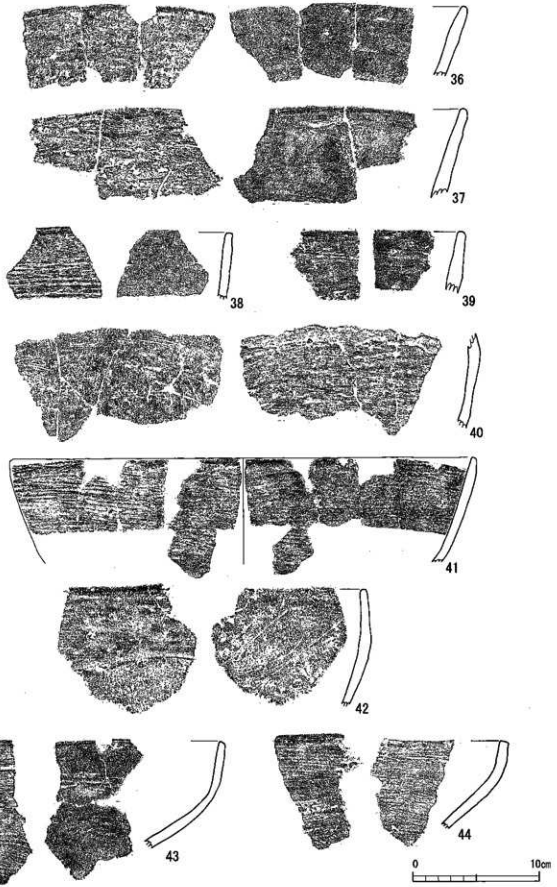
109～115は第Ⅳ層その他の土器である。109は口縁に向かって外反ぎみに開く深鉢の口縁部片である。外面の調整は胴部から口縁部にかけて斜方向のナデ、口縁端部に横方向のナデを施している。一部黒変が見られる。内面は胴部から口縁部にかけて横方向のナデを施し、口縁端部に一部黒変が見られる。110は皿状の器形を呈する浅鉢の口縁部片である。内外面ともミガキが施されているが、外面の調整は粗い。111は胴上部で屈曲し口縁部が短く外反する精製浅鉢の口縁部片である。内外面に丁寧なナデが施されている。112は口縁部が外傾しながら立ち上がる精製浅鉢の口縁部～胴部片である。内外面に丁寧なナデが施され、口縁部にリボン状の突起を有する。113は胴上部で屈曲し口縁部が短く外反する口縁部～胴部片である。胴屈曲部と口縁端部がほぼ同径で最大径となる。内外面に横方向の粗いミガキが施されている。114は外側に向けて大きく開く口縁部で頸部と胴部の2ヵ所で「く」字状に屈曲する深鉢の胴部片である。器壁は3㎜～5㎜と薄い。内外面ともミガキが施されている。115は縄文時代前期後半の曽畑2式土器の口縁部片である。口縁部が直線的弱い外反をもった深鉢丸底の器形と思われる。口縁部には平行線文を4～5条施し、内面にも同様の文様が施されている。文様は整然と規則的な配列をなし文様は詳明である。内外面とも横方向のナデが施されている。



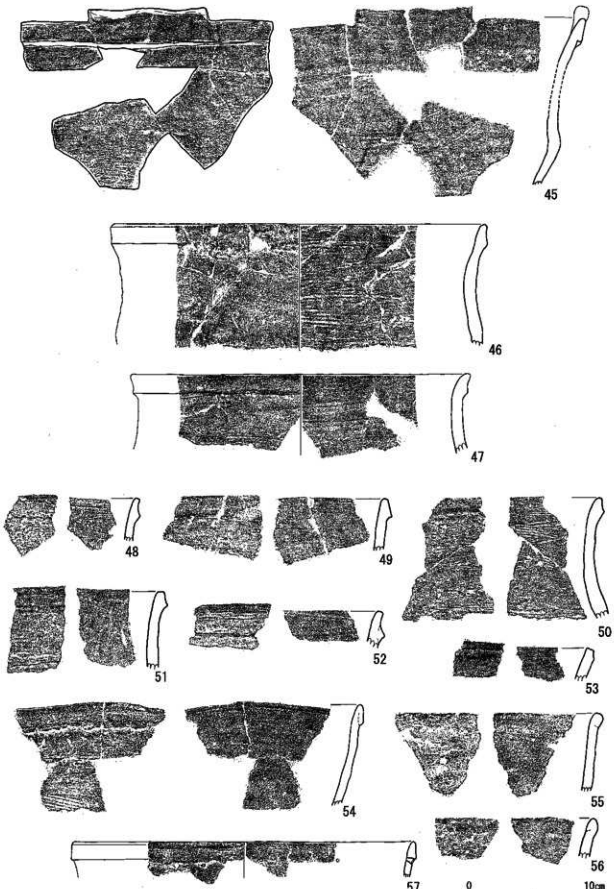
第10図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(1)（1／3）



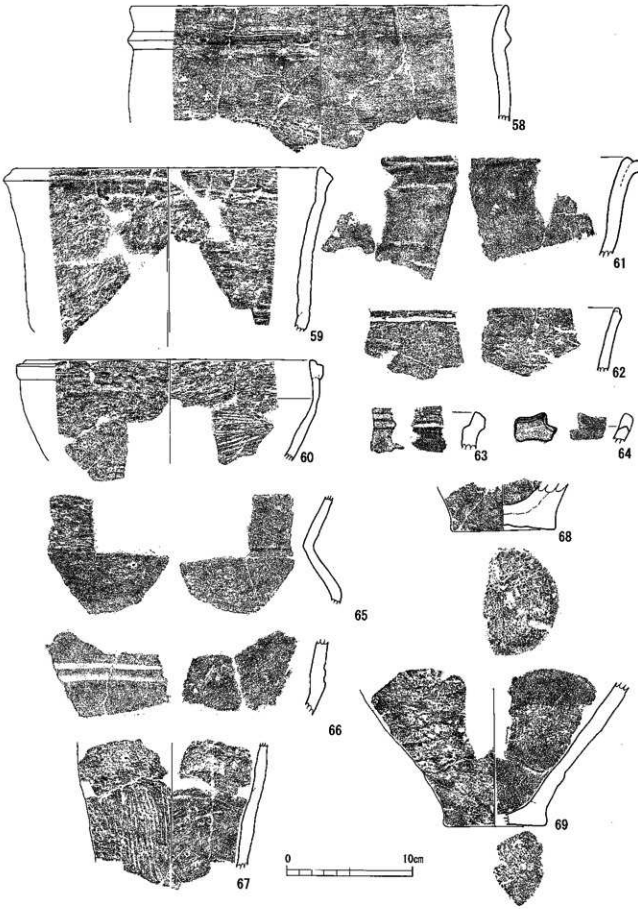
第11図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(2)（1／3）



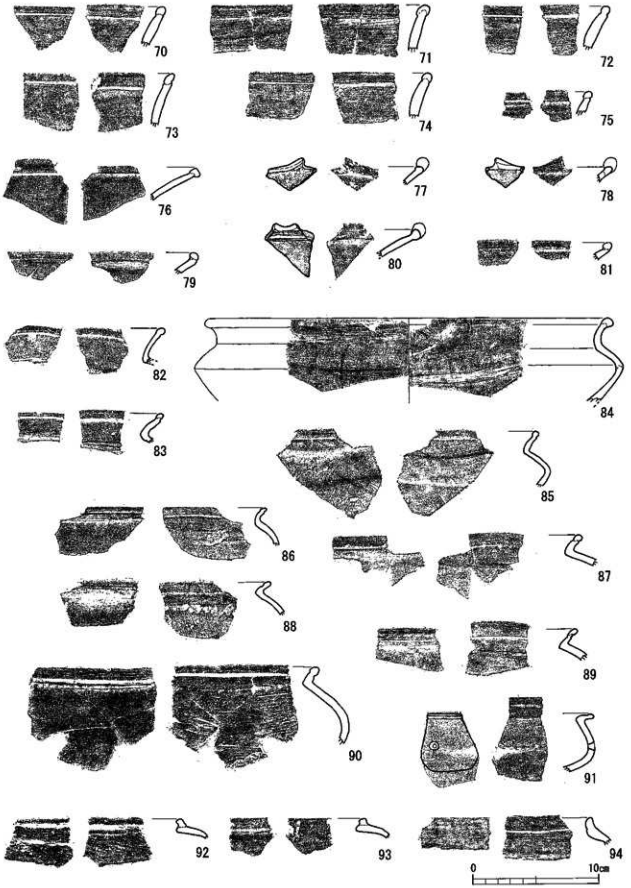
第12図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(3)（1／3）



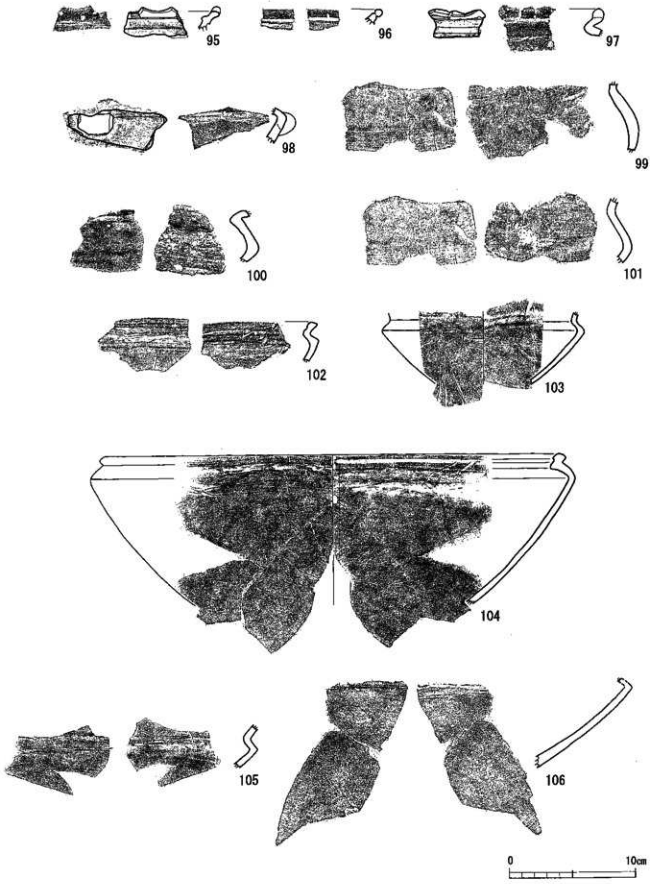
第13図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(4)（1／3）



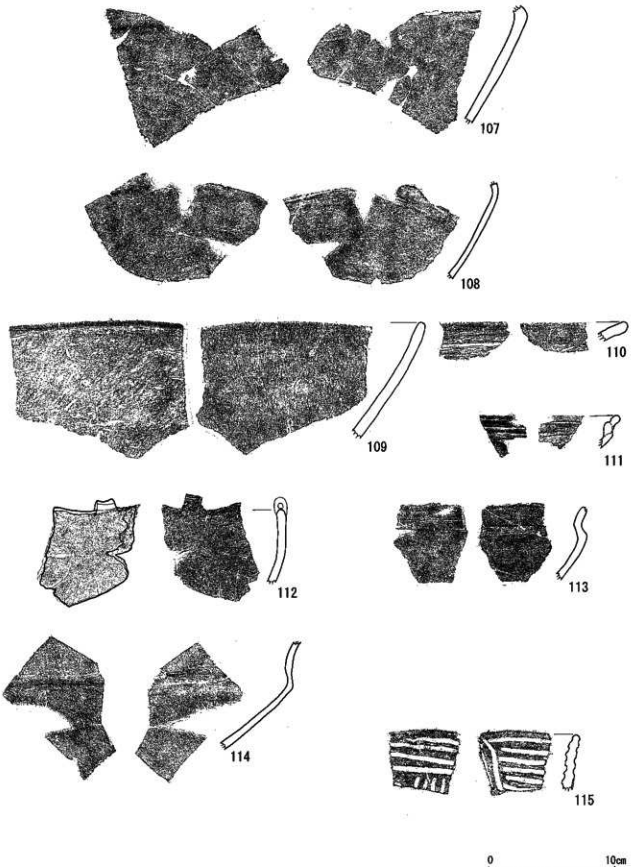
第14図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(5)（1／3）



第15図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(6)（1／3）



第16図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(7)（1／3）



第17図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(8)（1／3）

第１表　豊満大谷遺跡　土器観察表(1)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(㎝)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	B区：南東石囲い炉	深鉢	口縁部	推定31.7			横方向のナデ、スス付着、粗いナデ	横方向のナデ、スス付着	にぶい橙	にぶい黄橙	4㎜以下の褐色の砂粒、2㎜以下の半透明、透明の光沢粒、微細な黒色の光沢粒	
2	縄文土器	B区：南東石囲い炉	深鉢	口縁部				貝殻条痕文、スス付着指頭痕	貝殻条痕文、指頭痕	にぶい黄橙	浅黄橙	3㎜以下の不透明の光沢粒、2㎜以下の褐色の砂粒及び砂粒及び透明の光沢粒、1.5㎜以下の半透明の光沢粒、3㎜以下の明黄褐の砂粒	
3	縄文土器	B区：南東石囲い炉	深鉢	口縁部				横方向の条痕	横方向の条痕の後ミガキ	にぶい褐色 オリーブ黒	橙	微細な黒色光沢粒、微細～2㎜大の透明光沢粒、2㎜以下の赤褐色粒	黒変
4	縄文土器	B区：南東石囲い炉	深鉢	屈曲部				貝殻条痕文後に横方向のナデ	貝殻条痕文、指ナデ	明黄褐	暗灰黄	3㎜以下の不透明、半透明の光沢粒、2㎜以下の黒褐色の砂粒、微細な黒色の光沢粒	風化
5	縄文土器	B区：南東石囲い炉	深鉢	屈曲部				貝殻条痕文、スス付着部分的に指頭痕	横方向にナデ	明黄褐	にぶい橙	6㎜以下の褐色、3㎜以下の透明・不透明の光沢粒	風化
6	縄文土器	B区：南東	深鉢	底部		推定6.4		工具によるナデ	横方向にミガキ	にぶい黄橙 灰	にぶい黄橙	微細な乳白色・暗褐色・赤褐色・透明光沢の粒、2㎜大の暗褐色の粒	
7	縄文土器	B区：南東石囲い炉	浅鉢	口縁部～胴部				横方向にミガキ	横方向にミガキ			0.1～1㎜大の白灰・灰褐色の粒、3㎜のにぶい褐色の粒	
8	縄文土器	B区：南東石囲い炉	浅鉢	頸部				ミガキ	ミガキ	黒褐	灰黄褐	1㎜以下の半透明光沢粒	
9	縄文土器	B区：南東石囲い炉	浅鉢	頸部				ミガキ、スス付着	ミガキ	灰褐	黒褐	精良	
10	縄文土器	B区：南東石囲い炉	浅鉢	肩部～胴部				ミガキ	ミガキ	暗赤褐	黒褐	2㎜以下の光沢粒、微細な乳白色粒	
11	縄文土器	B区：南東石囲い炉	深鉢	肩部～胴部				ミガキ、スス付着	ミガキ、ケズリ	褐灰	褐灰	1.5㎜以下の乳白色粒、半透明光沢粒	
12	縄文土器	B区：南東石囲い炉	深鉢	口縁部				棒状工具押引、沈線、条痕、スス付着	指ナデ、押圧刻み、ナデ	黒褐	にぶい黄橙 黒褐	2㎜以下の乳白色・茶褐色・黒色光沢粒	
13	縄文土器	B区：南東石囲い炉	深鉢	口縁部				棒状工具押引、条痕、指ナデ	横方向のナデ、指ナデ	明黄褐 褐灰	明黄褐 黒褐	1㎜前後の黒褐色・灰褐色の粒、白色透明な光沢粒	
14	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部～胴部	推定42.2			条痕文、ネクタイ状の突帯、指頭痕	横ナデ後指ナデ、条痕	にぶい黄褐	にぶい橙	3㎜以下の透明、半透明の光沢粒、3㎜以下の褐色の砂粒、2㎜以下の黒色の光沢粒	
15	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、スス付着	工具による横方向のナデ	灰黄	浅黄	2㎜以下のにぶい赤褐色・灰色粒、1㎜以下の灰白・乳白・透明色粒	風化
16	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部～胴部				指頭痕、斜め方向にミガキ、ナデ	丁寧な横方向のナデ、指頭痕	浅黄 黄灰	浅黄 黄灰	微細な光沢のある白色の粒、1㎜以下の白い粒	
17	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部～胴部				横・斜め方向の条痕文	横方向の条痕文後ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	2㎜以下の灰色・透明光沢粒	風化
18	縄文土器	A区：Ⅳ層	鉢	口縁部	推定46.4			粗いナデの上を工具によるナデ	粗いナデの上を横方向にヘラミガキ	黒褐 にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明に光るガラス質の細片、半透明のガラス質の細片、0.3～2㎜大の乳白色・茶灰色の砂粒、3㎜大の灰黄色の砂粒	
19	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、スス付着	ナデ	黄灰	にぶい黄 黄灰	光る微粒子、黒く光るガラス質の細片、0.5～1㎜大の白・灰・茶色の砂粒	
20	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部～胴部				ナデ、沈線	横方向のナデ	にぶい褐 黒褐	黒褐	微細な光沢のある白色の粒	
21	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗いナデ、スス付着	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	5㎜以下の赤褐色粒、2.5㎜以下の乳白色粒・半透明光沢粒	
22	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗いナデ、スス付着、指頭痕	横ナデ、指頭痕	灰黄褐	灰黄	3㎜以下の灰白の砂粒、2㎜以下の黒色の光沢粒及び透明の光沢粒	
23	縄文土器	C区	深鉢	口縁部				ナデ、スス付着	ナデ	灰黄褐	灰黄	3㎜以下の透明光沢粒、1㎜以下の乳白色粒、黒色光沢粒	
24	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗いナデ、スス付着	板状工具による横方向のナデ	灰黄色	灰黄褐	7㎜以下の黒褐色の砂粒、2.5㎜以下の透明の光沢粒及びにぶい赤褐の砂粒、1㎜以下の灰白の砂粒	
25	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				沈線、丁寧なナデ、スス付着	沈線、丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の不透明な光沢粒、1㎜以下の透明な光沢粒、1㎜以下の黒色の光沢粒	
26	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗いナデ、全体にスス付着	工具による横方向のナデ	オリーブ黒	明黄褐	微細～2㎜大の透明光沢粒、1㎜以下の淡黄の粒	
27	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗いナデ、ナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐 黒褐	褐	1㎜以下の肌色・白色・灰色・褐色の粒ガラス質に光る細粒	
28	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				条痕文、スス付着、指頭痕	ミガキ、指頭痕	灰黄	黄灰	2.5㎜以下の透明な光沢粒、1㎜以下の黒色の光沢粒	
29	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				ナデ、ミガキ、スス付着	ミガキ	暗灰黄	にぶい黄橙	3㎜以下の半透明光沢粒	
30	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				ナデ、工具痕	ナデ、工具痕	灰黄褐	にぶい黄橙	2㎜以下の透明・半透明の光沢粒、1㎜以下の橙色・黒色・淡黄色粒	
31	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				ナデ、スス付着	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	3㎜以下の褐色粒、2㎜以下の半透明光沢粒、1.5㎜以下の黒色光沢粒	
32	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	胴部				丁寧なナデ、スス付着、条痕（粗い）	丁寧なナデ、横方向にケズリ、条痕（粗い）	にぶい黄褐	黄灰	2㎜程度の褐色・灰色・肌色・白色・乳白色の粒、光る粒	
33	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	屈曲部～胴部				ミガキ、粗いナデ、指頭痕	条痕の後ナデ	灰黄 黒褐	灰黄	4㎜以下の灰白・橙・灰褐色・透明光沢黒色光沢の粒	
34	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	屈曲部				横ナデ、スス付着	横方向のナデ、指頭痕	黄褐	にぶい黄褐 黒褐	4㎜以下の白色不透明の粒、光沢のある微細粒	
35	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	屈曲部				ナデ、スス付着	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	4㎜以下の灰褐・灰白・橙色・黒色光沢の砂粒	
36	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				横方向に板状工具による粗いナデ、指頭痕	横方向のミガキ、指頭痕、黒斑	淡黄	浅黄橙	3㎜以下の透明の光沢粒、2㎜以下の灰色の砂粒、微細な橙色の砂粒	
37	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				横・斜め方向に板状工具による粗いナデ	横方向にミガキ、指頭痕	淡黄	浅黄	4㎜以下の褐色の砂粒、4㎜以下の透明の光沢粒、2㎜以下の黒色の光沢粒	風化

第２表　豊満大谷遺跡　土器観察表(2)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
38	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				条痕	ミガキ	にぶい黄	暗灰黄	2㎜以下の半透明光沢粒	
39	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				条痕の上ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	5㎜以下の赤褐色粒、2.5㎜以下の黒色・半透明光沢粒	
40	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	屈曲部				貝殻条痕の後指ナデ、一部スス付着	横方向の条痕の後指ナデ	暗灰黄	浅黄	1㎜以下の白色不透明の粒	
41	縄文土器	A区：Ⅳ層	鉢	口縁部				横方向のナデ、斜め方向のミガキ	一部黒変、横方向のミガキ	黒褐	にぶい黄褐	1㎜以下の淡黄・褐色・透明光沢・黒色光沢粒	黒変
42	縄文土器	A区：Ⅳ層	鉢	口縁部〜胴部				横方向のナデ、スス付着、粗いナデ	ナデ	にぶい黄 浅黄	にぶい黄	微細な淡黄色粒、1〜2㎜の淡黄・白色粒	
43	縄文土器	A区：Ⅳ層	鉢	口縁部〜胴部				横方向の条痕文後ナデ、スス付着	条痕文後ミガキ	灰黄	浅黄	1㎜以下の灰白・半透明色の粒	風化
44	縄文土器	A区	鉢	口縁部〜胴部				横方向の条痕文、丁寧なナデ	条痕文後ミガキ	橙	橙	2㎜以下の黒・灰白・半透明・透明光沢粒	
45	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗い指ナデ	条痕文の後ナデ	淡黄	淡黄	3㎜以下の灰白・半透明色粒、1㎜以下の透明光沢粒	
46	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部	推定29.4			粗い横方向のナデ、指頭痕、全体的にスス付着	ナデ後に指押え、横方向のナデ後に指ナデ	灰褐	にぶい橙	3㎜以下の灰白・にぶい褐色・褐灰の砂粒、微細な透明・半透明の光沢粒	風化
47	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部	推定27.0			工具によるナデ、スス付着	工具によるナデ、黒斑、条痕の後ナデ	明黄褐	浅黄　橙	2㎜以下の黒色光沢・透明光沢・乳白色の粒	
48	縄文土器	4トレンチ	深鉢	口縁部				指頭痕、剥離、条痕文	条痕文	灰	灰オリーブ	1㎜以下の灰白色、透明光沢粒	
49	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				風化著しい、スス付着、指頭痕	ナデ、指押え後ナデ	褐灰	にぶい黄橙	2㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒	
50	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				指押え、条痕の後指押え	横・斜め方向の条痕文指押え後ナデ	灰黄 黄灰	灰 にぶい黄	2㎜以下の灰白・透明光沢粒、微細な黒色光沢粒	
51	縄文土器	B区：南	深鉢	口縁部				突帯、条痕の上ナデ、スス付着	ナデ、スス付着	黒褐	黒褐	2.5㎜以下の半透明光沢粒、2㎜以下の乳白色粒	
52	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗い指ナデ	条痕文の後ナデ	淡黄	淡黄	3㎜以下の灰白・半透明色粒、1㎜以下の透明光沢粒	
53	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				ナデ	ミガキ、丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい褐	4㎜以下の褐色粒、1㎜以下の乳白色粒微細な光沢粒	
54	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、指頭痕	横方向のミガキ	にぶい黄橙	橙	4㎜以下の褐灰の粒、2㎜以下の半透明及び透明の光沢粒、1㎜以下の黒色粒	風化
55	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗いナデ、スス付着	横方向に丁寧なナデ、工具痕	褐	にぶい橙	白色・肌色・褐色・茶色・灰色の粒、光る粒	
56	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗いナデ、スス付着、指押え	横・斜め方向に粗いナデ指頭痕	黄灰	暗灰黄	2㎜以下の透明の光沢粒、1㎜以下の灰白の砂粒	
57	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部	推定27.0			横ナデの後に指押え、スス付着、穿孔	穿孔、横ナデ、指頭痕	灰褐	灰褐	2㎜以下の不透明・半透明の光沢粒、3㎜以下の褐色の砂粒	
58	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部	推定30.0			工具による横方向のナデ	ナデ、条痕の上のナデ	橙	にぶい黄 にぶい橙	1㎜以下の黒色・乳白色・灰色の粒、2㎜以下の淡黄色の粒、4㎜以下の赤褐色粒、8㎜大の赤褐色粒1個	
59	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部	推定24.2			斜め方向にナデ、スス付着	条痕	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 褐灰	2㎜以下の乳白色・灰褐色・茶褐色を多く含む白色光沢粒、5㎜茶褐色粒	
60	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部〜胴部	推定22.2			条痕の上ナデ、スス付着	条痕、一部スス付着	浅黄	にぶい黄橙	2.5㎜以下の半透明光沢粒、1㎜以下の黒色光沢粒	
61	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗い横方向のナデ、指頭痕、全体的にスス付着	ナデ後に指押え、横方向のナデ後に指ナデ	灰褐	にぶい橙	3㎜以下の灰白・にぶい褐色・褐灰の砂粒、微細な透明・半透明の光沢粒	風化
62	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				横方向のナデの後に指押え、スス付着、工具痕	横方向のナデの後に指押え	浅黄橙	浅黄橙	5㎜以下の橙色の砂粒、3㎜以下の浅黄橙の砂粒、半透明・不透明・透明な光沢粒	風化
63	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				棒状工具による凹線、横ナデ	横方向のナデ	にぶい橙	にぶい橙	4㎜以下の灰白の砂粒、2.5㎜以下の透明な光沢粒	
64	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				粗いナデ	横方向にミガキ	にぶい橙	明赤褐	1.5㎜以下の透明の光沢粒、微細な灰白の砂粒	
65	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	屈曲部				ナデ、スス付着	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	2㎜以下の浅灰黄・橙・灰白色・透明光沢の砂粒	
66	縄文土器	1トレンチ	深鉢	屈曲部		推定8.4		ナデ、2段の沈線	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	2㎜以下の淡橙・灰白色・透明光沢・黒色光沢の砂粒	
67	縄文土器	A区：トレンチ	深鉢	胴部		推定8.2		横ナデの上を条痕、斜め方向の貝殻条痕	条痕の後ナデ、スス付着、ナデ	にぶい黄橙	浅黄	微細〜1㎜大の白色透明の粒、黒い粒	
68	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	底部				ナデ、粗いナデ	工具によるナデ、工具痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の褐灰・灰・赤褐・褐色の粒、3㎜大の灰・褐色の粒	
69	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	底部				ナデ、不定方向の工具痕	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	微細〜1㎜大の黒色光沢・赤褐色・淡黄色の粒、2㎜以下の透明光沢、褐灰色の粒	
70	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	1㎜以下の灰褐色・乳白色、微細な光沢粒	
71	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	灰黄褐	黄灰	1.5㎜以下の不透明な光沢粒、灰白の砂粒、微細な黒色の光沢粒、透明の光沢粒	
72	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ、棒状工具による沈線	横方向のミガキ	灰黄褐	オリーブ黒	1㎜以下の透明の光沢粒、灰白の砂粒	
73	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄橙 灰黄褐	灰黄褐	1㎜以下の灰黄色・乳白色の粒、微細な光沢粒	
74	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	暗灰黄	黄灰	1.5㎜以下の灰白の砂粒、2.5㎜以下の透明の光沢粒	
75	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	1㎜以下の茶褐色・灰褐色の粒、微細な光沢粒	

第３表　豊満大谷遺跡　土器観察表(3)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
76	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				ミガキ、沈線	工具による横方向のナデ、ミガキ	黒褐	黒褐	1㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒	
77	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁部				横方向にミガキ	横方向にミガキ	灰黄	暗灰黄	2㎜以下の透明の光沢粒、1㎜以下の褐色の砂粒	風化
78	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				横方向にミガキ	横方向にミガキ	灰黄褐	灰褐	1.5㎜以下の褐色及び微細な灰白の砂粒	
79	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ	褐灰	褐灰	1㎜以下の半透明光沢粒	
80	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				横方向にミガキ	横方向にミガキ	にぶい黄橙	灰黄	1㎜以下の灰白及び透明の光沢粒	
81	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗灰黄	黄灰	1.5㎜以下の半透明光沢粒	
82	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁～屈曲部				横方向のミガキ、沈線風化	横方向のミガキ	黄灰	黄灰	1㎜以下の透明の光沢粒、微細な灰白の砂粒	
83	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁～屈曲部				横方向のミガキ、沈線	横方向のミガキ、沈線	黒褐	黄灰	1㎜以下の橙色の砂粒、微細な黒色の光沢粒	
84	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部～胴部	推定31.8			横方向にミガキ、工具による凹み	工具による凹み、横方向にミガキ	黄灰	黒褐	2㎜以下の橙色の砂粒及び1㎜以下の灰白の砂粒、微細な透明の光沢粒	
85	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部～胴部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	灰黄褐 褐灰	灰黄褐 褐灰	1㎜以下の茶褐色・黒褐色の粒、白色・微細な光沢粒	
86	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ	黒褐	褐灰	1㎜以下の半透明光沢粒、乳白色粒	
87	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				ミガキ、沈線、風化気味	ミガキ、工具による押え	黄灰	黄灰 灰黄	微細な灰白、透明光沢粒	風化
88	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部～胴部				ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	精良	風化
89	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁～屈曲部				横方向のミガキ、沈線	横方向にミガキ、ミガキの後に横方向にケズリ	黒褐	黄灰	1㎜以下の灰白の砂粒、微細な透明の光沢粒	
90	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部～胴部				横方向にミガキ	横方向にミガキ、指頭痕	褐灰	褐灰	2㎜以下の茶褐色の粒、1㎜以下の灰褐色の粒	
91	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部～胴部				ミガキ	ミガキ	黒褐	灰黄褐	1.5㎜以下の乳白色粒、微細な光沢粒	
92	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ、風化気味、横方向のナデ	横方向のナデ、斜方向のミガキ	黒褐	灰黄褐	1㎜大の淡黄・茶色粒	風化
93	黒色磨研	4トレンチ	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	黒褐	灰黄褐	微細な淡黄色粒、1～2㎜の淡黄・茶色粒	風化
94	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ、浅沈線文、粗いナデ	暗灰黄	灰黄	光る微粒子、きめが細かい	
95	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				ミガキ、リボン状突起	ミガキ	にぶい黄	灰黄	白色、灰色の粒	
96	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ	浅黄	浅黄	1㎜以下の透明光沢粒	
97	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁部				ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	オリーブ黒	浅黄	白色粒	
98	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	胴部				ミガキ後ナデ、リボン状突帯	ミガキ後ナデ	灰黄	灰黄褐	2㎜以下の黒褐色の粒、1.5㎜以下の灰色の粒	
99	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	屈曲部				ミガキ	ミガキ	灰黄褐	灰褐	2㎜以下の橙・にぶい橙の粒、灰色の砂粒	
100	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	屈曲部				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	灰黄褐	3㎜の灰色の砂粒、1㎜以下の赤褐・淡橙・灰白・黒色の砂粒	風化
101	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	屈曲部				ミガキ	ミガキ	暗オリーブ褐	暗灰黄	2㎜以下の灰白・橙・灰色の砂粒	
102	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁部				ミガキ後ナデ	ミガキ、沈線	灰黄	灰黄褐	5㎜以下のにぶい赤褐色粒、2㎜以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒	黒変
103	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	屈曲部	推定16.0			ミガキ	ミガキ	灰黄	灰黄	微細な黒色砂粒	
104	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部～胴部	推定36.0			工具によるナデ後ミガキ、ミガキ	指ナデ後ミガキ、沈線	黄灰 にぶい黄褐	黒褐 にぶい黄褐	1㎜以下の黒・灰白・半透明色粒	
105	黒色磨研	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁屈曲部				ミガキ	ミガキ、横方向へ工具痕	灰褐	褐灰	微細な灰色・褐色の粒	
106	縄文土器	A区：Ⅳ層	浅鉢	胴部～屈曲部				ミガキ	ミガキ	灰黄	灰黄	光沢のある微細粒	黒変
107	縄文土器	A区：Ⅳ層	浅鉢	屈曲部				ミガキ、黒斑	ミガキ	にぶい黄橙	黄灰	1㎜以下の赤・橙・灰・灰褐色・透明光沢の砂粒	
108	縄文土器	A区：Ⅳ層	浅鉢	屈曲部				ミガキ、黒斑	ミガキ	灰褐	褐灰	1㎜以下の赤橙・灰白・にぶい橙色・透明光沢の砂粒	
109	縄文土器	A区：Ⅳ層	深鉢	口縁部				横方向のナデ、斜め方向のミガキ	一部黒変、横方向のミガキ	黒褐	にぶい黄褐	1㎜以下の淡黄・褐色・透明光沢・黒色光沢粒	黒変
110	縄文土器	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ	浅黄	浅黄	1.5㎜以下の半透明光沢粒	
111	縄文土器	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰黄	灰黄	精良	
112	縄文土器	A区	浅鉢	口縁部～胴部				丁寧なナデ、リボン状突起	丁寧なナデ	灰黄	灰黄	微細な白色の粒	
113	縄文土器	A区：Ⅳ層	浅鉢	口縁部～胴部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	灰黄褐 黒褐	灰黄褐 黒褐	微細な透明光沢粒、1～2㎜大の茶色粒	
114	縄文土器	A区：Ⅳ層	浅鉢	屈曲部				ミガキ	ミガキ	灰黄 浅黄	暗灰黄 浅黄	微細な黒色・褐色の粒	黒変
115	縄文土器	B区	深鉢	口縁部				横ナデ、スス付着、棒状工具による沈線	横ナデ後に棒状工具による沈線	褐灰	にぶい橙	1㎜以下の灰白の砂粒、半透明の光沢粒	

2　弥生時代から中世の遺構と遺物

豊満大谷遺跡では、遺物包含層から弥生時代の遺物は出土したものの遺物は検出されなかった。しかし、古代から中世にかけての竪穴住居跡１軒、集石状遺構１基、土坑６基、掘立柱建物跡１棟、溝状遺構９条、畝状遺構、ピット等が検出された。遺構出土の遺物を概観すると、竪穴住居跡及び集石状遺構、畝状遺構出土のもの古代の土師器を中心に出土している。

(1)　竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（ＳＡ１：第19図）

Ｂ区のやや中央の第Ⅳ層上面で、Ｂ６グリッドから検出された。方形プランの住居跡でＳＥ４・５に切られている。南北方向に2.95m、東西方向に2.98m、検出面からの深さ20～35cmを測る。なお、明らかな主柱穴は検出できなかったが、プラン北西において焼土が確認され、その埋土中には多くの炭化物粒が含まれていた。埋土は御池ボラを含む褐色土や暗褐色土である。床面には張り床も見られず、硬化面も確認できなかった。遺物の多くは床面直上から床面から20cm浮いた状態で出土した。

出土遺物は第21・22図（第５表）に示している。この住居に伴う遺物（116～140）は上層・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。

116～120は鉢である。116は平底の底部から体部が緩やかに内湾しながら延びる。117は半球形の体部と丸底の底部を持ち、内湾気味に立ち上がる口縁部からなる。118～120は117より小型で基本的形態は同様であるが、118は口縁端部が外反している。116～119は外面はミガキ、内面は丁寧なナデ調整である。121は扁球条の胴部を持った小型丸底壷である。122は胴部が外方に延びる壷の底部である。

123～129は高坏である。123～127は坏部で、形態的なバリエーションが多様であり、坏部と脚部に分けて分類する。

坏部ａ　やや深さの有る体部に大きく延びる外反的な口縁部が付き、稜が明瞭なもの。(123)

ｂ　浅い体部に大きく外反する口縁部が付き、稜が明瞭なもの。(124・125)

ｃ　浅い体部にラッパ状に開く口縁部が付くもの。(126)

ｄ　全体に丸みをもち、稜の不明瞭なもの。(127)

脚部ａ　滑らかな「八」字形を呈し、裾部との区分が不明瞭なもの。(126・129)

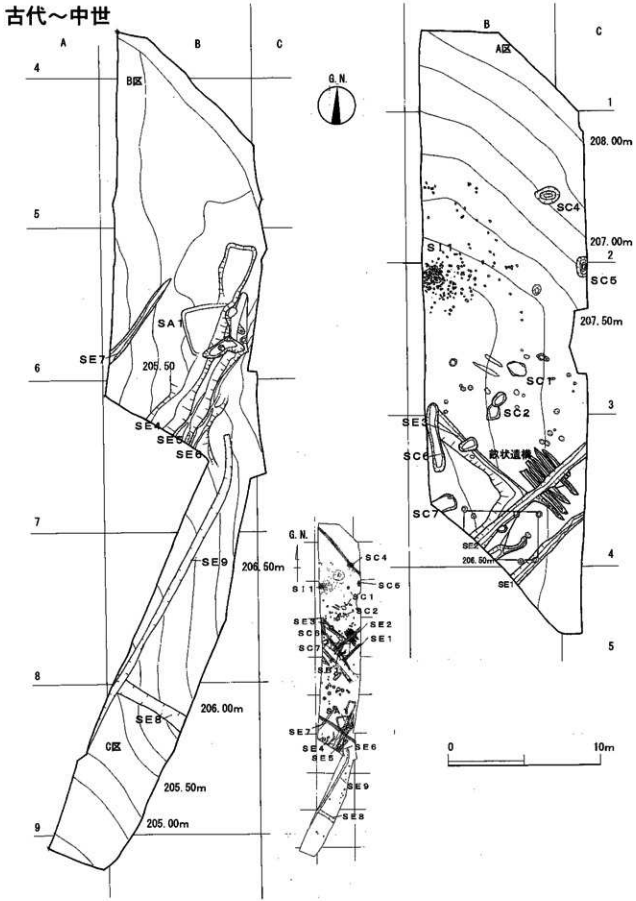
ｂ　やや開き気味の直線的な脚に強く屈曲する直線的な裾部が付くもの。(130)

123～127の坏部の器面調整は外面はミガキ、内面は工具による丁寧なナデ、指頭痕などが見られる。

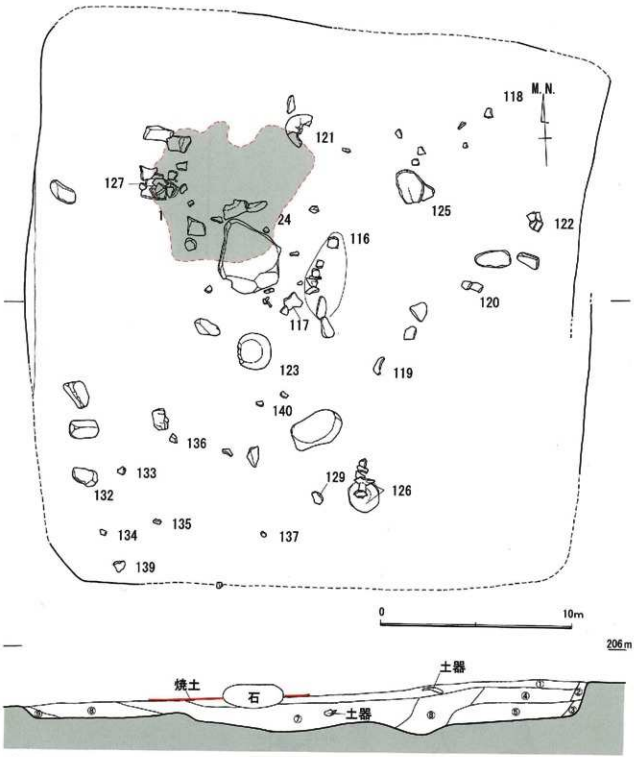
131は砥石である。長楕円形の扁平な礫を使用していると思われる。片面に研いた痕跡が見られる。

132～140は甕である。132から139は口縁部にくびれを持たないバケツ状の器形を呈するもので、胴部上位に貼付刻目突帯が巡るものである。口縁部が内湾し、両面とも工具によるナデ仕上げで、いずれの突帯も断面三角形を呈し、刻目内には布目圧痕が見られる。外面には全体的にススが付着している。132・134・139は口縁部端部外面に133・134・139は口縁部端部内面に指押えが見られる。135は、２条の貼付刻目突帯を有する。

140は甕の底部で、132と同じ形状を呈すると思われる。外面は丁寧なミガキ、内面は丁寧なナデが施され、一部黒変が見られる。

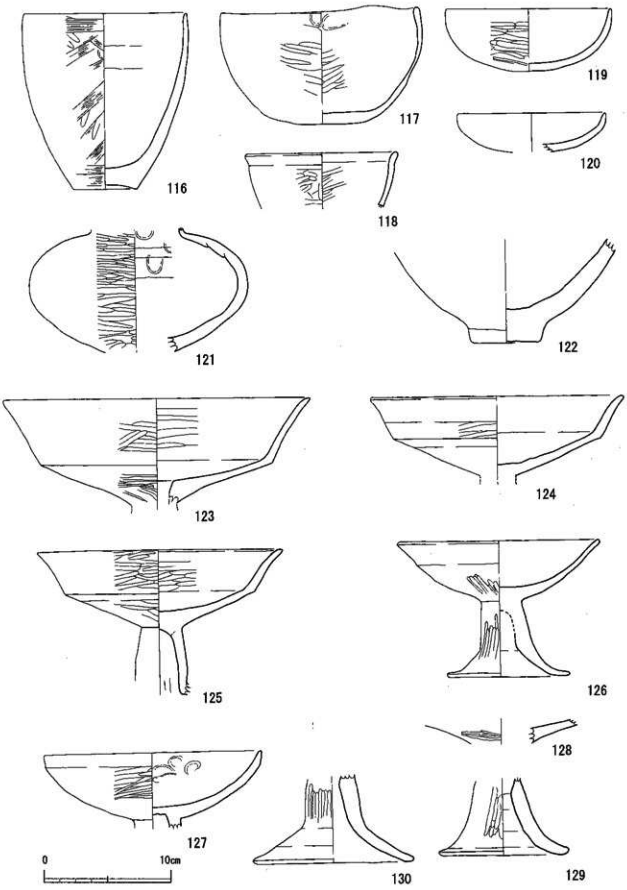


第18図　豊満大谷遺跡　古代から中世の遺構分布図（1／250）

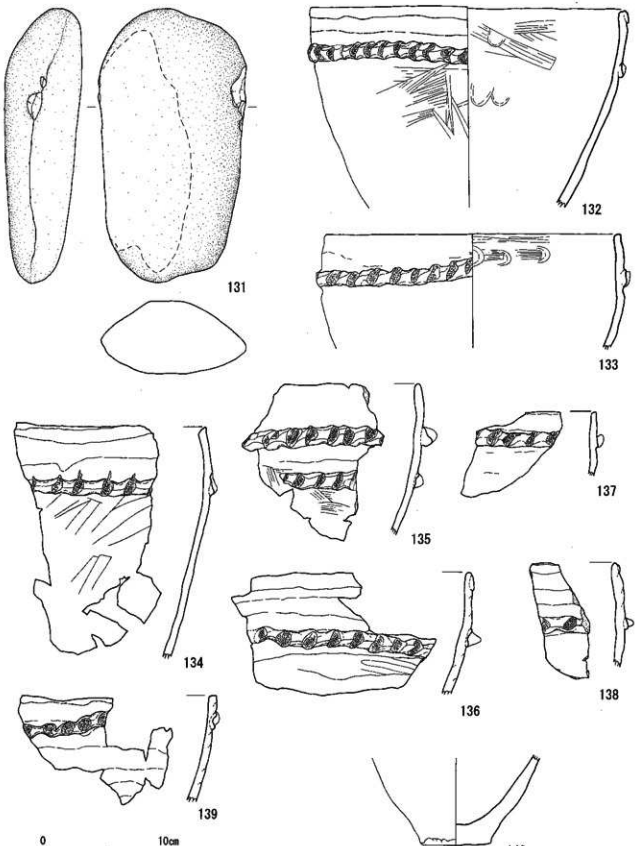


【土層注記】SA1
①：暗褐色（10YR3／3）細かい粒子でしっかりしまる硬質。ねばりがあり、0.5～2㎜大の黄色のボラを含む。
②：暗褐色（10YR3／4）④に類似し、やや粗い粒子だがしまりがある。硬質でねばりがあり、0.5～2㎜大の黄色のボラを多少含む。
③：黒褐色（10YR3／2）⑤に類似し、粗い粒子だがしまりがある。0.5～2㎜大の黄色のボラを少し含む。
④：暗褐色（10YR3／4）細かい粒子でしっかりとしまる。硬質で0.5～2㎜大の黄色のボラを密に含む。
⑤：黒褐色（10YR3／2）やや粗い粒子だがしっかりとしまる。硬質で粘性があり、0.5～2㎜大の黄色のボラを含む。
⑥：黒褐色（10YR3／1）細かい粒子でしっかりとそまる。硬質で1～3㎜大の黄色のボラを含む。
⑦：黒　色（10YR2／1）⑤と類似し、木炭を特に多く含む。
⑧：暗褐色（10YR3／2）④と類似し、④に比べて明るい。
⑨：暗褐色（10YR3／4）②と類似

第19図　豊満大谷遺跡　1号竪穴住居跡実測図（SA1：1／20）



第20図　豊満大谷遺跡　1号竪穴住居跡出土土器実測図(1)（1／3）

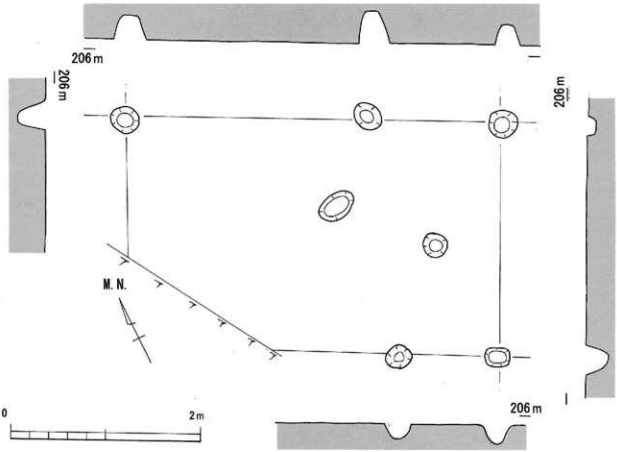


第21図　豊満大谷遺跡　1号竪穴住居跡出土土器実測図(2)（1／3）

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（ＳＢ１：第22図）

Ａ区の南端中央部で検出した掘立柱建物跡で梁間１間×桁行２間の長棟構造である。主軸方位はＮ―86°―Ｗの東西棟である。規模は北側柱の桁行4.9mで柱間隔は北から1.8m、3.1mでばらつきがある。南側桁行は一部削平しており検出できない部分があった。柱穴はほぼ円形を呈しており、直径28～32cm、深さ23～56cmとばらつきが見られた。埋土は暗褐色土層で、埋土中から遺物はなかった。



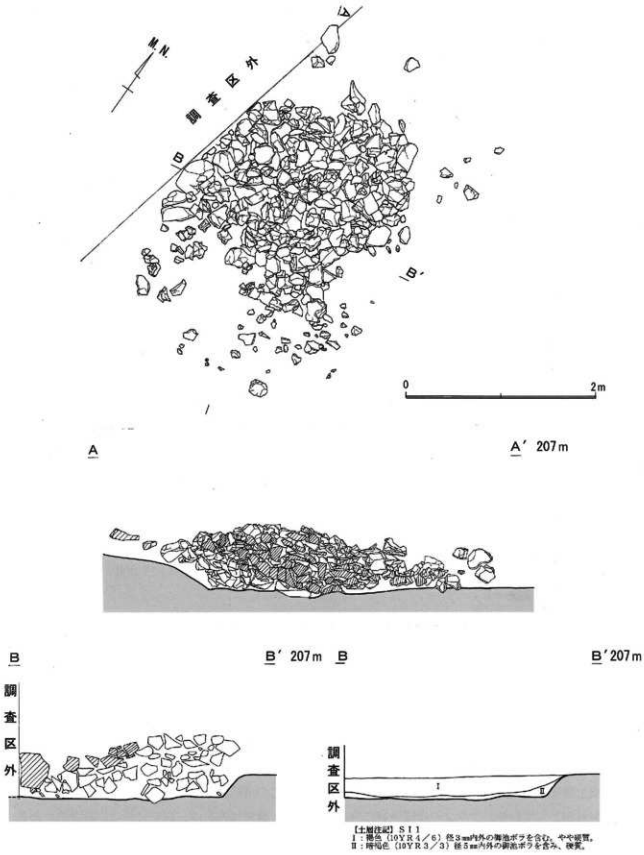
第22図　豊満大谷遺跡　１号掘立柱建物跡実測図（ＳＢ１：１／40）

(3) 集石状遺構

1号集石状遺構（第23図）

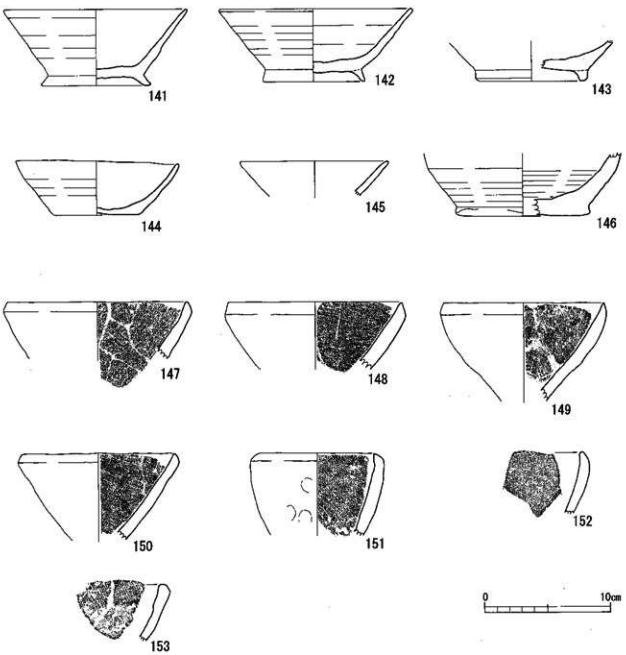
Ａ区の西壁沿中央部のＢ３グリッドから検出された。確認面は第Ⅳ層（御池ポラ混褐色土）の上面で遺構は250×400cmの範囲に礫が見られた。検出時は平面的に土坑を確認することはできなかったが、約25cmの厚みで重なった礫を除去すると、浅い皿状の落ち込みとなった。埋土は単純な２層をなし、上層は径３mm内外の御池ポラ混褐色土層（やや硬）、下層は径５mmの御池ポラを含む暗褐色土で固い。なお、礫５～20cm前後の大きさで、全体に角張ったもの、赤化したものが多かったが、炭化物・焼土等は確認できなかった。遺物は多量に出土している。

出土遺物は第24図（第５表～第６表）に示している。この遺構に伴う遺物（141～153）は主に中・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物は内訳は、141～146は土師器埦である。141～143は高台付の坏で器壁は薄く、両面の調整はナデである。144は底部と体部の境がやや丸みを持



第23図　豊満大谷遺跡　1号集石状遺構実測図（SI1：1／40）

ち鋭角な稜を成さない。内外面とも回転ナデにより成形される。145は器壁が薄く、内外面の調整はナデである。146は斜めに張り出す円盤状の底部を持つ。147～153は布痕土器の口縁部から胴部である。全体的に軟質で長時間被熱を受けたような橙色を色調とする。体部から内湾気味に延びていき、端部断面を三角形に形成する。外面は指頭痕が残るナデ調整で、内面は布目圧痕を残している。

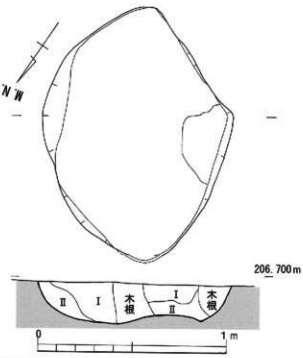


第24図　豊満大谷遺跡　1号集石状遺構出土土器実測図（1／3）

(4) 土坑

1号土坑（ＳＣ１：第25図）

Ａ区中央南寄りのＢ４グリッドから検出された。確認面は第Ⅴ層（橙色土層）で、平面形態は不整楕円形で断面形態は皿状を呈する土坑である。既掘部分の規模は長軸約1.34m、短軸約1.03m、深さ23cmを測る。埋土は２層をなし、Ⅰ層は径３㎜内外の御池ボラ混褐色土層、Ⅱ層は径５㎜内外の御池ボラと炭化物粒子を含むにぶい黄褐色土層である。底面は径４㎜の御池ボラを含む暗褐色土で固い。Ⅱ層上面に御池ボラの細粒がブロック状に存在していた。



【土層注記】ＳＣ１
Ⅰ：褐色土（10ＹＲ５／１）粘性がありしまっている。１～３㎜の明黄色の軽石を含む。
Ⅱ：にぶい黄褐色土（10ＹＲ４／５）粘性がややあり固くしまっている。１～５㎜の明黄色の軽石を含む。炭化物も混在する。

第25図　豊満大谷遺跡　１号土杭実測図（１／20）

遺物は第29図（第６表）に示している。この遺構に伴う遺物（154～165）は主に中・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。内訳は154・155は甕である。口縁部から頸部にかけてのもの、155は胴部上位に貼付刻目突帯が巡るものである。156～158は坏である。156・157は外傾して開く口縁部である。159は布痕土器の口縁部、160は底部である。161～165は鉢である。口縁部が162・163は直立気味で、164・165は外反する。

2号土坑（ＳＣ２：第26図）

ＳＣ１の南側に隣接し第Ⅴ層上面より検出された土坑である。平面形態は不整楕円形で断面形態は皿状を呈する土坑で２つが重なり合った状態で検出された。規模は長軸約2.07m、短軸約0.82m、深さ27cmを測る。埋土は５層に分かれ、Ⅰ層は御池ボラと炭化物が多く混在する黒褐色土層、Ⅱ層は径５㎜内外の御池ボラを多く含む褐色土層、Ⅲ層は御池ボラを多量に含み炭化物が混在する暗褐色土層、Ⅳ層は御池ボラを多量に含み炭化物が混じる暗褐色土層（軟）、下層は御池ボラの細粒がブロック状に入った暗褐色土層である。底面は御池ボラを含む暗褐色土で固い。

出土遺物は第29図（第６表）に示している。この住居に伴う遺物（166・167）は主に中・下層から出土しており、遺物の内訳は、166は甕の底部で外傾しながら立ち上がる。167は浅鉢の口縁部で、端部に窪みが見られる。

4号土坑（ＳＣ４：第27図）

Ａ区中央北寄りのＢ２グリッドから検出された。確認面は第Ⅳ層（御池ボラ混褐色土）で、平面形態は不整楕円形で断面形態は皿状を呈する土坑である。規模は長軸約3.3m、短軸約2.55m、深さ65cmを測る。埋土は３層をなし、Ⅰ層は径５㎜内外の御池ボラ混明褐色土層（やや硬）、Ⅱ層は径５㎜内外の軽石を少量含むにぶい橙色層、Ⅲ層は径５㎜内外の御池ボラを含む褐色土層である。底面は径５㎜の御池ボラを含む暗褐色土で固い。径10～35cmの礫が床面から浮いた状態で見られた。埋土中からの遺物はなかった。

5号土坑（ＳＣ５：第27図）

Ａ区の東壁沿やや中央部のＣ３グリッドから検出された。東側の一部は調査区外の山裾に延びているため、プランの約３分の２を検出した。確認面は第Ⅳ層（御池ボラ混褐色土）上面で急斜面直下に掘られており、平面形態は不整円形で断面形態はＵ字状を呈する井戸状の土坑である。規模は長軸2.35ｍ、短軸1.85ｍ、深さ2.2ｍを測る。北東側から約38°の傾斜でＵ字型に下がっていく。傾斜の変わり目には足場状の段が見られ、南東側は初めから約130°で下がっていく。壁体は崩れやすくなっており、円形状に落ち込んでいく。埋土の主体は黄橙色粒子を含む黒褐色土と暗褐色土の複雑な混在土で覆われている。埋土中からの遺物はなかった。

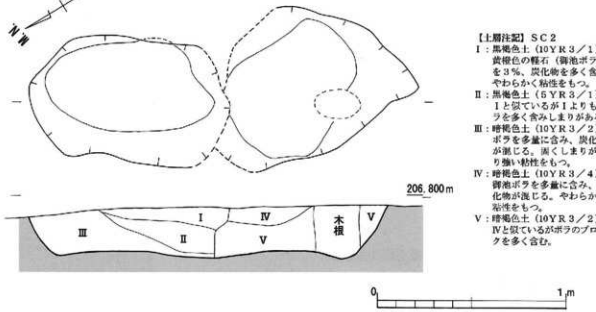
6号土坑（ＳＣ６：第28図）

Ａ区南端部の南西側、Ｂ４グリッドから検出された。確認面は第Ⅳ層（御池ボラ混褐色土）上面で、平面形態は長方形で断面形態は椀状を呈する土坑である。規模は長軸約4.5ｍ、短軸約0.62ｍ、深さ16㎝を測る。北側端の部分はＳＥ３号、ピットと切り合い、さらに調査区外に延びている。埋土は、径１㎜内外の御池ボラを多く含む暗褐色土と混在土を主体とする。底面は径５㎜の御池ボラを含む暗褐色土で固い。

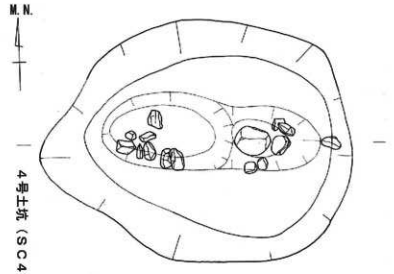
出土遺物は第29図～第30図（第６表）に示している。この遺構に伴う遺物（168～174）は主に中・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。内訳は、168・169は甕である。168・169は同一個体と考えられる。胴部上位に貼付刻目突帯が巡る。171は磨研土器の浅鉢である。半球形状で両面ともミガキ後丁寧なナデによる調整が見られる。172・173は粗製の深鉢である。172・173は口縁部で、173は口縁部外面に断面三角形の貼付突帯を持つ。174は縄目圧痕を持つ粗製の浅鉢である。

7号土坑（ＳＣ７：第28図）

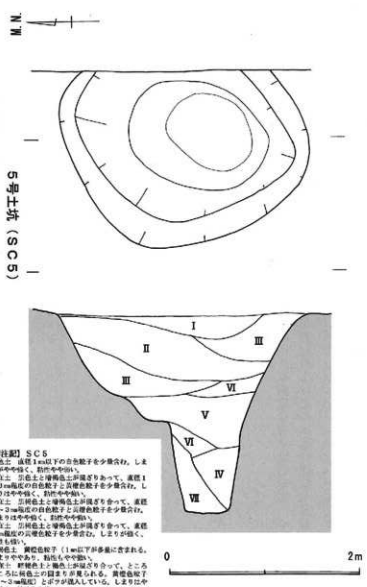
Ａ区南端部、ＳＣ５の南1.4ｍから検出された。確認面は第Ⅳ層（御池ボラ混褐色土）で、平面形態は長方形で断面形態は皿状を呈する土坑である。規模は長軸約1.25ｍ、短軸約0.95ｍ、深さ10㎝を測る。南端の部分はＢ区との境で削平されている。埋土は、径１㎜内外の御池ボラを多く含む暗褐色土と混在土を主体とする。底面は径５㎜の御池ボラを含む暗褐色土で固い。遺物は出土していない。



第26図　豊満大谷遺跡　２号土坑実測図（ＳＣ２：１／20）

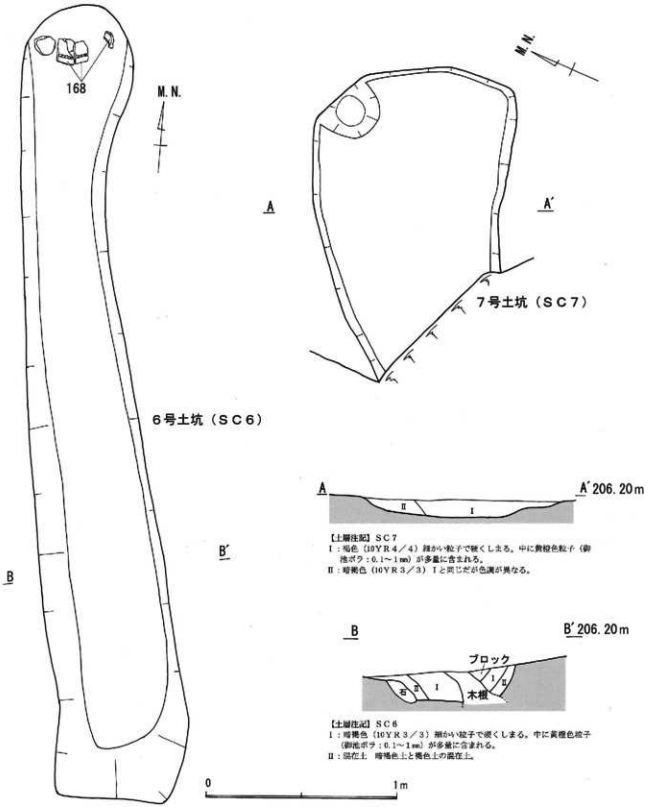


【土層注記】SC4
I：黒色土（7.5YR3/0）直径3～5mmの黄橙色粒子を含む。しまりが強く、粘性あり。
II：にぶい橙色（7.5YR7/4）直径5mm程度の焼土を少量含む。しまりやや強く、粘性やや弱い。
III：褐色（7.5YR4/4）直径3～5mm程度の黄橙色粒子を含む。しまり強く、粘性強い。

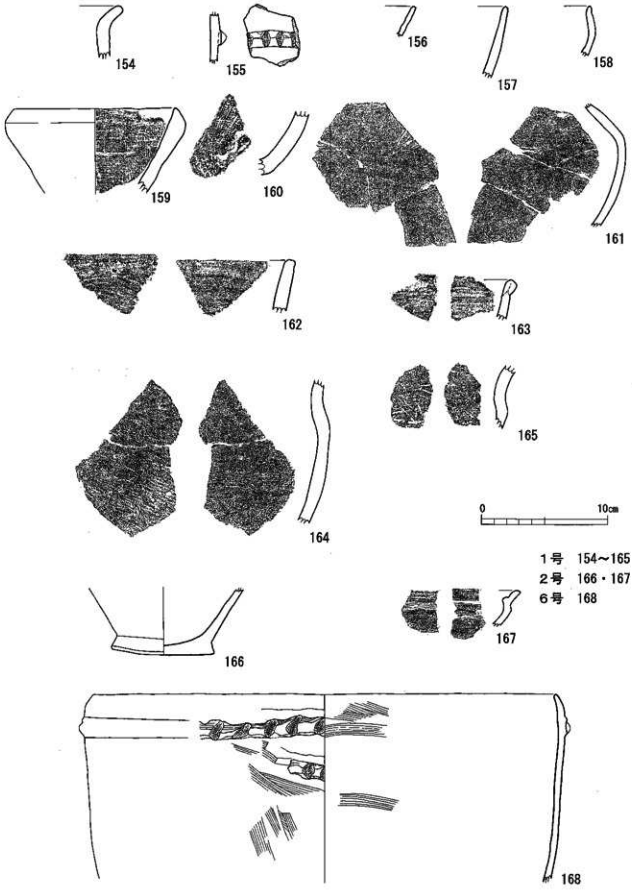


【土層注記】SC5
I：黒色土　直径1mm以下の白色粒子を少量含む。しまりがやや強く、粘性やや弱い。
II：淡灰色　三和色土と暗褐色土が混ざりあって、直径1～3mm程度の白色粒子と黄橙色粒子を少量含む。しまりはやや強く、粘性やや弱い。
III：淡灰色　三和色土と暗褐色土が混ざりあって、直径1～2mm程度の白色粒子と黄橙色粒子が多量含む。しまりはやや弱く、粘性やや弱い。
IV：淡灰色　三和色土と暗褐色土が混ざりあって、直径1mm程度の黄褐色粒子を少量含む。しまりが強く、粘性も強い。
V：暗褐色土　黄橙色粒子（1mm以下が多量に含まれる。しまりやや弱く、粘性もやや強い。
VI：淡灰色　粒状色土と褐色土が混ざりあって、ところどころに褐色土の固まりが見られる。黄橙色粒子（1～3mm程度）とボラが混入している。しまりにやや強く、粘性やや弱い。
VII：淡灰色　褐色土とボラが混ざりあって、褐色土の固まりが斑状見られる。粘性は少なく、しまりも強い。

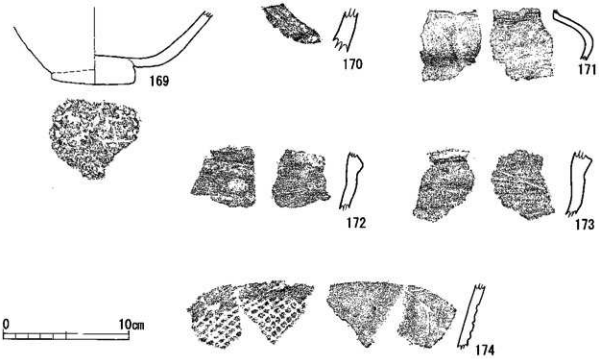
第27図　豊浦大谷遺跡　4号・5号土坑実測図（SC4・SC5：1／40）



第28図　豊満大谷遺跡　6号・7号土坑実測図（SC6・SC7：1／20）



第29図　豊満大谷遺跡　1号・2号・6号土坑出土土器実測図(1)（1／3）



第30図　豊満大谷遺跡　６号土坑出土土器実測図(2)（１／３）

(5) 溝状遺構

１号溝状遺構（ＳＥ１：第32図）

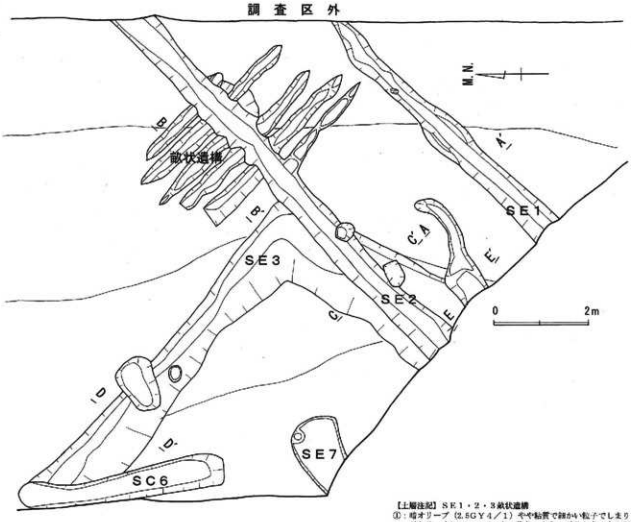
Ａ区南端部で検出された。Ｂ区から連続している溝と考えられるが、Ａ・Ｂ区の境が削平されているためにＢ区における溝は残存していない。溝は山の斜面に沿って南東方向に約6.45ｍ延び、その先は調査区外へ続く。溝の幅は0.36ｍ～0.6ｍを測る。上部削平のため、遺存する深さは最深部で15cmと浅い。底面は断面Ｕ字形を呈し、上位に向かって次第にさらに浅くなる。埋土の主体は粗い黄橙色粒子や１～1.5mm程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。

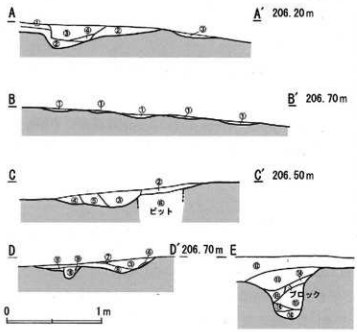
２号溝状遺構（ＳＥ２：第32図）

１号から、2.6ｍ離れて平行している。南西端は削平のため不明で残存全長9.5ｍである。溝の幅は0.56～0.62cmを測る。これも上部削平のため深さは最深部で16cmと浅い。底面は断面Ｕ字形を呈し、北西に向かって次第に浅くなる。埋土の主体は粗い黄橙色粒子や１～1.5mm程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。

３号溝状遺構（ＳＥ３：第32図）

２号溝状遺構と切り合う形でＬ字状に折れる溝である。１号・２号と方向性を同じくするので、内区面を護る最も内側の施設であろうか。屈折部はほとんど直角をなしている。幅は1.1～1.55ｍで、１、２号より大きな溝である。底面は断面Ｕ字形を呈し、床面からの深さは25cmを測る。埋土の主体は粗い黄橙色粒子や１～1.5mm程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。





【土層注記】SE1・2・3敲状遺構
①：暗オリーブ（2.5GY4／3）やや粘質で細かい粒子でしまりがある。中に0.1～0.5mm大の黄色・白色のボラを多く含み褐りがある。
②：黒褐色（10YR3／1）やや粘質で細かい粒子でしまりがある。中に5mm大の黄色のボラを多く含み、一部炭のような黒色の粒が見られ包含層と思われる。
③：暗灰色（N4／）細かい粒子だがボラを含むために緩くしまる。0.5mm～1.5mm大の文明ボラを多量に含む。
④：混在土　②と⑤の混合土。
⑤：黒褐色（10YR2／2）粗い粒子と細かい粒子の混在土で硬質。黄色のボラや褐色の粒子が混ざりやや粗い。
⑥：黒褐色（10YR2／3）粘質で細かい粒子でしまりがある。1mm大の黄色のボラが多く含まれるだけで混在はない。
⑦：混在土　文明のボラを多く含む黒色土と黒褐色土の混在。
⑧：混在土　黒褐色の粒と褐色の粒が縞ったように混在。
⑨：混在土　ボラを含む褐色の粒と⑤の混在土。
⑩：褐灰色（10YR5／1）細かい粒子でややや砂質、しまりがない。
⑪：暗色（N3／）2～4mm大の褐色のボラを多量に含む。
⑫：黒色（N2／）細かい粒子で硬くしまる。中に0.5～2mm大の褐色のボラを僅より低い密度で多量に含まれる。
⑬：黒色（10YR2／1）⑫より⑮の混在に近い。
⑭：黒褐色（10YR2／3）細かい粒子でしまりがある。中に0.1～1mm大の黄色のボラを含んでいる。
⑮：黒色（10YR1.7／1）細かい粒子でしまりがある。中になにも含まない。
⑯：混在土　⑬と褐色の粒子が混在する。

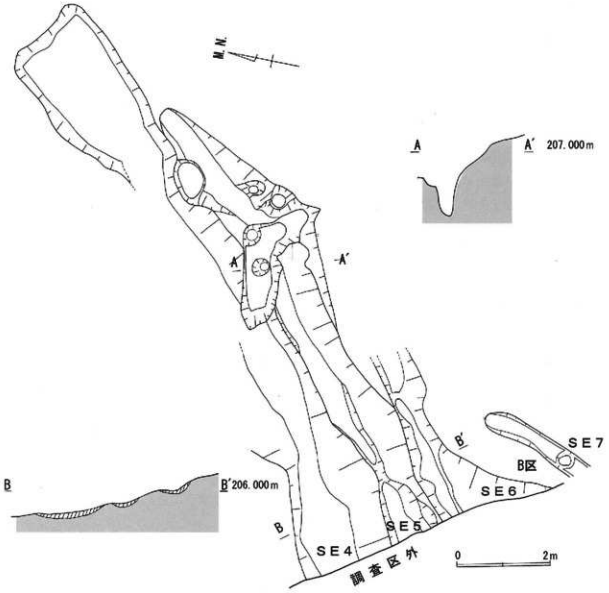
第31図　豊満大谷遺跡　1号・2号・3号溝状遺構、敲状遺構実測図（1／80）及び土層断面実測図（1／40）

４・５・６号溝状遺構（ＳＥ４・ＳＥ５・ＳＥ６：第32図）

４号・５号・６号溝状遺構は、Ｂ区南端部で検出された。Ｂ区南端部分は山の斜面上で土地改良により大部分が掘削されている状況で南端部分から南西に向けての溝は残存しない。４号・５号・６号の三本の溝は隣接しながら平行して延びていることから、一対の遺構として取り扱うのが妥当とおもわる遺構である。４号は、５号に平行しながら北東に13.5m延び、溝の幅は約1.2mを測る。溝中央部はＳＡ１と切り合っているため、上部は削平され、遺存する深さは最深部で0.5cmと浅い。

５号は全長10.3m、全幅0.9～1.3mを測り、４号より全幅でやや狭くなる。方向は４号と平行し、大部分が４号東側側面と隣接しており、溝中央から北東に円形の浅い小ピットが５基遺存する。

６号は全長3.6m、全幅2.5～0.8mを測るが、その先は削平され検出不可能である。方向は５号と平行し、一部分は５号と切り合っている。三本の溝とも底面は断面Ｕ字形を呈し、径１～５mmの御池ボラを含む暗褐色土で硬くしまっている。なお、不明遺構が４号・５号溝中央部にまたがって検出された。規模は、長軸約2.8m、短軸約0.93m、深さ82cmでピット２基を配する。



第32図　豊満大谷遺跡　４号・５号・６号溝状遺構実測図及び土層断面実測図（１／80）

7号溝状遺構（ＳＥ７：第33図）

Ｃ区中央部の第Ⅴ層（御池ボラ層）上面で検出された。走行は斜面にそってきたから南西で、検出全長は約24.3ｍ、溝の幅は約１ｍを測る。断面Ｕ字形を呈し、径0.5～1.5㎜の御池ボラを含む暗灰色土で硬くしまっている。耕作等による撹乱のため、遺構上部が飛ばされており、検出面からの深さは10～15㎝程度しかない。４号、５号、６号と同じ方向性を有するので相互に関連する遺構であろう。南西の端はさらに浅くなり以降検出ができない状態であった。埋土は、御池ボラを少し含む黒色土で、ややしまりがある。埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

8号溝状遺構（ＳＥ８：第34図）

Ｃ区中央部の第Ⅴ層（御池ボラ層）上面で検出された。調査区を東西に横断している。東から西に向かって傾斜している。全長約5.3ｍ、全幅約１ｍを測る。底面は断面Ｕ字形を呈し、径１～５㎜の御池ボラを含む暗灰色土で硬くしまっている。耕作等による撹乱のため遺構上部が飛ばされており、検出面からの深さは８～10㎝程度しかなかった。埋土は、御池ボラを少し含む黒色土で、ややしまりがある。埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

9号溝状遺構（ＳＥ９：第34図）

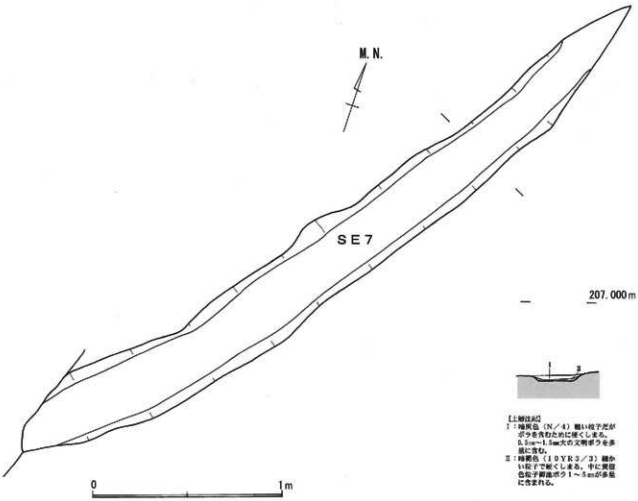
Ｂ区の北西に延びる溝状遺構である。全長４ｍ、全幅0.4ｍを測るが、さらに北西に延びているものと推定される。４号、５号、６号と同じ方向性を有するので相互に関連する遺構であろう。上部は削平され、遺存する深さは最深部で５㎜と浅い。埋土主体は粗い黄橙色粒子や１～1.5㎜程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。断面は浅いＵ字形を呈し、径１～５㎜の御池ボラを含む暗褐色土で硬くしまっている。埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

(6) 畝状遺構

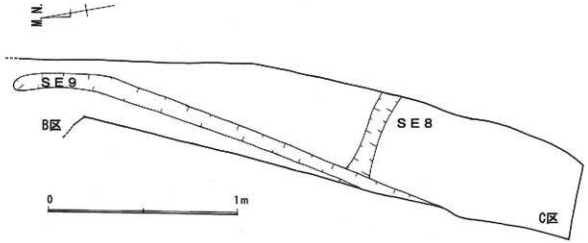
畝状遺構（第31図）

中世以降の畠跡と思われる畝状遺構が第Ⅳ層（御池ボラ・白ボラ混褐色土）上面より検出された。白ボラはＡ区中央部南側に分布していたが、畝状遺構として最も残存状況がよく明瞭なラインが見えたのはＡ区南端部東側であった。平面的に平行して走る白ボラが残る部分が畝の基底部で、その間の白ボラが混入する黒褐色土を畝間として捉えた。畑地に降灰した白ボラを掘り上げて畝を作ったため、畝間は白ボラを混入する黒褐色土となったものと思われる。

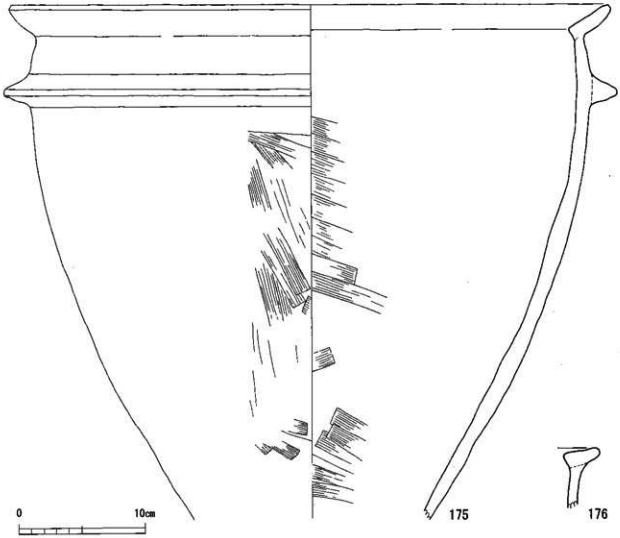
畝状遺構は、北西－南東方向に平行して走り、遺構の中央をＳＥ２が北東－南西方向に走っている。溝と溝の間隔は約10㎝である。遺構の規模は、長さは約1.5～2.0ｍ、溝幅は約0.3～0.4ｍを測る。上部削平のため、遺存する深さは最深部で３～５㎝と浅い。底面は断面Ｕ字形を呈し、径１～５㎜の白ボラを含む黒褐色土で硬くしまっている。遺構は、一見整然と連なるように見えるが、後世の耕作等の影響を受けているためか部分的に不明瞭な部分もある。



第33図　豊満大谷遺跡　７号溝状遺構実測図（ＳＥ７：１／40）



第34図　豊満大谷遺跡　８号・９号溝状遺構実測図（ＳＥ８・９：１／200）

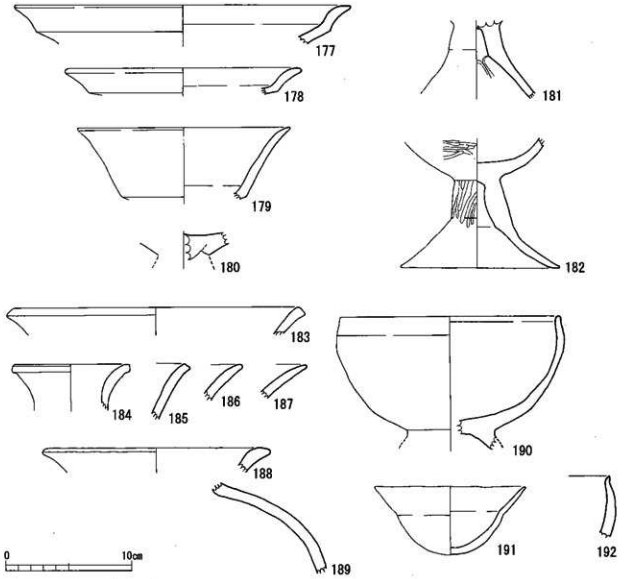


第35図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(1)（1／3）

(7)　包含層出土の遺物（第35図～第43図）

弥生時代～中世の遺物包含層は第Ⅲ層～第Ⅳ層である。遺物は土師器を中心に甕、壷、坏、高坏、鉢等が出土している。個々の遺物についての詳細は観察表（第6表～第9表）に記載している。

第35図175～第37図192は弥生時代から古墳時代にかけての土器群であると思われる。175・176は弥生土器である。175は大型甕の口縁部が外側に大きく開き、内面に明瞭な稜を持つ。胴部上位に断面台形の貼付突帯をもつ。内外面ともハケ状工具によるナデの後ナデで突帯上部～中位にかけてススが付着している。内面は風化がはげしい。176は大型甕の口縁部である。内外面とも横方向のナデで、外面の口縁部下位にススが付着している。177～182は高坏である。177は坏部で、坏底部と口縁部との間にやや稜をもつ。口縁部は外側に開き、口縁端部が外側に反る。調整は外面はミガキ、内面はナデである。178は坏部で、坏底部と口縁部との間に明瞭な稜をもつ。口縁部は外側に反る。調整は外面ミガキ、内面ナデである。179は坏底部と口縁部との間に稜をもたない坏部で、口縁部が外側に反る。調整は外面はミガキでススが付着しており、内面は回転ナデである。180は坏底部で内外面ともミガキを施している。181は脚部で短い裾広がりの「ハ」字状である。調整は内外面ともナデである。182は坏底部から脚部である。坏部は稜をもたない塊状を呈すると思われる。脚部は短い裾広がりの「ハ」字状である。調整は



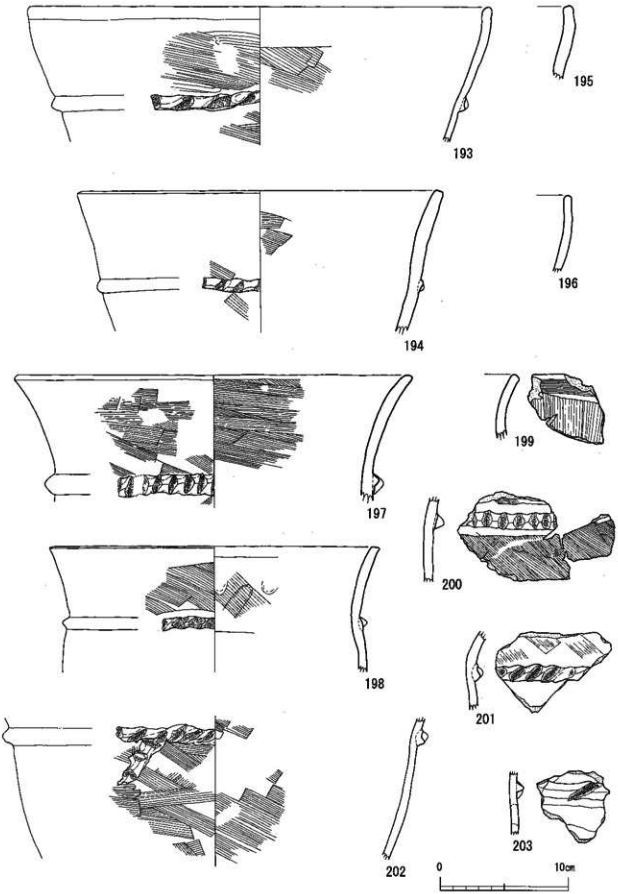
第36図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(2)（1／3）

内外面ともヘラミガキを施している。183～189は壷である。183は短頸壷で口縁部は外反する。調整は内外面とも回転ナデである。184は短胴の壷の口縁部片である。外面に回転ナデの後工具によるハケ目が施されており内湾が強い。185は口縁部が外方に開く小型の壷の口縁部片である。調整は内外面ともナデである。186～188は口縁部が斜め上方に延びる口縁部片で、186・188の調整は内外面にナデを施し、187は外面に横方向のナデ、内面にナデ、ミガキが施されている。189は肩部の張った偏球形を呈すると思われる。調整は内外面ともナデである。外面胴部中位にススが付着している。190～192は鉢及び坩である。190は脚台を有し、胴部から口縁部にかけて内湾しながら延びている。調整は外面はミガキの後ナデ、内面は横方向のナデが見られる。191は胴部から口縁部にかけて内湾しながら外傾している。内外面ナデを施している。192は胴部から口縁部にかけて内湾しながら直立し口縁端部がわずかに外反する。調整は内外面ともナデ調整である。

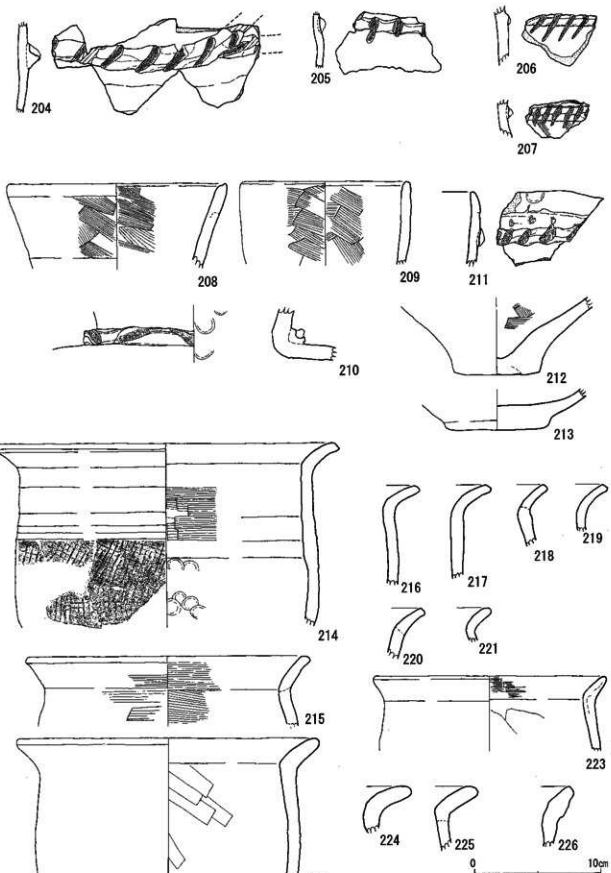
第37図193～第38図207は古墳時代の貼付刻目突帯をもった甕である。193～196は口縁下部にくびれをもたずに口縁部がわずかに内湾するバケツ状の器形を呈す。193・194は口縁部外面に断面三角形の貼付

刻目突帯が巡るものである。内外面ともハケ目後ナデ仕上げで刻目内に布目圧痕が見られる。195・196は内外面ともにナデが施されている。197～207は口縁部が頸部から緩やかに外反する形状を呈する。197・198・200は貼付突帯部でいずれの突帯も断面三角形を呈し、刻目内に布目圧痕が見られる。外面は工具による横方向のナデ、斜方向のハケ目が施され、内面は横・斜方向のハケ目、ナデが施されている。199は口縁部片である。外面は横方向のナデ、縦方向のハケ目を施しススが付着している。内面はナデ調整である。201～204は断面三角形の刻目突帯を貼り付けている。201は外面は斜方向の内面は横方向のハケ目が施されている。202は内外面とも斜方向のハケ目である。内面の一部に指ナデと黒変が見られる。203は胴部に貼付刻目突帯をもつ甕である。刻目内には布目圧痕が見られる。内外面ともナデ調整である。204は外面は斜方向のハケ目、内面はナデで外面にはススが付着する。205は断面長方形の刻目突帯を貼付刻目内に布目痕が見られる。外面はナデ、内面は指ナデ、ナデの調整が施されている。206・207は小さな断面三角形の突帯を貼り付けている。調整は206は外面はナデ、内面は斜方向のナデを施し、207は外面にススが付着しており、内面は横方向のハケ目が施されている。208～210・212・213は古墳時代の壷と思われる。208は長頸壷の口縁部から頸部付近である。内外面とも斜方向のハケ目調整である。209は口縁部が僅かに内湾して直口する。外面は横・斜方向のハケ目、内面は斜方向のハケ目が施されている。210は直口壷の頸部に交互に刻目がある突帯をもち、刻目内に布目圧痕が見られる。外面は横方向のナデ、内面は工具によるナデである。一部指頭痕が見られる。211は甕の口縁部から頸部付近でロ縁中位に刻目突帯をもつものである。212は平底を呈する壷の底部で、外面は横・斜方向のナデ、内面はハケ目、ナデが施されている。213は壷か鉢の底部と思われ平底を呈する。外面は横方向のナデ、内面はナデが施され一部黒変が見られる。

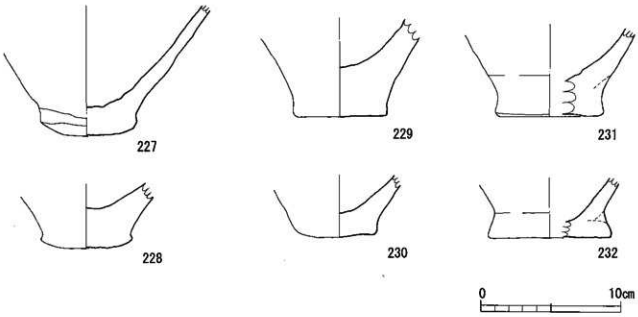
214～226は長胴形の土師器の甕である。214・221は胴部にやや膨らみをもつものと思われ、頸部がくびれて口縁部が外反している。調整は内外面ともナデである。214は外面の胴部中位に格子目のタタキが見られ、内面には指頭痕が見られる。215は頸部が「く」の字状に屈曲するもので、調整は内外面とも横方向のナデで頸部下位にハケ目が見られる。202は張りをもたない胴部から頸部にくびれをもたずに口縁部が大きく外傾する。調整は内外面とも横方向のナデで、内面には斜方向に線状の工具痕、黒変が見られる。218は胴部にやや膨らみをもつものと思われ口縁部は外反する。調整は外面は横方向のナデで、内面は横方向の指頭、横方向のナデが施されている。219は胴部にやや膨らみをもつものと思われ、口縁部が大きく外反している。調整は外面は横方向のナデで、内面は横方向のハケ目を施している。222・224～226は頸部が「く」の字状に屈曲するもので、口縁部が最大径となるものである。222は内面に粘土紐継目が明瞭に残るもので、調整は外面に丁寧なナデ、内面に横方向のナデ、斜方向のケズリが施されている。223はくびれをもたずに長い胴部が内湾しながら延びる。頸部がくびれて短い口縁部が外に開くもので、胴部中位程に最大径をもつ。外面にはナデ、内面は横方向のナデ、ヘラケズリが施されている。224・225は内面に粘土紐継目が明瞭に残り、外面はナデ、内面は横方向のヘラケズリ、ナデが施されている。器壁が1.2～1.4㎜と厚い。226は外面は横方向の粗いナデ、内面はヘラケズリが見られる。227～232は甕の底部である。227はわずかなくびれをもって内湾する胴部が外方に延びる。内外ともナデ仕上げである。228は端部がわずかに張り出し、平底を呈する。内外面ともナデである。229は平底でくびれをもたずに胴部が直線的に立ち上がるものと思われる。内外面ともナデである。230は端部に張り出しをもたないもので、平底を呈する。内外面とも不定方向のナデである。231はわずかなく



第37図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(3)（1／3）



第38図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(4)（1／3）

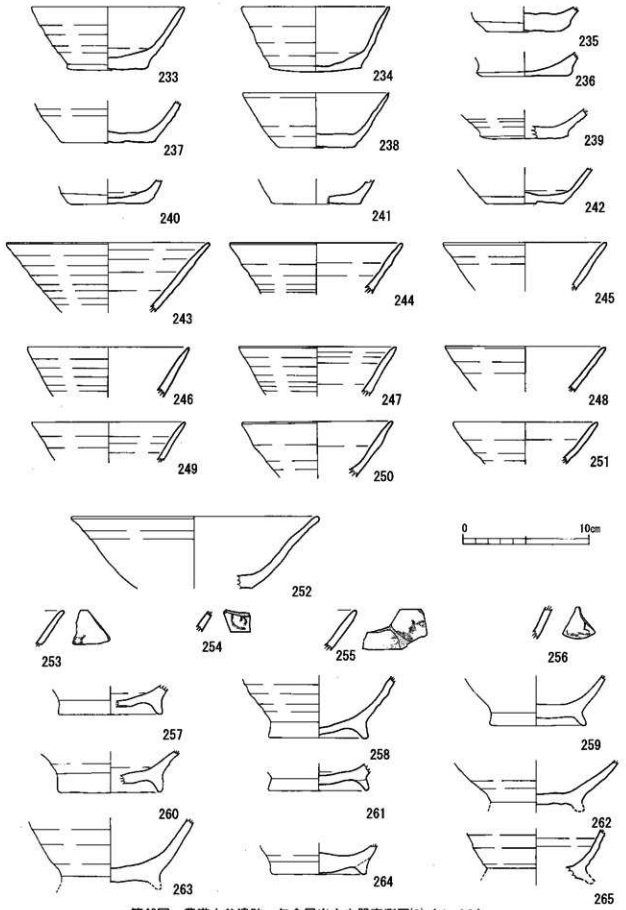


第39図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(5)（1／3）

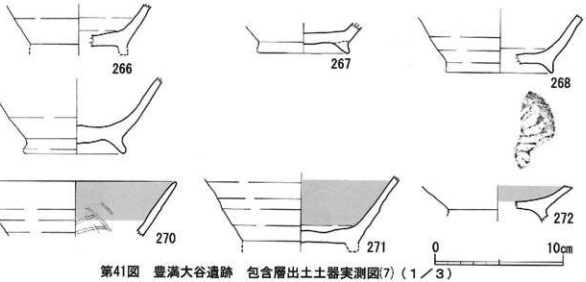
びれをもって内湾する胴部が外方に延びるものと思われ、底部の中央部が僅かに窪む。外面はナデ、内面は粗いナデである。232は底部がくびれ、端部が大きく張り出すものと思われる。内外面ともナデである。

第40図233～256は高台の付かない坏である。器形によってⅢ類に大別される。坏Ⅰ類（233～242）は口径と底径の差が小さく器高の低いもので、大型（234・236・237・241）、中型（233・235・238・240・242）小型（239）に分かれる。さらに体部の遺存しているもので観察すると、体部から口縁にかけてごくわずかに内湾(233)、外反するもの（235・237～242）、直線的に開くもの（234）に細分される。これらの中には底部の形態が235のように厚手のものと、234・244のように薄手のものが混在しているため、さらに細々分することも可能と思われる。底部は全てヘラ切りと思われ、器面調整は内外面とも回転ナデである。235・240・242は外面に意図部ヘラ削りが施され、238は内面に回転ナデ後ナデが施されている。坏Ⅱ類（234～252）は底径と口径の差が大きくなり、体部は基本的にラッパ状に大きく開くタイプのものが主流を占め、さらに体部を観察すると、体部から口縁部にかけて、ごくわずかに内湾するもの（250・251）、緩く外反するもの（243・245・247・249・252）、直線的に開くもの（244・246・248）に細分される。器壁は体部から口縁部にかけて非常に薄く、口唇部は鋭利な雰囲気をもつ。器面調整は243～246・248・250～252は内外面とも回転ナデで、247・249は内外面ともナデである。坏Ⅲ類（253～256）は基本的に小型のもので器壁は薄い。墨書土器である。器面調整は内外面とも回転ナデである。なお253～256の体部に墨書がみとめられたがいずれも判読不可能であった。

257～269は高台が付く埦である。体部上半をほとんど欠いている為、高台の形状で細分した。257・258・265・266（高台付埦Ⅰ類）は高台が外方に開き端部が平坦に近いもので、高台上位に屈曲部があり段を有する器形と思われる。262～264は高台が外方に開き端部が丸いもので、体部は263のようにやや内湾しながら立ち上がるタイプと考えている。259・262・267～269（高台付埦Ⅱ類）は高台が外方に開き端部外方の強いナデ調整によって先端が尖り気味になるので、高台先端が三角形状になる。260（高台付埦Ⅲ類）は高台がほぼ直立し断面が三角形状となる。264は器高に比して底部の器壁が厚く法量



第40図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(6)（1／3）



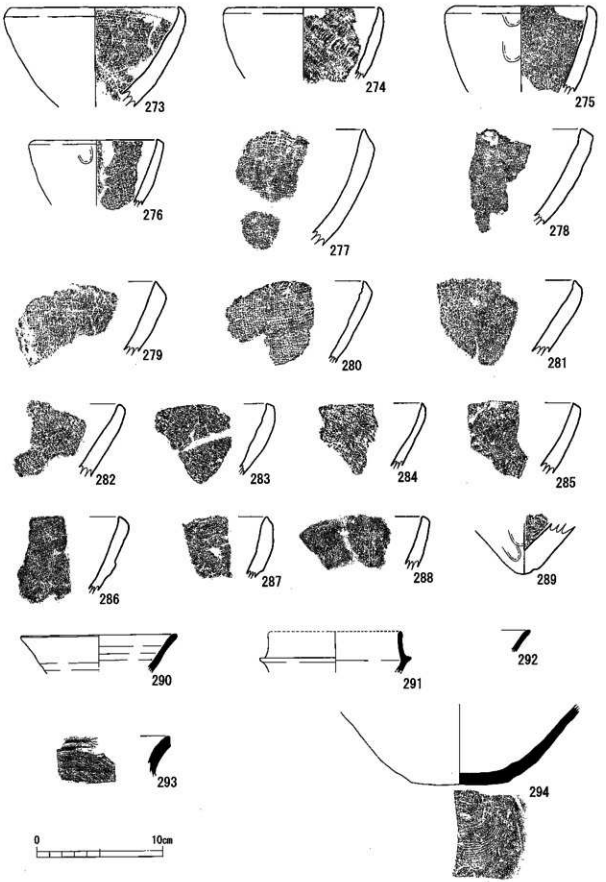
第41図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(7)（1／3）

も小さい。器面調整は257・258・260・262・264～269は内外面とも回転ナデで、259・261・263は内外ともナデである。底部は全てヘラ切りと思われる。

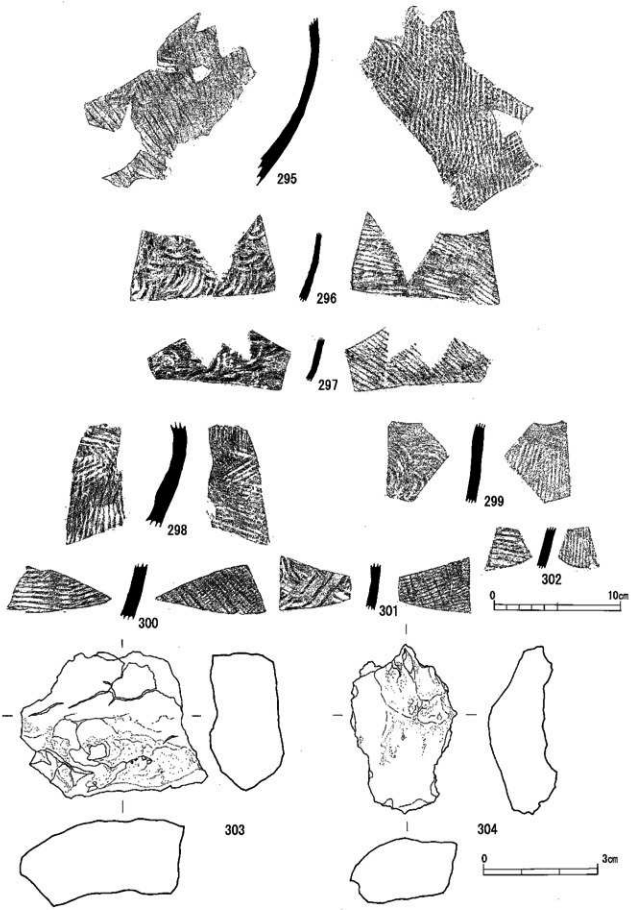
第41図270～272は黒色土器である。270は外面はナデ、内面は黒色でミガキが施され、光沢を帯びている。また外面に黒斑が見られる。271は高台の上位に屈曲部があり、段を有する器形を想像しているが体部や高台部を欠損しているため推測の域を出ない。また、271は内面にミガキが施され、光沢を帯びている。272は端部が外側に開いた高台が体部直下よりもやや外寄りに付き、底径はいくぶん小型化するが器高は低いままで、体部下端から緩く外反しながら立ち上がるものである。外面はナデで、内面は黒色でミガキが施されている。

第42図273～289は布痕土器である。製と塩や塩の運搬に使用されたと考えられている円錐状の器形でやや内湾気味の胴部と口唇部尖る特徴をもつ。南九州東岸部では一般的な形態で、「布痕土器」と呼称されている。内面に荒い布の圧痕、外面に指頭圧痕を残すものが多い。口唇部の形態では同一個体においても部分ごとにかなり差がみられるが、三角形の断面が基本とみられる。底部は尖底を基本とする。また口縁端部は製作過程によるヘラ切り落としで面取りがされている。大きさや形状によって次のように分類できる。Ⅰ類は横からみた形状が横長の三角形状のもの(273)、Ⅱ類は横からみた形状が正三角形状のもの（274～278)、Ⅲ類は横からみた形状が縦長の三角形状のもの（279～288)、289底部である。

第42図290～第44図302は須恵器である。290・292は坏の口縁部片である。内外面とも回転ナデである。291は坏身、293は壷の口縁部片である。外面はタタキの上をナデ、内面はナデ調整である。294は東播系こね鉢の底部と思われる。糸切り底で、外面は回転ナデ後斜方向にナデを施し、内面は回転ナデ後横方向にナデを施している。295～297・300～302は壷の胴部である。295・296は外面は平行タタキ、296の内面は同心円当具痕がみられる。297は外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕がみられる。300・301は外面は格子目タタキ後ナデ、301の内面は同心円当具痕がみられる。302は外面は縦に平行タタキ、内面は斜方向に平行当具痕が施されている。298は壷の底部で、外面は格子目、平行タタキ、内面は横・縦・斜方向に平行タタキが施されている。299は壷の頸部である。外面は横方向にナデ、縦に平行タタキを施し、内面は横方向のナデ、同心円当具痕がみられる。303・304は土製のフィゴの羽口である。外器面にガラス質の自然釉が付着している。



第42図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(8)（1／3）



第43図　豊満大谷遺跡　包含層出土土器実測図(9)（1／3）

3　近世から近代の遺構と遺物

豊満大谷遺跡では、近世から近代にかけて、道路状遺構３条、溝状遺構１条が検出された。なお、検出面が傾斜地であり遺物の流れ込みも十分想定されるため、同一遺構内から時期の異なる遺物が出土しているものについては、出土状況について詳細に記することにする。

(1)　道路状遺構・溝状遺構

１・２・３号道路状遺構（ＳＧ１・ＳＧ２・ＳＧ３：第45・46図）

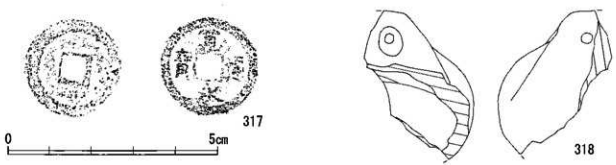
１号・２号・３号道路状遺構は、Ａ区北端・南端部、Ｂ区南端２北側の第Ⅱ層（白ボラ・御池ボラ混入黒色土）で検出された。１号・２号・３号とも同一方向性を有し、斜面にそって北西から南東に走行する。検出全長は11.5mを測る。１号は、道路の幅0.6mで検出面の深さは最深部で20cmを測る。断面はU字形を呈し、系１～５㎜の御池ボラを含む暗褐色土で硬くしまっている。断面を見ると幅約20～35cm、厚さ３～５cmの硬化層がある。硬化層は径１～３㎜の黄橙色粒子と灰色粒子を多量に含み、上下が赤褐色の酸化鉄に覆われている。２号・３号も同じような埋土状況で、１号・２号・３号とも同一年代のものと推定される。どの遺構も埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

10号溝状遺構（ＳＥ10：第45・47図）

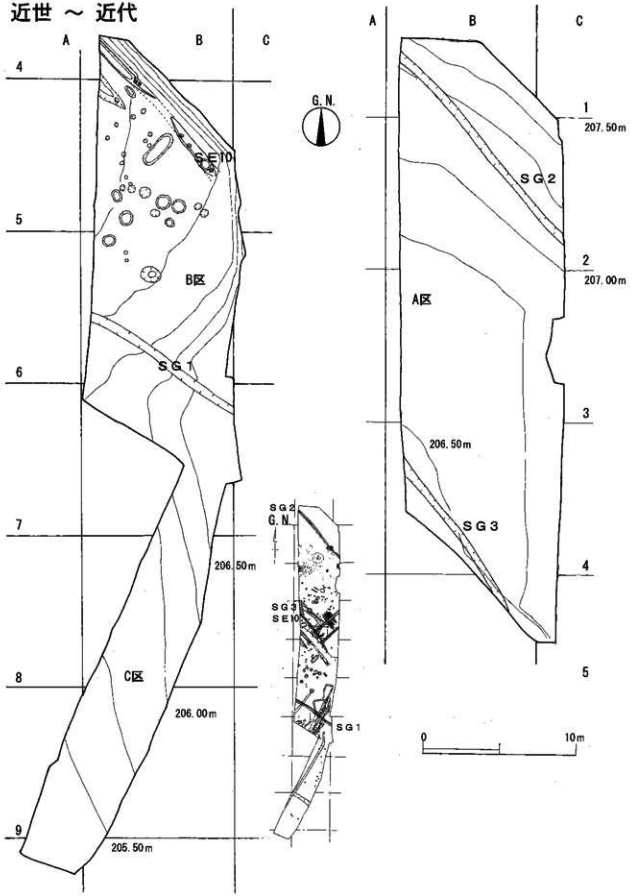
Ｂ区先端部、Ａ区との境で検出された。溝は斜面に沿って北西から南東で、検出全長は11.2mを測る。溝の幅は、0.32～0.5mで検出面の深さは最深部で38cmを測る。埋土の主体は粗い黄橙色粒子や１～1.5㎜程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。断面はU字形を呈し、径１～５㎜の御池ボラを含む暗褐色土で硬くしまっている。なお、溝は南東に向かって次第に浅くなり、南東壁沿は削平され検出不可能である。また、最深部にピットが６基検出され、ピットは第Ⅴ層（御池ボラ層）より掘り込まれ、覆土は硬く御池ボラを少量混入した褐色土層である。ピットの形態は共に楕状である。規模は長径10～40cm、短径10～34cm、深さ25～30cmを測る。埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

(2)　包含層出土の遺物（第44図）

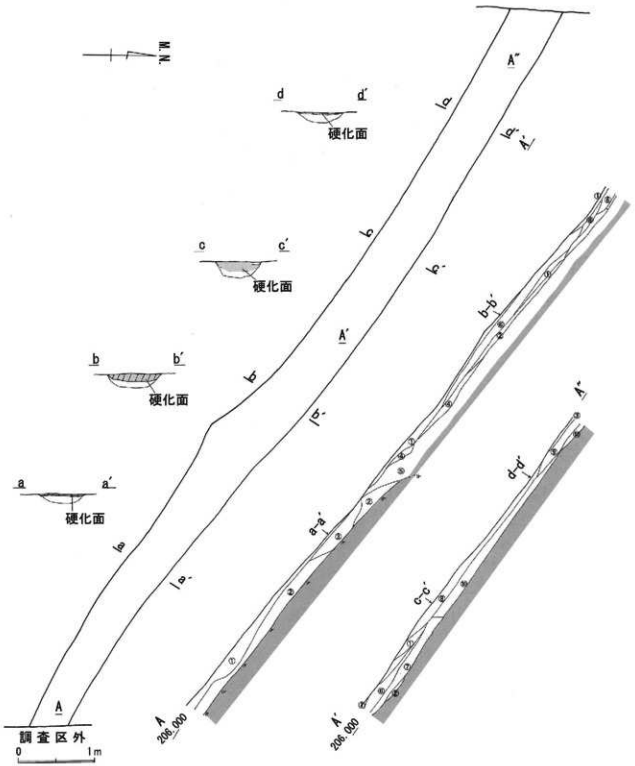
317は古銭で、寛永通宝であり、江戸時代のものである。318は土製の鈴ではないかと思われる。約半分以上が欠損しているため推測の域を出ない。



第44図　豊満大谷遺跡　古銭・土製品実測図（１／３）

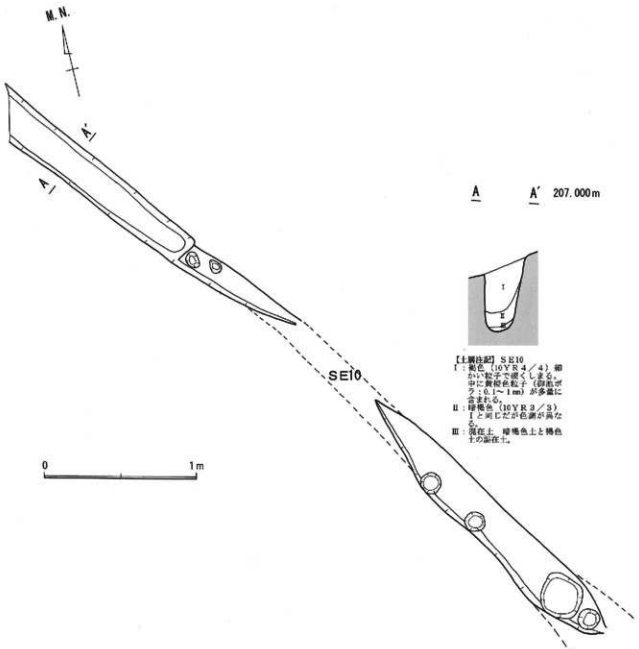


第45図　豊満大谷遺跡　近世から近代の遺構分布図（1／250）



【土層注記】SG1
①：暗灰色（N3／0）硬化面　上下が赤褐色の酸化鉄におおわれている。中に0.1mm～3mm大の灰色・黄色のポラが多量に含まれる。
②：褐色（10YR4／4）高水土層
③：黒褐色（10YR3／1）やや粘土質でしまりがある。中に0.1～3mm大の白色・黄色のポラが含まれているためザラザラ感がある。
④：黒色（10YR2／1）硬質の土でしまりが強い。中に0.1～3mm大の白色のポラを多く含む。
⑤：黒色（10YR2／1）やや粘質土で硬くしまりが強い。中に0.1～1mm大の白色黄色のポラを少し含む。
⑥：オリーブ黒色（7.5YR2／1）硬化面　黒色土と砂の混合土。
⑦：黒色（N7.5Y2／1）③の黒色土のブロック。硬くしまりがあり、砂粒が含まれるため、多少のザラ質感がある。
⑧：黒色（N3／0）硬化面　2mm～3mm大のしろポラが多く含まれる。
⑨：黒色（N3／0）硬化面　赤褐色の酸化鉄としろポラを含む。
⑩：オリーブ黒色（7.5YR3／1）⑥と同じだが硬化はしていない。
⑪：黒褐色（10YR3／2）硬質土でしまりが強い。中に0.1～1mmのしろポラがわずかに含む。

第46図　豊満大谷遺跡　1号道路状遺構実測図及び土層断面図（1／50）

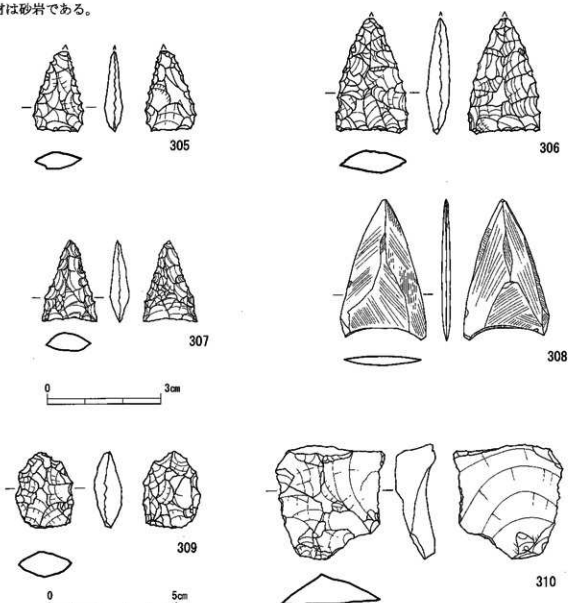


第47図　豊満大谷遺跡　10号溝状遺構実測図（1／50）

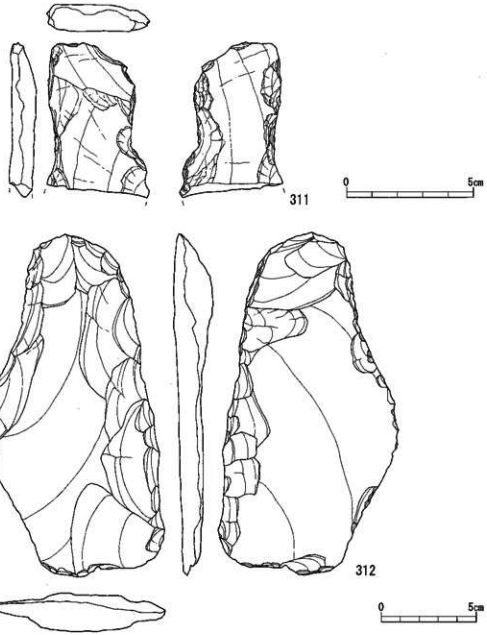
4 石 器

包含層から出土した石器は少なく、第49図～第51図に記載したものがほとんどである。石器の使用された時期については特定できないので一括して記述したい。

第49図305～307は打製石鏃である。305は全体の形状が二等辺三角形をしている平基式の石鏃である。使用石材は頁岩である。306は平面形が二等辺三角形で基部は凹基であるが浅い。加工は全面におよび側縁部は曲線的である。307は平面形が二等辺三角形で基部は凹基である。側縁部は直線的である。306・307の使用石材はチャートである。308は磨製石鏃で凹基石鏃である。使用石材は緑色珪質岩である。309は表裏両面に剥離のある削器である。310は剥片である。使用石材は309・310ともにチャートである。311～313は砂岩製の打製石斧である。311は小型で両側縁部の基部近くに抉りを入れたものである。312は中型で基部近くに抉りを入れている。314～316は磨石である。314は楕円形の扁平な礫で、片面に磨痕が観察される。使用石材は砂岩である。315・316は楕円形の扁平な礫で表裏両面に磨痕がある。使用石材は砂岩である。



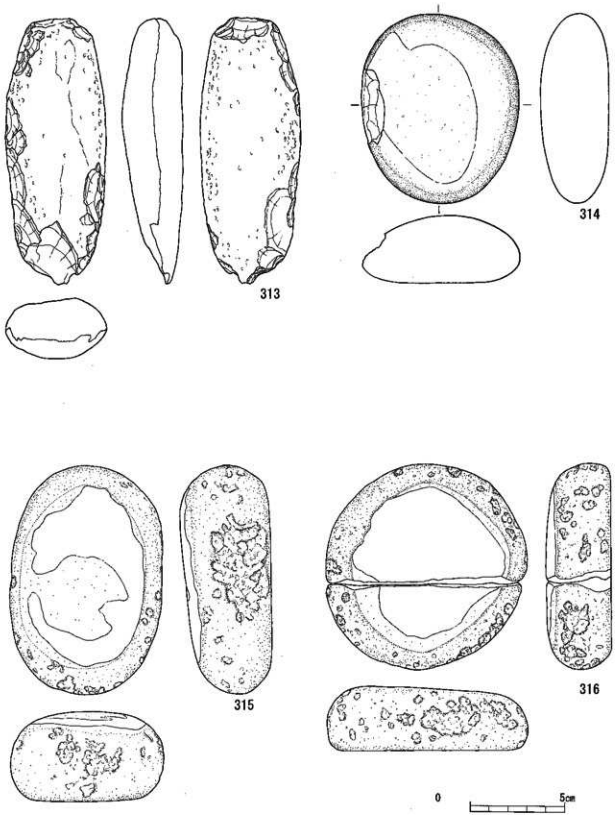
第48図　豊満大谷遺跡　石器実測図(1)（305～308…１／３、307～310…１／２）



第49図　豊満大谷遺跡　石器実測図(2)（311…1／2、312…2／3）

第4表　豊満大谷遺跡　出土石器及び古銭・土製品計測表

遺物	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
131	砥石	B区：SA1	29.2	15.7	8.0	4,500.0	砂岩	
305	打製石鏃	A区：II層	2.1	1.4	0.5	1.0	頁岩	
306	打製石鏃	A区：II層	3.0	1.9	0.5	2.7	チャート	
307	打製石鏃	2トレンチ	2.2	1.5	0.5	0.9	チャート	
308	磨製石鏃	2トレンチ	3.7	2.3	0.2	2.0	緑色珪質岩	
309	剥片	A区：IV層	3.1	2.3	1.1	6.7	チャート	
310	剥片	A区：IV層	4.6	4.4	1.6	24.4	チャート	
311	石斧	B区：S－5	8.2	5.5	1.5	78.7	砂岩	
312	石斧	B区	14.2	5.4	3.3	342.3	砂岩	
313	石斧	B区	14.2	5.4	3.3	342.3	砂岩	
314	磨石	B区：南	10.1	8.3	3.6	428.3	砂岩	
315	磨石	C区	12.2	8.2	4.8	754.3	砂岩	
316	磨石	B区	11.0	10.7	3.5	648.9	砂岩	
317	古銭	A区	2.5	2.5	0.1	3.3		
318	土製品（土鈴）	A区	3.8	2.3	1.4	6.3		



第50図　豊満大谷遺跡　石器実測図(3)（1／2）

第5表　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(1)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
116	土師器	B区：SA1	鉢	口縁部～体部	12.9	5.0	14.1	横方向のナデ、指押え、ミガキ後に横ナデ	指押え、横ミガキに横ナデ	にぶい橙	明赤褐	2mm以下の褐色の砂粒及び透明の光沢粒	
117	土師器	B区：SA1	鉢	口縁部～底部	15.4		9.4	横方向のナデ、ミガキ	横方向のナデ、ミガキ後下寧なナデ	明赤褐にぶい褐	明赤褐にぶい黄橙	1mm前後の透明光沢、淡黄色粒、1～2mmの乳白・橙・褐色粒	黒変
118	土師器	B区：SA1	台	口縁部	推定7.8			ミガキ	ミガキ	明赤褐	橙	9mmの淡黄色の小石、3mm以下の赤褐色、微細な光沢粒	部分黒変
119	土師器	B区：SA1	鉢	口縁部～底部	13.0			横方向のナデ、ミガキ	横方向のナデ、ミガキ後下寧なナデ	明赤褐にぶい橙	明赤褐にぶい黄橙	1mm前後の透明光沢・淡黄色粒、1～2mm乳白・橙・褐色粒	黒変
120	土師器	B区：SA1	鉢	口縁部～胴部	推定11.6			不定方向のナデ、横方向のナデ	横方向のナデ、不定方向のナデ	明赤褐	橙	5mm以下の褐色の砂粒、1mm以下の透明の光沢粒・黒色の光沢の砂粒	
121	土師器	B区：SA1	壺	頸部～底部				横方向に丁寧なミガキ、一部スス付着	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色粒、2mm以下の赤褐、黄褐色粒	一部黒変
122	土師器	B区：SA1	甕	底部		5.2		ナデ、一部指による強いナデ、スス付着	ナデ、一部工具によるナデ痕	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の光沢粒、2～3mm大の褐、黒色粒	
123	土師器	B区：SA1	高坏	坏部	24.4			横方向のミガキ後ナデ、縦方向のミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	明赤褐	橙	4mm以下の褐色粒、2mm以下の赤褐、黒変褐色粒	黒変
124	土師器	B区：SA1	高坏	坏部	20.2			ミガキ、一部スス付着	ナデ	橙	橙	6mm以下の赤褐色粒、5mm以下の褐色粒、1mm以下の乳白粒、透明光沢粒、3mm以下の半透明光沢粒	風化
125	土師器	B区：SA1	高坏	坏部～脚部	13.0			横方向にミガキ、横方向のナデ	部分的にミガキ	橙	橙	炭る微粒子、0.1～2mmの乳白色、灰褐色、3mmの黒褐、白灰色の砂粒	風化
126	土師器	B区：SA1	高坏	脚部～脚端部	16.1	9.7	10.9	横方向のナデ、ミガキ、ナデ、スス付着痕	横方向のナデ、工具による丁寧なナデ	橙	にぶい橙にぶい黄橙	微細～1mm大の透明淡黄色粒、1～2mm大の褐色少量	
127	土師器	B区：SA1	杯	体部	17.3			ミガキ	指圧痕後、ミガキ、ナデ	橙	黄橙灰黄褐	5mm以下の灰褐色、茶褐色粒を少し含み、1mm前後の茶褐色、乳白色粒、光沢粒	黒炭
128	土師器	B区：SA1	高坏	坏部				ミガキ、ナデ	ナデ。	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の鉄黄・乳白色粒、1～2mmの透明光沢、褐色粒	
129	土師器	B区：SA1	高坏	脚部～裾部		10.3		ミガキ、スス付着	丁寧なナデ、スス付着	明赤褐	明赤褐	2mm以下の透明光沢粒、灰色粒、赤褐色粒	
130	土師器	B区：SA1	高坏	脚部～裾端		12.8		縦方向のミガキ、ミガキ後丁寧なナデ	指ナデ後上具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下のにぶい黄、黄灰色粒、微細な黒色、透明光沢粒	
132	土師器	B区：SA1	甕	口縁部～胴部	25.0			横ナデ、貼付刻目突帯、ナデ、スス付着	指ナデ、粗い工具ナデ	灰黄色	にぶい橙	7mm以下の赤褐色の砂粒、1mm以下の灰白の砂粒、微細な透明光沢粒	
133	土師器	B区：SA1	甕	口縁部～胴部	25.2			貼付刻目突帯、ハケ目、スス付着	指ナデ、工具で横ナデ後指ナデ	にぶい橙黒褐	にぶい橙黒褐	光沢のある透明の砂	
134	土師器	B区：SA1	甕	口縁部～胴部				貼付刻目突帯、工具ナデ痕	横方向のナデ	にぶい黄橙にぶい黄橙	にぶい橙	1mm以下の茶色、灰色、黒色等の砂粒	
135	土師器	B区：SA1	甕	口縁部～胴部				横方向のナデ、貼付刻目突帯、指ナデ	横方向のナデ、ナデ	明赤褐	橙	5mm以下のにぶい橙色粒、2mm以下のにぶい褐色粒、1mm以下の茶色、透明光沢粒	
136	土師器	B区：SA1	鉢	口縁部～胴部				指押え、粗いナデ、貼付刻目突帯、スス付着	横方向のナデ	橙	橙	2.5mm以下の橙色の砂粒及び灰白の砂粒、微細な半透明及び光沢のある透明な砂粒	
137	土師器	B区：SA1	甕	口縁部～胴部				横方向のナデ、貼付刻目突帯、スス付着	板状行具による横方向のナデ、ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	炭る微粒子、0.5～1mm大の茶、灰白、褐灰色の砂粒	
138	土師器	B区：SA1	甕	口縁部				貼付刻目突帯、ナデ、スス付着	ナデ	橙	橙	1mm以下の茶褐色、灰褐色粒	
139	土師器	B区：SA1	鉢	口縁部～胴部				貼付刻目突帯、粗いナデ、スス付着	指押え、工具ナデ	灰褐	褐灰	3mm以下の褐灰色の砂粒、微細な光沢のある透明の砂粒	
140	土師器	B区：SA1	甕	底部		推定5.6		ナデ	不定方向の上具ナデ	にぶい黄橙	明褐 黒褐	微細～1mm大の透明光沢・黒色光沢粒、1mm大の鉄黄・茶色粒、2mm大の茶色粒、4mm大の褐色粒	
141	土師器	A区：IV層	壺	口縁部～底部	推定14.7	推定8.7		ナデ	ナデ	橙	橙	褐色・黒色・鉄色等の微粒	
142	土師器	A区：集石状遺構	壺	口縁部～底部	推定15.4	推定8.2		ナデ				1mm以下褐色・灰色・茶色の砂粒	風化
143	土師器	A区：集石状遺構	壺	体部～底部		推定8.9		ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	種良	風化
144	土師器	A区：集石状遺構	壺	口縁部～底部	推定13.0	6.7		回転ナデ	回転ナデ	橙	橙にぶい橙	微細な黒色光沢、透明光沢粒、1mm以下の褐色・褐灰色の粒	
145	土師器	A区：集石状遺構	壺	口縁部～底部	推定11.6			回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の橙の砂粒及び褐色粒、微細な透明の光沢粒	
146	土師器	A区：集石状遺構	壺	体部～底部		推定10.7		ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	1mm以下の白色粒、1.5mm以下の乳白色粒、1mm以下の黒色・透明光沢粒	風化
147	土師器	A区：集石状遺構	坏	口縁部～胴部	推定14.3			ナデ、指押え、ヘラ工具による調整	布目痕	橙	橙	5mm大の赤褐色粒	
148	土師器	A区：竪石状遺構	坏	口縁部～胴部	推定13.8			ナデ、指押え、ヘラ工具による調整	布目痕	灰黄橙	橙	5mm大の褐色粒	
149	土師器	A区：集石状遺構	坏	口縁部～胴部	推定12.8			ナデ、指押え、ヘラ工具による調整	布目痕	橙	橙	1～5mmの赤褐色粒。4mm大の淡黄色、5mm大の灰色の粒	
150	土師器	A区：集石状遺構	坏	口縁部～胴部	推定10.2			ナデ、指押え	布目痕	橙	橙	微細な黒色光沢、2mm以下の淡黄の粒、2～5mm大の赤褐色の粒	
151	土師器	A区：集石状遺構	坏	口縁部～胴部	推定9.0			ナデ、指頭痕	布目痕、ナデ	黄橙にぶい黄橙	黄橙橙	1mm以下の茶色粒、2～3mm大の橙・赤色粒	
152	土師器	A区：集石状遺構	坏	口縁部～胴部				ナデ、指頭痕	布目痕	橙	橙	微細な茶色粒、2mm以下の橙色粒、きめ細かい	
153	土師器	A区：集石状遺構	坏	口縁部～胴部				ナデ、指頭痕	布目痕、剥離	橙	橙	1mm大の茶色粒、2mm大の橙色粒	風化

第6表　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(2)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
154	土師器	A区：SC1	甕	口縁部				横方向の工具ナデ、スス付着	横方向の工具ナデ、ケズリ	にぶい橙	にぶい褐	4mm以下の灰色粒、1mm以下の乳白色粒、透明光沢粒、褐色粒	
155	土師器	A区：SC1	甕	胴部				ナデ、貼付刻目突帯(布目痕)	ナデ	橙	橙	3mm以下の橙色粒、灰色粒、2.5mm以下の半透明光沢粒	黒変
156	土師器	A区：SC1	坏	口縁部				横方向ナデ	横方向のナデ	橙	橙	肌色、黒色等の微粒、ガラス質に光粒	
157	土師器	A区：SC1	坏	口縁部				横方向のナデ	丁寧な横方向のナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	肌色、褐色、白色、黒色の粒	
158	土師器	A区：SC1	坏	口縁部				ナデ、ミガキ	ナデ、横方向のナデ	明赤褐	明赤褐	2mm以下の白色、褐色、茶色等の粒	
159	土師器	A区：SC1	鉢	口縁部	推定12.6			ナデ	布目痕	橙	橙 黄橙	2mm以下の赤褐色の粒、5～7mm大の橙の粒4個、橙色の礫1個	
160	土師器	A区：SC1	鉢	底部付近				ナデ	布目痕	橙	橙	微細な乳白色粒	風化
161	土師器	A区：SC1	深鉢	頸部～胴部				横方向のミガキ後ナデ	横方向のミガキ後ナデ	明褐	明赤褐	1mm以下の灰黄、灰白色粒	黒変
162	土師器	A区：SC1	深鉢	口縁部				指押え、貝殻条痕文スス付着	ナデ、指押え	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白の砂粒及び半透明の光沢粒	
163	土師器	A区：SC1	深鉢	口縁部				ナデ、横方向に貝殻条痕文	横方向に貝殻条痕文	黄灰	灰黄	2.5mm以下の灰白の砂粒及び半透明の光沢粒	
164	土師器	A区：SC1	深鉢	屈曲部				横方向に貝殻条痕文スス付着	貝殻条痕文後に横方向のナデ	浅黄	灰黄	2.5mm以下の淡黄の砂粒及び2mm以下の透明の光沢粒、半透明の光沢粒	
165	土師器	A区：SC1	深鉢	屈曲部				貝殻条痕文、スス付着	横方向のナデ	暗灰黄	浅黄	2.5mm以下の黄灰の砂粒及び1mm以下灰白の砂粒、微細な透明の光沢粒	風化
166	土師器	A区：SC2	浅鉢	胴部～底部		6.1		一部スス付着、横方向のナデ	斜め方向に貝殻条痕文指ナデ	浅黄	淡黄	4mm以下の灰白及び灰黄の砂粒、1.5mm以下の透明の光沢粒	風化、黒変
167	土師器	A区：SC2	浅鉢	口縁部				横方向にミガキ	ミガキ後に工具によって稜ができる、ミガキ	暗灰黄	黄灰	1mm以下の灰黄の砂粒及び微細な透明の光沢粒	
168	土師器	A区：SC6	甕	口縁部～胴部				貼付刻目突帯(布目痕)工具によるナデ	工具によるナデ	灰褐	にぶい褐灰 黄褐	3mm以下の黄灰色粒、1mm以下の淡黄色粒	
169	土師器	A区：SC6	甕	底部				工具によるナデ	ミガキ後ナデ	灰褐	にぶい赤褐	8mm以下の暗褐色粒、5mm以下の淡黄色粒	
170	土師器	A区：SC6	鉢	胴部				ナデ	布目痕	橙	橙	1mm前後の黒褐色、灰褐色の粒	
171	土師器	A区：SC6	浅鉢	頸部～胴部				ミガキ後丁寧なナデ	横方向のミガキ、ミガキ後ナデ	褐灰	褐灰	1mm以下の白色粒、微細な透明光沢粒	
172	土師器	A区：SC6	深鉢	口縁部				横方向のナデ	やや斜め方向のナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	1mm以下の淡黄色粒、1～2mm大の淡黄・透明光沢・褐、灰色粒、5mmの白色部	風化
173	土師器	A区：SC6	深鉢	突帯部				横方向のナデ	横ナデ、横方向の条痕、条痕の上をナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	1mm以下の淡黄・乳白・橙・茶色粒、1～2mmの乳白・透明粒、3mm大の淡黄色	
174	土師器	A区：SC6	浅鉢	胴部				ナデ、編目圧痕	ナデ	橙	にぶい黄橙	2mm以下の茶褐色、灰褐色粒、透明な光沢粒	
175	土師器	A区：Ⅳ層	甕	口縁部～底部	推定47.4			斜方向にハケ目後丁寧な縦方向にナデ、横方向のナデ	横方向のナデ、斜方向にハケ目	橙	橙	5mm以下のにぶい黄橙・褐色の砂粒、5mm以下の金色の光沢粒、1mm以下の黒色・灰白の砂粒	黒変
176	土師器	A区：Ⅳ層	甕	口縁部				ナデ、スス付着	ナデ、剥離	にぶい橙 明褐色	褐灰	1.5mm以下の褐色・乳白色の粒	
177	土師器	A区：Ⅳ層	高坏	坏部	推定23.4			ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄 黄灰	3mm以下の黄褐色・灰色・橙・黒色の砂粒微細な透明光沢	
178	土師器	A区：Ⅱ層	高坏	坏部	推定18.8			ミガキ	ナデ	橙	橙 黄橙	3mm以下の黄褐色の粒、1.5mm以下の無職透明の粒	
179	土師器	A区：Ⅱ層	高坏	坏部	推定16.8			ミガキ、スス付着、指頭痕	回転ナデ	にぶい橙	明黄褐	8mmの褐色粒、5mmの明黄褐色粒、3mm以下の灰白・褐色・透明光沢・黒色光沢の粒	
180	土師器	A区：Ⅳ層	高坏	坏部				ミガキ	内黒	黒褐	明赤褐	1mm以下の光沢のある粒	241と同一個体
181	土師器	A区：Ⅳ層	高坏	脚部				ナデ	ナデ、指頭痕	にぶい橙	にぶい黄橙	微細な黒い粒	
182	土師器	A区：Ⅳ層	高坏	坏部～脚裾部		推定12.6		ヘラミガキ、ナデ、ヘラミガキ後のナデ	ヘラミガキ	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な白い粒、黒い粒、光る粒	風化
183	土師器	A区	壺	口縁部	推定23.8			回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3.5mmのにぶい黄橙色の粒、1.5mm以下の灰・黒・灰白・にぶい黄色の砂粒	
184	土師器	A区：Ⅳ層	壺	口縁部	推定9.3			回転ナデ後工具によるナデ、ハケ目	回転ナデ、剥離	明黄褐 浅黄	にぶい黄橙	2mm以下のにぶい橙・黒・灰・明褐色の砂粒	
185	土師器	A区：Ⅳ層	壺	口縁部				横・斜方向にハケ目、丁寧なナデ	ハケ目後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細～1mm大の褐色の粒、光沢のある粒	
186	土師器	A区：Ⅳ層	壺	口縁部				横・斜方向のナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無職透明の鉱物粒	
187	土師器	A区：Ⅳ層	壺	口縁部				横方向のナデ	ナデ、ミガキ	浅黄 にぶい黄	灰黄	微細な無職透明の鉱物粒	
188	土師器	A区：Ⅱ層	壺	口縁部	推定11.2			ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙 褐灰	4mm以下の赤褐色の粒、2mm以下の褐色の粒	黒変
189	土師器	A区：Ⅱ層	壺	頸部～胴部				ナデ、スス付着	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙 黒褐	明黄褐	1mm前後の灰褐・茶褐・黒褐色の粒	
190	土師器	A区：Ⅱ層	高台付鉢	口縁部～高台	推定17.2			ミガキ後ナデ	横方向のナデ、ナデ、丁寧なナデ	にぶい橙	橙	4mm以下の浅黄・赤褐・灰白・にぶい褐色の砂粒	
191	土師器	A区：Ⅳ層	鉢 ミニチュア	口縁部～底部	推定11.8			不定方向にミガキ、指押え	不定方向にミガキ、指押え	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の褐色の砂粒、微細な灰色の砂粒、透明の光沢粒	黒変

第7表　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(3)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
192	土師器	A区：Ⅱ層	鉢	口縁部～胴部				ナデ	ナデ	明褐	橙	9mm以下のにぶい黄橙色の粒、3.5mm以下の灰黄褐・黒褐色・透明光沢・黒色光沢の砂粒	
193	土師器	A区：Ⅳ層	甕	口縁部～胴部	推定36.4			ハケ目、刻目突帯、布目痕	ナデ、ハケ目	橙	橙 にぶい黄橙	3mm前後の茶褐色・灰褐色の粒	風化
194	土師器	B区：S-5	甕	口縁部～胴部	推定29.0			ハケ目後ナデ、刻目突帯、布目圧痕	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下のにぶい赤褐色粒、2mm以下の灰白・黒色光沢・半透明色粒	風化
196	土師器	A区：Ⅳ層	甕	口縁部				粗いナデ	粗いナデ、スス付着	浅黄橙	浅黄橙 黄褐	4mm以下の灰色・赤褐色の粒、2mm以下の灰白色の粒	黒変
196	土師器	A区：Ⅳ層	甕	口縁部				ハケ目、スス付着、斜方向の工具痕、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色・赤褐色の粒、3mm以下の灰白色・黒色の粒	
197	土師器	A区：Ⅳ層	甕	口縁部～胴部	推定31.2			斜方向にハケ目、刻目突帯、横ナデ	横・斜方向にハケ目	にぶい橙	にぶい黄橙	4mm以下の褐色の砂粒、2mm以下の不透明の光沢、灰色の砂粒	黒変
198	土師器	A区：Ⅳ層	甕	口縁部～胴部				工具による横ナデ、斜方向のハケ目、刻目突帯	指ナデ、指押え後斜方向のハケ目	橙	にぶい橙 黒褐	2mm以下の黒・黒褐・赤褐・灰白色の粒	
199	土師器	C区	甕	口縁部～胴部				横方向のナデ、縦方向のハケ目、スス付着	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm以下の褐色粒、1.5mm以下の乳白色粒1mm以下の透明光沢粒	
200	土師器	A区：Ⅳ層	甕	頸部				横方向のナデ、刻目突帯、斜方向にハケ目	斜方向にハケ目	にぶい黄橙	灰黄褐	1～2mm大の乳白・茶・灰色粒	
201	土師器	A区：Ⅳ層	甕	頸部				斜方向にハケ目、刻目突帯	横方向にハケ目	橙	にぶい黄橙	1mm以下の透明の光沢粒、褐色・橙色・白色の砂粒、微細な黒色の光沢粒	風化
202	土師器	A区：Ⅳ層	甕	頸部				斜方向にハケ目後に刻目突帯	斜方向にハケ目、一部指ナデ	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の黒色・褐色の砂粒、不透明の光沢粒	黒変
203	土師器	B区：西	甕	胴部				ナデ、刻目突帯	ナデ	橙	明赤褐	1.3mm大の褐色粒、5mm大のにぶい橙色粒1mm以下の灰色、透明光沢粒	風化
204	土師器	C区	甕	胴部				刻目突帯、斜方向にハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐 にぶい橙	1～2mm大の褐・茶・灰色粒	
205	土師器	A区：Ⅳ層	甕	胴部				ナデ、刻目突帯、布目痕	指ナデ、ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	4mm以下の黒褐色粒、2mm以下のにぶい黄褐・灰白・半透明色粒	
206	土師器	A区：Ⅱ層	甕	突帯部				ナデ、刻目突帯	斜方向にナデ	橙	橙	白色・黒色・灰色・黒色等の1mm以下の粒	
207	土師器	A区：Ⅳ層	甕	突帯部				斜方向のハケ目、刻目突帯	横方向のハケ目	黒褐	にぶい黄橙	灰色・褐色・黒色・茶色等の2mm程度の光る細粒	
208	土師器	B区：P2	鉢	口縁部	推定17.3			斜方向のハケ目、ナデ	斜方向のハケ目	にぶい黄橙 浅黄橙	浅黄橙 褐灰	4mm以下の褐色・赤褐色の粒、2mm以下の乳白色の粒	
209	土師器	A区	壺	口縁部	推定13.0			横・斜方向のハケ目、ナデ	斜方向のハケ目、ナデ	浅黄橙	灰白 暗灰黄	3mm以下の褐色の粒、1.5mm以下の赤褐色の黒色の粒	
210	土師器	A区：Ⅱ層	壺	頸部				横方向のナデ、貼付刻目突帯、布目痕、ナデ	工具ナデ、指頭痕、横方向のナデ	橙	にぶい橙	透明、黒く光るガラス質の細片、0.5～2mmの白灰・褐色・灰色粒、4～5mm大の灰褐・にぶい褐色の砂粒	
211	土師器	B区	壺	口縁部				粗いナデ後指押え、刻目突帯、横方向のナデ	横方向のハケ目後に斜方向にナデ	橙	にぶい橙	5mm以下の褐色の砂粒、2mm以下の透明の光沢粒、微細な黒色の光沢粒	
212	土師器	A区：Ⅱ層	壺	胴部～底胴部		推定6.7		ハケ目、横方向のナデ、斜方向にナデ	ハケ目、ナデ	にぶい黄橙	黒	2mm前後の黒褐・灰褐色の粒	
213	土師器	A区：Ⅱ層	壺	底部		8.2		横方向のナデ	ナデ	灰黄	橙	3mm以下の灰白及び褐灰の砂粒、2mm以下の黒色の光沢粒、半透明の光沢粒、微細の透明な光沢粒	黒変
214	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部～胴部	推定27.5			ナデ、格子目タタキ、指ナデ	横方向のナデ、指頭痕、ハケ目	にぶい黄橙 にぶい橙	橙	3mm以下の赤褐・にぶい赤褐・灰・にぶい橙・灰白・黒色・透明光沢の砂粒	
215	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部～胴部	推定22.5			横方向のナデ、ハケ目	横方向のナデ、ハケ目	橙 浅黄橙	浅黄橙	4mm以下の赤褐色の粒、1mm以下の褐色黒色の粒	
216	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部～胴部				横方向のナデ	斜方向に線状の工具痕	橙 にぶい橙	黄橙 にぶい黄橙	6mm以下の赤褐色・灰色・褐色の粒	風化
217	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部～胴部				横方向のナデ	ナデ、ケズリ	黄橙	黄橙	2mm以下の灰白・にぶい橙・灰褐・黒色透明光沢の砂粒	
218	土師器	A区：Ⅳ層	甕	口縁部～胴部				横方向のナデ	横方向の擦目、横方向のナデ	浅黄橙 橙	浅黄橙 灰黄	4.5mm以下の褐色の粒、2.5mm以下の付加褐色・灰色の粒	
219	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部～頸部				ナデ	ナデ、横方向の擦目	にぶい黄橙 浅黄橙	にぶい黄橙	3.5mm以下の褐色・赤褐色の粒	
220	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部～頸部				横方向のナデ	横方向のナデ、多方向の工具痕	浅黄	浅黄	3.5mm以下の赤褐色の粒、3mm以下の灰色の粒	
221	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部				ナデ	ナデ	橙	橙	3mm以下の赤褐色の粒、2.5mm以下の黒褐色の粒	
222	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部～胴部	推定24.0			丁寧なナデ、横方向のナデ	斜方向の粗いナデ、横方向のナデ	にぶい橙	にぶい橙	2～3mm大の褐色・白色の粒	
223	土師器	A区：Ⅳ層	甕	口縁部～胴部	推定18.6			ナデ、スス付着	ハケ目の後ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄褐	灰黄褐	2mm以下の黒色の粒、1mm以下の無職透明の粒、2mm以下の赤褐色の粒、1.5mmの灰色の粒	
224	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部～頸部				ナデ	ナデ	橙	橙	5.5mm以下の赤褐色の粒、2.5mm以下の黒褐色・灰色の粒、2mm以下の黒色光沢粒	
225	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部～頸部				ナデ	ナデ、横方向のケズリ	にぶい橙	にぶい橙	6mm以下の褐色の粒、2mm以下の乳白い、無色で透明で光沢のある粒	
226	土師器	A区：Ⅱ層	甕	口縁部				粗いナデ	粗いナデ、ヘラケズリ	にぶい褐 灰褐	橙	8.5mm以下の赤褐色の粒、2.5mm以下の灰白色の粒、1mm以下の金色の粒、3mm以下の褐色の粒	
227	土師器	A区	壺	口縁部～底部		推定6.7		縦方向にナデ、指頭痕、スス付着	ナデ、全体にスス付着	にぶい黄橙	橙 灰黄褐	6mm前後の灰褐・茶褐色の粒、微細な光沢粒	
228	土師器	B区：P2	つぼ	底部		推定6.6		ナデ	ナデ	にぶい橙	明赤褐 橙	微細な透明光沢粒、2～5mm大の褐色の粒、3mmの乳白色粒、5mm大の灰色粒	

第８表　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(4)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
229	土師器	A区：Ⅱ層	甕	底部		推定 6.8		横方向のナデ	斜解、ナデ	橙	にぶい橙	1㎜以下の乳白色、赤褐、褐灰、透明光沢粒	黒化
230	土師器	A区：Ⅱ層	甕	底部		推定 6.4		ナデ	不定方向のナデ	にぶい黄橙	黒褐	微細～1㎜の褐灰、黒色光沢、透明光沢粒、3㎜以下の褐灰の粒、5㎜以下の赤褐の粒	
231	土師器	A区：Ⅳ層	甕	底部		推定 3.8		ナデ	粗いナデ	淡黄	にぶい黄	1㎜以下の黒色光沢、灰・赤黄の粒、2㎜以下の透明光沢、黒褐色の粒	黒化
232	土師器	A区：Ⅳ層	甕	底部		推定 8.8		ナデ、スス付着	ナデ、スス付着	浅黄	浅黄	1㎜以下の乳白色、黄褐、赤褐、黒色光沢、透明光沢粒	
233	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～底部	推定 12.2	推定 6.5	推定 5.1	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	3㎜以下の褐色の粒、1㎜以下の乳白色の粒	
234	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～底部	推定 11.8	推定 7.4	推定 5.2	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 橙	橙 にぶい橙	5㎜以下の橙色の粒	
235	土師器	A区：Ⅱ層	坏	底部		6.1		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	橙	橙	微細な黒色斑光沢粒、微細～1㎜の灰色の粒、1㎜大の茶褐色の粒	
236	土師器	A区：Ⅱ層	坏	底部		推定 7.3		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	橙	にぶい橙	1㎜以下の黒色光沢粒	
237	土師器	A区：Ⅱ層	坏	体部～底部		推定 7.6		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙 灰白	にぶい黄橙	微細な褐灰・黒色粒	
238	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～底部	推定 11.6	推定 6.3	推定 4.4	回転ナデ	回転ナデ、回転ナデ後ナデ	灰白	にぶい黄橙	微細お茶・黒色粒	黒化
239	土師器	A区：Ⅱ層	坏	体部～底部		推定 4.5		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の赤褐色の砂粒、微細な透明の光沢粒	
240	土師器	A区：Ⅱ層	坏	底部		推定 6.4		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	淡黄	灰白	0.5㎜以下の黒色光沢粒、0.5㎜以下の無色透明な粒	
241	土師器	A区：Ⅱ層	坏	底部		推定 7.2		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な灰の斑点粒	
242	土師器	A区：Ⅱ層	坏	体部～底部		推定 6.1		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	淡黄	灰白	1～4㎜大の茶褐色の粒、1㎜大の無色透明の粒	
243	土師器	A区：Ⅳ層	坏	口縁部～体部	推定 16.0			回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	4㎜以下の橙の砂粒、1㎜以下の灰色・褐色の砂粒、微細な黒色の光沢粒、半透明の光沢粒	
244	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～体部	推定 13.7			回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	微細な灰白・褐色の砂粒、黒色の光沢粒	
245	土師器	A区：Ⅳ層	坏	口縁部～体部	推定 13.0			黒化著しく調整不明	黒化著しく調整不明	橙	浅黄橙	2㎜程度の褐色・灰色の粒・肌色・茶色黒色の光る粒	
246	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～体部	推定 12.8			回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	にぶい黄	1㎜以下の灰斑・赤褐・透明光沢・乳色光沢の粒、2㎜以下の黒褐色の粒	
247	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～体部	推定 12.6			ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	きめ細か	
248	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～体部	推定 12.8			回転ナデ	回転ナデ	浅黄	浅黄	きめ細か	
249	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～体部	推定 12.2			ナデ	ナデ	橙	橙	きめ細か	
250	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～体部	推定 11.9			回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1㎜以下の透明な光沢粒、微細な橙・褐色の砂粒、黒色の光沢粒	
251	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～体部	推定 11.4			回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細な灰色・黒色の砂粒、微細な透明の光沢粒	
252	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～底部	推定 20.0			回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細な黒い粒、光沢のある半透明の粒	
253	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部				回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の橙・黒色の砂粒、微細な透明の光沢粒	
254	土師器	A区：Ⅱ層	坏	体部				回転ナデ、墨書	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な褐色の砂粒	
255	土師器	A区：Ⅱ層	坏	口縁部～体部				回転ナデ、墨書	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の橙の砂粒、微細な透明の光沢粒	
256	土師器	A区：Ⅱ層	坏	体部				回転ナデ、墨書	回転ナデ	橙	にぶい黄橙	微細な橙の砂粒、透明の光沢粒	
257	土師器	A区	高台付坏	底部		推定 7.4		回転ナデ、墨書	回転ナデ	橙	橙	2㎜以下の褐色、灰白の砂粒、微細な透明の光沢粒	黒化
258	土師器	A区：Ⅱ層	高台付坏	体部～底部		推定 6.0		回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	1㎜前後の茶褐色、灰褐色の粒、微細な光沢粒	
259	土師器	A区：Ⅳ層	坏	体部～底部		推定 8.0		回転ナデ	ナデ	橙	橙	2㎜程度の茶色・褐色・灰色・黒色の粒透明に見える粒、灰色・茶色・褐色・黒色の粒	黒化
260	土師器	A区：Ⅱ層	高台付坏	体部～底部		推定 8.0		ナデ	回転ナデ	橙	橙	灰褐色の微細粒	
261	土師器	A区：Ⅱ層	坏	体部～底部		推定 8.0		回転ナデ	ナデ	橙	橙	3㎜程度の褐色・茶色の粒、褐色・黒色灰色の微粒	
262	土師器	A区：Ⅱ層	高台付坏	底部		推定 7.2		ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細な黒色の粒	
263	土師器	A区：Ⅱ層	高台付坏	体部～底部		推定 7.8		回転ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	茶褐色の微細粒	黒化
264	土師器	A区：Ⅱ層	高台付坏	体部～底部		推定 7.4		ナデ	回転ナデ、ヘラ切り	浅黄橙	浅黄橙	透明・黒色の微細粒	
265	土師器	A区：Ⅱ層	高台付坏	体部～底部				回転ナデ	回転ナデ	橙	浅黄橙	5㎜大の茶褐色の粒、1㎜以下の赤褐色灰褐色の粒	
266	土師器	A区：Ⅳ層	坏	体部～底部		推定 7.0		回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	灰色・黒色の微細粒	
267	土師器	A区：Ⅱ層	高台付坏	底部		推定 7.4		回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2㎜以下の橙の砂粒、黒色の砂粒	

第９表　豊満大谷遺跡　出土土器観察表(5)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm) 口径	(cm) 底径	(cm) 器高	手法・調整・文様ほか 外面	手法・調整・文様ほか 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
268	土師器	A区：II層	高台付坏	体部～底部		推定 8.4		回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な光沢のある黒い粒、白い粒	
269	土師器	A区：II層	高台付坏	体部～底部		推定 7.6		回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	1㎜以下の黒い粒	風化
270	土師器	A区：II層	坏	口縁部～体部	推定 13.6			回転ナデ、黒斑	ミガキ、内黒	浅黄橙 黄灰	黒	1㎜以下の浅黄色の砂粒	
271	土師器	A区：II層	高台付坏	口縁部～底部				ナデ	ミガキ、内黒	灰黄 浅黄橙	黒褐	1㎜以下の灰黄・にぶい橙・黒・灰白色の砂粒	
272	土師器	A区：II層	高台付坏	体部～底部				ナデ	ミガキ後下寄なナデ、内黒	橙	黄灰	1㎜以下の粒・灰白・黒色・透明光沢の砂粒	
273	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部～底部	推定 15.2			ナデ、指頭痕	布目痕、指頭痕	橙	橙	約1㎜以下のにぶい橙色の砂粒、1㎜以下の灰白・黒色の砂粒	風化
274	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部	推定 11.8			ナデ、ソギ落とし、指頭痕	布目痕、指頭痕、斜方向に指ナデ	橙	橙	5㎜以下のにぶい赤橙の砂粒、微細な透明の光沢粒、灰色・灰白の砂粒	風化
275	土師器	A区：II層	鉢	口縁部	推定 10.6			ナデ、指頭痕	布目痕、指頭痕	橙	橙	1㎜以下の橙の砂粒、微細な灰白の砂粒、	風化
276	土師器	A区：II層	鉢	口縁部	推定 9.8			ナデ、ソギ落とし	布目痕	橙	橙	4㎜以下の浅黄橙の砂粒、褐色の砂粒	風化
277	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部～底部				ナデ、指頭痕、指頭痕	布目痕	橙	橙	8㎜以下の橙の砂粒、1㎜以下の灰白の砂粒、透明の光沢粒	風化
278	土師器	A区：II層	鉢	口縁部～底部				ナデ、指頭痕、そぎ落とし	布目痕、指頭痕	橙	橙	7㎜以下の灰白の砂粒、4㎜以下の灰白の砂粒、2㎜以下の灰白の粒	風化
279	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部				ナデ、指頭痕、指頭痕	布目痕、指頭痕	橙	橙	7㎜以下の橙の砂粒、微細な透明の光沢粒、灰白の砂粒	風化
280	土師器	A区：II層	鉢	口縁部～胴部				ナデ、ソギ落とし、部分的に自然釉	布目痕	橙	橙	3～5㎜の灰色・黒色・褐色の粒、黒色自色・灰色・褐色の微粒	
281	土師器	A区：II層	鉢	口縁部～胴部				ナデ、ソギ落とし	布目痕	橙	橙	2㎜程度の褐色・茶色・肌色の粒	風化
282	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部				ナデ	布目痕、指頭痕	橙	橙	5㎜以下の橙砂粒、微細な灰白の砂粒	風化
283	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部				ナデ、ソギ落とし	布目痕	橙	橙	1㎜以下の灰白、褐色の砂粒、透明の光沢粒	風化
284	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部～胴部				ナデ、ソギ落とし	布目痕	橙	橙	4㎜程度の褐色・茶色の粒、7㎜程度の灰色・褐色の粒、黒色・灰色・茶色の粒	
285	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部～胴部				ナデ、ソギ落とし	布目痕	橙	橙	2～4㎜の褐色・茶色の粒、黒色・褐色自色の微粒	
286	土師器	A区：IV層	鉢	底部				ナデ、指頭痕	布目痕、指頭痕	橙	橙	4㎜以下の浅黄橙の砂粒、1㎜以下の黒色及び不透明の光沢粒、黒色・褐色の微粒	風化
287	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部～胴部				ナデ	ナデ	橙	橙	2㎜以下の茶褐色・黒褐色の粒	風化
288	土師器	A区：IV層	鉢	口縁部～胴部				ナデ	ナデ	橙	橙	1㎜以下の茶褐色の粒	風化
289	土師器	A区：IV層	鉢	底部				ナデ	指頭痕	橙	橙	1㎜以下の浅黄橙、1㎜以下の黒色及び不透明の光沢粒、黒色・褐色の砂粒	
290	土師器	A区：IV層	坏	口縁部		推定 12.2		回転ナデ	回転ナデ	灰黄	灰黄	精良	
291	土師器	A区：IV層	坏	口縁部～受部		推定 13.5		回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	微細な灰白の砂粒	
292	土師器	A区：IV層	坏	口縁部				回転ナデ	回転ナデ	灰黄	灰黄	精良	
293	土師器	A区：IV層	坏	口縁部				タタキの上をナデ	自然釉	褐	明黄褐	灰色・白色・黒色の微粒	295と同一個体
294	土師器	A区：IV層	壺	底部		推定 7.8		回転ナデ後斜方向にナデ	回転ナデ後に不定方向に横ナデ	灰	灰	精良、微細な灰白の砂粒	
295	土師器	A区：IV層	壺	胴部				タタキ	タタキ	褐	明黄褐 にぶい黄橙	灰色・白色・黒色の微粒	293と同一個体
296	土師器	A区：IV層	壺	胴部				平行タタキ	同心円当て具	浅黄	にぶい黄	微細な褐色粒	
297	土師器	A区：IV層	壺	胴部				格子目タタキ	同心円当て具	にぶい褐 浅黄	黄褐	微細な灰白色粒	
298	土師器	A区：IV層	壺	底部				格子目、平行タタキ	横・縦・斜方向に平行タタキ	暗灰黄	暗灰黄	精良、微細な灰白の砂粒	
299	土師器	A区：IV層	壺	胴部				横ナデ、横に平行タタキ	横ナデ、同心円当て具	灰	灰黄褐	精良	
300	土師器	A区：IV層	甕	胴部				格子目タタキ後ナデ	平行当て具	灰黄	浅黄	きめ細か	
301	土師器	A区：IV層	甕	胴部				格子目タタキ後ナデ	同心円当て具	暗灰黄	灰オリーブ	微細な浅黄色粒、5㎜大の灰色粒	
302	土師器	A区：IV層	壺	胴部				縦に平行タタキ	横方向に同	灰オリーブ	橙	微細な褐色の光沢粒	
303		A区：IV層	フイゴの羽口										
304		A区：IV層	フイゴの羽口										

第4節　総　括

豊満大谷遺跡では、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑7基、石囲い炉1基、集石状遺構1基、溝状遺構8条、畝状遺構3条が確認された。また遺物では縄文時代後期から晩期の土器や古代の上師器、須恵器、布痕土器等が出土している。石器では石鏃、剥片、石斧、磨石、砥石などが出土しており、多様な生業の痕跡が窺える当該地は約4000年前の御池降下軽石の堆積後、縄文時代後期後葉から晩期にかけて生活が営まれはじめ、古代を経て中世まで続き、桜島文明軽石が降下した頃まで断続的に生活の場として利用されたと思われる。以下、今回の調査の成果を総括してみたい。

1　縄文時代の遺構と遺物

(1)　縄文時代の遺構について

縄文時代の遺構としてB区で石囲い炉、A区で土坑が検出された。この頃の地形は山の裾野に若干の平坦地があり、その平坦面から谷の中央の水流に向かってなだらかな傾斜があったと思われる。

(2)　縄文時代の出土遺物について

縄文土器は主に第Ⅳ層（御池降下軽石層上面）から出土しているが、大半は破片資料で、全形を知り得るものは少ない。それらの所属期間は主に後期から晩期にかけての土器が出土した。出土土器は後期後半・晩期後半・その他の3つに分類し、従来の型式名と対比させながら若干の記述を行う。

Ⅰ類は縄文時代後期後半に位置づけられるような土器群（2～5・20・25・29・32・33～35・63・66・69）である。型式名を比定できるものとして、2～5は器壁が薄く、よく研磨された精製土器で三万田式土器と思われる。63・66は口縁部が肥厚し、胴部が膨らむもので、口縁部外面と肩部に凹線や凸線文を施している。外器面は縁辺部が横方向に、胴部以下が縦方向に研磨されているが、ススが付着しており煮沸容器として使用されたものと思われる。この土器は鹿児島県末吉町の中岳洞穴で出土した中岳Ⅱ式土器に類似しており、黒色磨研土器様式の在地形態と考えられる。

Ⅱ類は縄文時代晩期前半に位置づけられるような土器群（1・7・8・9・10・11・14・16・17・18・26・41～44・64・65・70～81・82～91・92～106・109・111～114）である。いずれも器内外面ともに研磨された浅鉢形土器である。型式名を比定できるものとして、10～11は黒川式土器と思われる。

Ⅲ類は縄文時代その他の土器群（3・6・12・13・15・19・21～24・27・28・30・31・36～40・45～52・53～61・62・67・107・108・110・115）である。個々の土器に具体的な型式名称を冠することができるものもあるが、様々なバリエーションがあり、型式名称を比定することが難しい。比定できるものとして、12・13は縄文時代中期の春日式土器である。45～52・54・57～61は縄文時代晩期前半～中葉の無刻目突帯のころではないかと思われる。115は縄文時代前期の曽畑式土器である。

2　弥生時代から中世の遺構と遺物

当遺跡内から弥生時代の遺構は検出されなかったが、遺物は弥生後期の甕（175・176）が出土した。古墳時代に入ると豊満大谷の谷間に、再び定住空間が生まれる。古墳時代の次に、豊満大谷で生活の営みが見られるのは、古代である。古代の文化層はⅡc層で、根拠は文明軽石を多く含むⅡb層下という

ことである。堆積は10～15cmであったが、最も多くの遺跡を含んでいた。取り上げた遺物は3,000点を超えた。但しこの殆どが小さな土器片であった。これが何を意味するのかというと、古代以降もその後の生活の営みがあったということであり、遺跡の残りが悪いということは、その土地の使用頻度が高いということである。豊満大谷遺跡は都城盆地の南端にもかかわらず、古代の遺物は細かな砕片が多かった。それだけ土地の使用頻度が高かったということではないだろうか。中世以降について述べると、当遺跡周辺には六ヶ城、池平城、古城が築かれて豊満周辺の中世を賑やかしている。今日の豊満町の現風景が出来上がったのも西別府、田辺の集落が形成されたころではないかと考えられる。これ以降豊満大谷には生活の痕跡がない。

(1) **古墳時代の遺構について**

古墳時代の遺構は、A区は掘立柱建物跡、土坑、B区では竪穴住居跡、土坑である。根拠はこれらの埋土がⅢ層の褐色土であること、そしてこの褐色埋土から刻目突帯をもつ土器が多く検出されたことにある。掘立柱建物跡はA区とB区の境で検出され、山裾の平地面の西際に作られている。竪穴住居跡はB区の傾斜面・西際に傾斜に即して掘られている。竪穴の堀方は浅く、明確な柱根も見つかっていない。隅丸方形の建物で2.5×2.5mの床面積6.25㎡である。遺物は全て土師器で、高坏・埦・鉢類で作りはかなり丁寧なつくりである。また石も多く、何に使用したかは不明であるが、一つだけ砥石に使ったものがあった。

(2) **古墳時代の出土遺物について**

遺物をみると、177～192は甕・高坏・壷・台付の鉢・小型丸底坩・短頸壷で、全体の出土数からすれば1割も満たないが、Ⅲ層付近からの出土が多く、古墳の遺構の存在が推定できる。

古墳時代の甕は2類に大別できる。

Ⅰ類（193～210）は刻目突帯のある土器である。調整は全て内外とも横方向のハケを行っている.形態から193～207を甕形、208～210を壷形とする。211はB区出土で、B区ＳＡ１上層出土の土器群（132～139）に類似している。甕形はさらに大きく2つに分けられる。193・194はバケツ型となり、胴部と口縁部を突帯によって分けられる。胴部から外側に向けてまっすぐ延びていき、端部で内湾している。208～210は特殊型の壷とする。208・209は突帯を持つとは限らないが、調整は同一ということで突帯土器に入る。口径が他よりも小さい。210は肩部から大きくくびれて口縁にいたる。器壁も厚く作られ、突帯の帯は断面三角形であるが210のみ断面四角で他と異なる。B区出土でＳＡ１上層出土のものに近いと思われる。

Ⅱ類（214～226）は肩部に張りがない長胴甕の系統に入る。そしてさらに2つに分けられる。214～221は端部を四角に整形しており、器壁は薄く仕上げている。調整は内外ともハケを基本としているが、214では体部下はタタキを行っているのが確認できる。格子目文で叩いているが、当て具は使わず指で押さえている。222～226は端部が丸く、器壁が厚い。調整は内側に削りを入れて器壁の厚さを調整している。この2種に時期差があるのかは不明であるが、技術的には明確な違いがある。つまり前者はタタキ具やハケを使って器壁を叩くか又は延ばして器面調整を行い、後者は内面を削って器面調整を行っている。

豊満大谷において刻目突帯のある土器は主に3ヶ所から出土した。B区ＳＡ１上層（132～139）・A区ＳＣ６（168・169）及びⅡ層下～Ⅲ層内である。それぞれ「刻目突帯」と装飾を共通としているが、

形・色調・突帯の位置・帯の太さ等が異なる点が多く、この違いは基本的に時期差の現れと思われる。時期的なものとしてA区とB区を同一と考えられないので、それぞれの組み合わせを行った。A区では168・169が出土した土はⅢ層の堆土である褐色系の土であることから、この形態が古いものと考える。206・210の型は基本的にⅢ層出土で168・169と同時又はその下と考えられる。次にB区ではSA1上層土器群がある。132の型と194の型の二つがあるが、194の型はA区の193と同じタイプになり、そうなれば横並びでA区とB区の土器を繋ぎ合わせることが出来る。刻目突帯のある土器はいわゆる「在地系」と言われ南九州の内陸部を中心に弥生から古墳時代にかけて普遍的に見られる土器である。しかしその大部分が包含層出土扱いされ、細かい形態分類を行うものの、決定的な位置づけに躊躇される土器でもある。豊満大谷の刻目突帯のある土器は、遺構の上下関係と包含層でこまめに分布を落とした結果、SA1下層土器群（116～129）と214の型の間に入り、形式も2つまで分けることができた。以上のことからA区の刻目突帯のある土器よりもB区の刻目突帯のある土器のほうが古いと思われる。A区出土の刻目突帯のある土器胴部とロ縁部が突帯によって明確に分かれており、突帯の位置が低い所にあること、そして作りが丁寧であることが上げられる。対してB区出土の刻目突帯のある土器はロ縁部と胴部の明確な境が無く突帯によって分けられている。突帯の位置も高い所が多く、作りも巻き上げ痕が残る作りに粗雑さが目立つ。

高坏はA区から包含層（177～182）、B区からは住居跡（123～129）から検出されている。A区の177～179は坏部のみであるが高坏とした。住居跡の高坏は8点である。口縁部を含む坏部が確認できるのは5点、台部が確認できるのは4点である。口縁部は2類に分類できる。

Ⅰ類は123～125と177・178で、口縁部と体部が明確に分かれるタイプである。体部は付部は付根から外側にまっすぐに延びて、口縁部で屈曲する。口縁部と体部の比が1：1となる。

Ⅱ類は126・127で、口縁部と体部が不明確なタイプである。126は口縁部と体部の境に稜線がみられるが、127は体部が口縁端部まできている。

出土遺物の状況から、豊満大谷遺跡は縄文から弥生へ、弥生から古墳へという社会変革が推察できる遺跡であると思われる。残念なことに萩原川流域の発掘調査例がないということである。恐らく弥生の大集落であった黒土・大岩田から、古墳時代は分立し、その一つが恐らく安久川支流に形成された小集落があったのではと想像する。

(3) 古代から中世の遺構について

遺構は複合して検出された。A区とB・C区の関連性は根拠が見つからず、それぞれ独立して述べる。A区では集石状遺構・溝状遺構（平行溝・区画溝）・畝状遺構・土坑（井戸状）であった。この中で上下関係が分かったのは、区画溝→平行溝→畝状遺構の順である。このことから推察すると、豊満大谷では人跡を残した時が3回あるということである。古墳時代以降最初に作られてのは区画溝で「内区画を護る」という防御的イメージで、この区画に誰か住んでいたと推測される。さらに井戸状の土坑も近くに検出されたことから関連性があると思われる。次の段階では区画溝後、2本の平行溝が作られる。排水溝（？）ではないかと考えられる。平行溝後は畝状遺構で、A区南側に相当広い範囲で検出された。今回の調査で確認された畝状遺構は、非常に遺存状態が悪かったために、調査及び調査成果において詳細を検討するには至らなかった。近年、水田跡や畠跡などの生産遺跡の調査が増加しており、これまでも当地域周辺の中尾山・馬渡遺跡・牧ノ原第2井積などで中世に降下したとされる文明ボラ（以下、白

ボラ）が堆積する畝状遺跡が確認されている。この畝状遺構は、遺構の性格について検討が必要である。現在、白ボラの堆積する畝状遺構（小溝状遺構）は、畑の畝間及び白ボラ降下後の復旧痕の両者が考えられているが、当遺跡では同じ単位の小溝状遺構が整然と走行する状況からみると小溝状遺構＝畝間という捉え方が妥当であると思われる。Ｂ・Ｃ区の古代の溝状遺構ＳＥ４からＳＥ７まではほぼ同じ方向に延びている。Ａ区の平行溝とは異なり、明らかに時期差があると思われる。ＳＥ４からＳＥ６は調査区外となるがＣ区にはいるＳＥ７と同じくらい延びていくと考えられる。ＳＥ７からＳＥ４に移行していったと考えられる。いずれにしても積み重なるように作られているのが特徴である。この特徴は波板状凹凸面や硬化面を伴う道路状遺構によくみられる特徴である。Ｂ区の溝状遺構はＡ区の古代の遺構と関連づけられるものである。

集石状遺構は、Ａ区中央東端、山裾と平坦部の境界で検出された。東側が調査区外であったため全容は確認されなかったが、推察すると１×３ｍの長楕円形になると思われる。集石状遺構を中心に放射状に焼成した礫が拡散しており、集石内やその周辺からは、布痕土器や高台付の埦が出土した。単に開墾時に寄せ集められた石の集まりがどうか、集石の用途は不明である。

(4) 古代から中世の出土遺物について

組成は須恵器・土師器・黒色土器である。器種は甕と坏（高台付・無高台）、そして鉢（布痕土器）で、時期は古代と推測され、土器区分からも布痕時の頃だと考える。土師質土器の出土量は他の同時期の遺跡に比較して少ない方である。坏の底部切り離しには、ヘラ切りと糸切りが見られるが前者の方が多い。

このように当遺跡では、断片的ではあるが掘立柱建物跡、土坑（井戸状）、が確認され、出土遺物や白ボラの堆積する溝状遺構、畝状遺構の存在から、古代～中世の継続的で小規模な集落であった状況がうかがえる。

３　近世から近代の遺構と遺物

近世以降は若干の近世陶磁器（小片）・寛永通宝が出土している。杉の植林のためＡ区とＢ区の境界は段が作られたと思われる。当初は畑作による開墾と考えていた。いずれにしても近世以降は居住跡は無かったと思われる。Ⅱ層上層から検出した３本の硬化面が、その時期に該当すると思われる。山の等高線に沿って平行に走っているということで、生活道路というより植林の際に使用したものだと思われる。

<参考・引用文献>

『宮崎県史　資料編　考古１』　宮崎県史刊行会
「宮崎県史　通史編　原始・古代１」　宮崎県史刊行会
「宮崎県史　通史編　原始・古代２」　宮崎県史刊行会
「王子原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』　第45集　2001
「ワクド石遺跡」『熊本県文化財調査報告』　第145集　1994
「梅木原遺跡」『小林市文化財調査報告書』　第11集　2000
「都之城跡・久玉遺跡・宮ノ下遺跡・堂山（南地区）遺跡・牟田ノ上遺跡・屏風谷第１遺跡」
『都城市文化財調査報告書』　第13集　1991
「大岩田村ノ前遺跡」『都城市文化財調査報告書』　第14集　1991
「天神原遺跡」『都城市文化財調査報告書』　第23集　1993
「久玉遺跡第５次・油田遺跡・正坂原遺跡」『都城市文化財調査報告書』　第25集　1993
「権山・郡元地区遺跡」宮崎県教育委員会　1992
堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討―入佐式と黒川式の細分―」『鹿児島考古』　第31号　1997
水ノ江和同「北部九州の縄文後・晩期土器―三万田式から刻目突帯土器の直前まで―」
『縄文時代』８　縄文時代研究会　1997
「横市地区遺跡群　肱穴遺跡(1)・今房遺跡・馬渡遺跡（第１次）『都城市文化財調査報告書』　第50集　2000
「谷丸地区遺跡群」『都城市文化財調査報告書』　第34集　1996
「上牧第２遺跡・母智丘原第２遺跡」都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）
『都城市文化財調査報告書』　第５集　1986
「母智丘谷遺跡・畑田遺跡・線坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』　第63集　2002
都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）『都城市文化財調査報告書』　第５集　1986
都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）『都城市文化財調査報告書』　第６集　1987
「梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・委原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』　第42集　2001
戸高克則編「縄文時代研究辞典」東京堂出版　1994
「東田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』　第16集　1996
「学頭遺跡・八児遺跡」宮崎県教育委員会　1995
「右葛ヶ迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』　第21集　2000

B区：石囲い炉検出状況

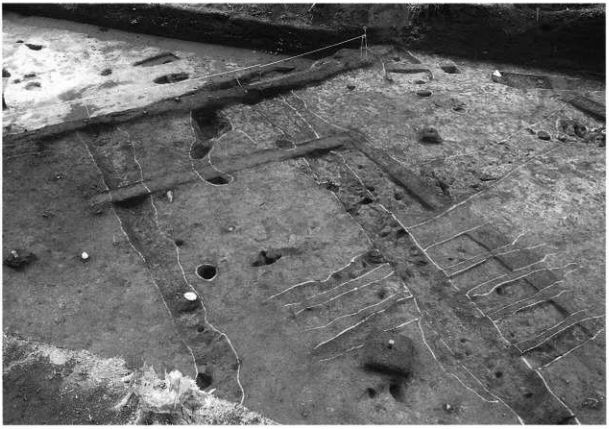
B区：１号竪穴住居跡遺物検出状況

A区：集石状遺構検出状況

A区：１号土坑検出状況

A区：４号土坑検出状況

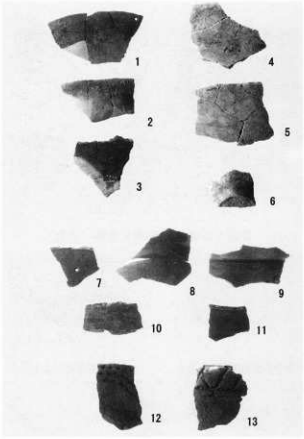
A区：５号土坑検出状況



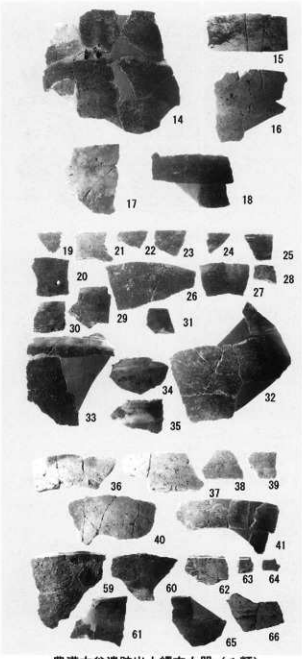
A区：遺構検出状況（溝状遺構・畝状遺構）

B区：５号溝状遺構検出状況

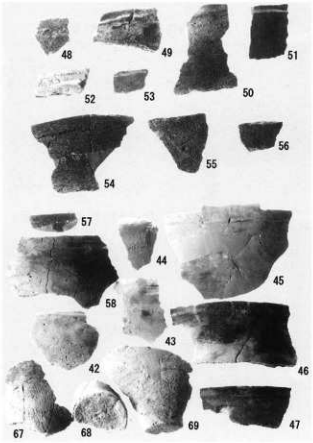
B区：10号溝状遺構検出状況



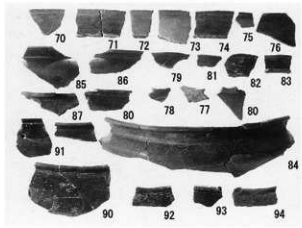
石囲い炉出土土器



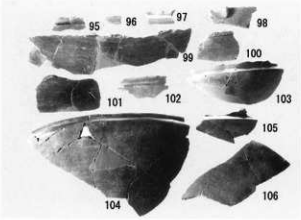
豊満大谷遺跡出土縄文土器（１類）



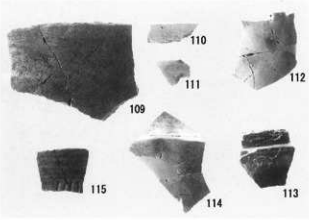
豊満大谷遺跡出土縄文土器（２～６類）



豊満大谷遺跡出土縄文土器（７類）１



豊満大谷遺跡出土縄文土器（７類）２



豊満大谷遺跡出土縄文土器（８類）

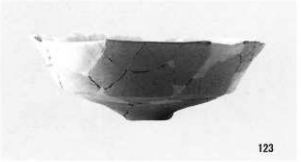
１号竪穴住居跡出土土器１

１号竪穴住居跡出土土器２

１号竪穴住居跡出土土器３

１号竪穴住居跡出土土器４

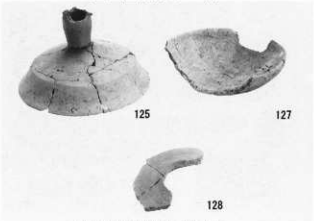
１号竪穴住居跡出土土器５



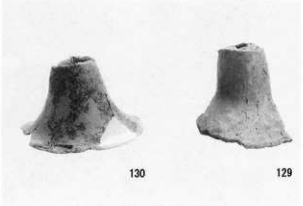
１号竪穴住居跡出土土器６

１号竪穴住居跡出土土器７

１号竪穴住居跡出土土器８

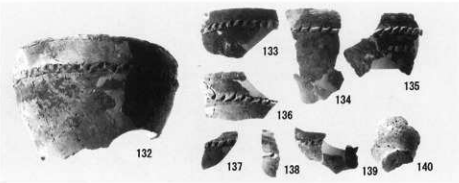


１号竪穴住居跡出土土器９



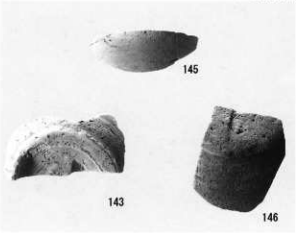
１号竪穴住居跡出土土器10

１号竪穴住居跡出土遺物11

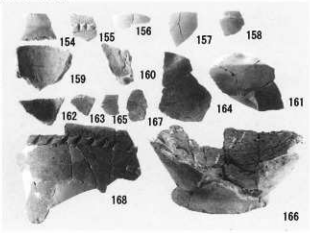


１号竪穴住居跡出土土器12

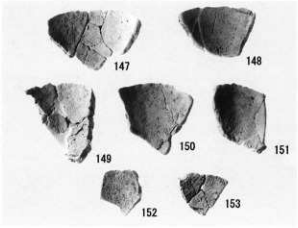
１号集石状遺構出土土器１



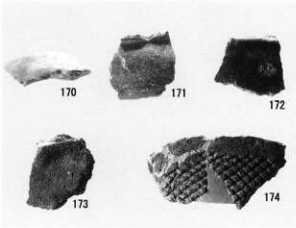
１号集石状遺構出土土器２



１号・２号・６号土坑出土土器



１号集石状遺構出土土器３



６号土坑出土土器１

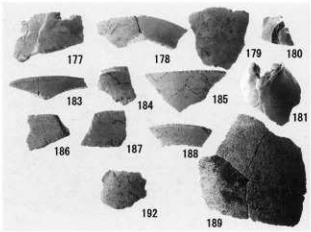
豊満大谷遺跡出土土器（弥生～古墳時代）１

６号土坑出土土器２

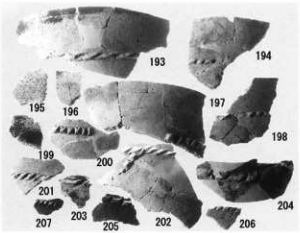
出土土器（弥生～古墳時代）２

出土土器（弥生～古墳時代）３

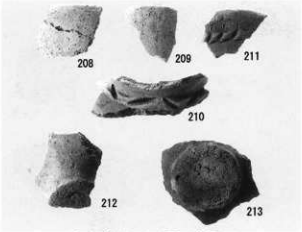
出土土器（弥生～古墳時代）４



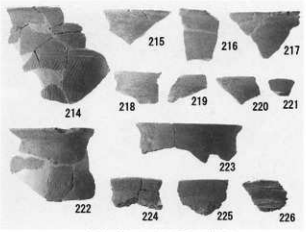
出土土器（弥生～古墳時代）５



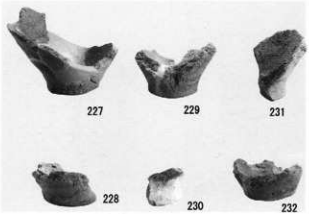
古墳時代出土土器（壺類）１



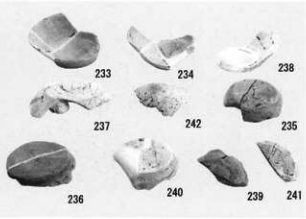
古墳時代出土土器（壺類）２



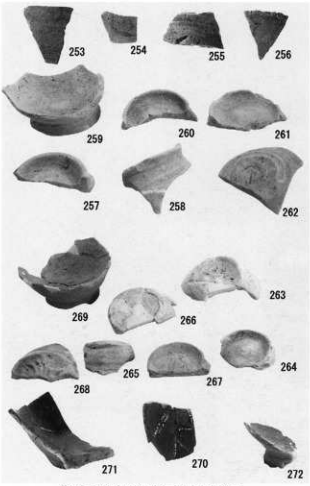
古墳時代出土土器（甕類）３



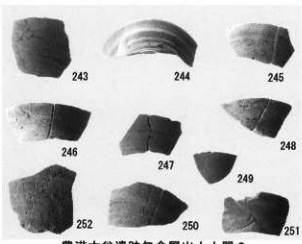
古墳時代出土土器４



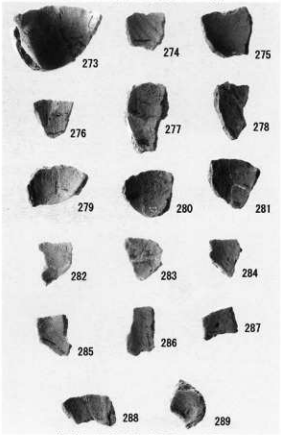
豊満大谷遺跡包含層出土土器１



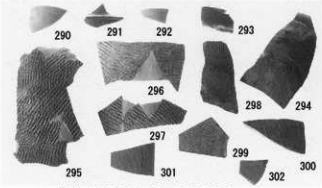
豊満大谷遺跡包含層出土土器３



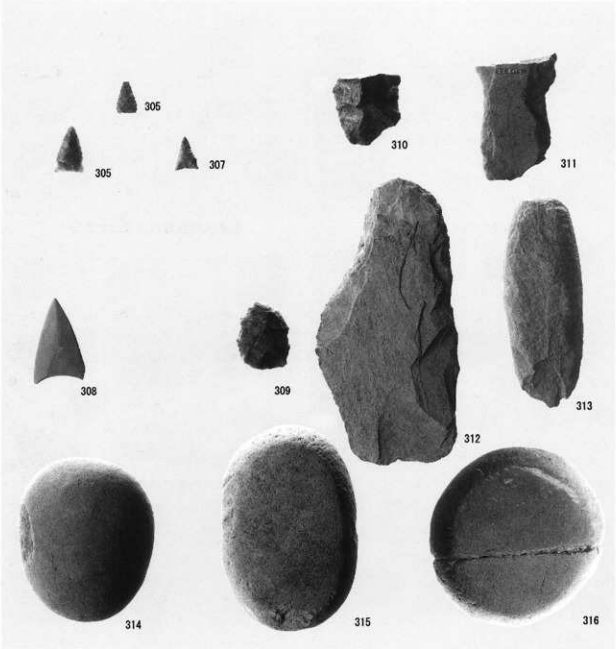
豊満大谷遺跡包含層出土土器２



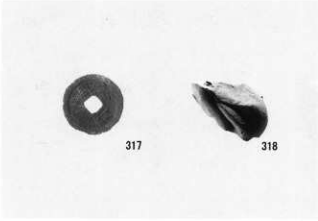
豊満大谷遺跡包含層出土土器４



豊満大谷遺跡包含層出土土器５



豊満大谷遺跡出土石器



豊満大谷遺跡出土古銭・土製品

第Ⅳ章　野添遺跡の調査

第１節　調査の概要

調査対象は鰐塚山系南端部の金御岳（標高472m）から連なる標高約190mの丘陵裾部台地上に位置し、調査前は東から西に緩やかに傾斜する平坦な畑地として利用されていた（第１図）。

確認調査の結果、縄文時代後期の土器や中世の土師器が暗褐色土層（Ⅱ層）から、住居跡や柱穴が黄色軽石層（Ⅳ層：霧島御池軽石層で約4200年前噴出と考えられる）上面から検出されることが確認された。この結果に基づき発掘調査は農業用道路建設部分である約1,500㎡について実施した。本調査は表土（耕作土）を重機により剥ぎ取り、その後御池ボラ層の上面まで手作業で一層づつ掘り下げ遺構・遺物を検出した。また、排土置場の確保のため調査区を４分（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区）し、本調査を平成13年11月13日に東側のＤ区から開始した。

Ⅱ層上面で検出された遺構としては、中世の土壙墓２基・土坑２基・溝状遺構２条・硬化面を伴う道路状遺構１条、近世の道路上遺構１条、ピット群である。

Ⅳ層上面で検出された遺構としては、縄文時代後期の竪穴住居跡（ＳＡＪ）７軒・土坑１基、古墳時代の竪穴住居跡（ＳＡＫ）２軒（ＳＡＫ１～２）・土壙墓１基がある。竪穴住居跡９軒はＡ・Ｂ・Ｃ区で検出され、７軒（ＳＡＪ１～７）は円形プランで直径２～３m、２軒は方形プランで１辺約５mの中規模住居である。遺物の出土状況をみるとＳＡＫ１は土師器の破片が床面付近から数多く出土し、ＳＡＪ１・ＳＡＪ２・ＳＡＪ３・ＳＡＪ７は縄文後期の土器小片が床面付近にかたまって出土した。ただ、いずれの住居跡も炉跡（火処）は明確ではなかった。

Ⅳ層上面検出遺構の調査を終了した時点で、御池ボラ層の下までトレンチを入れたが、遺構・遺物の確認はできなかったため、平成14年２月15日に調査を終了した。

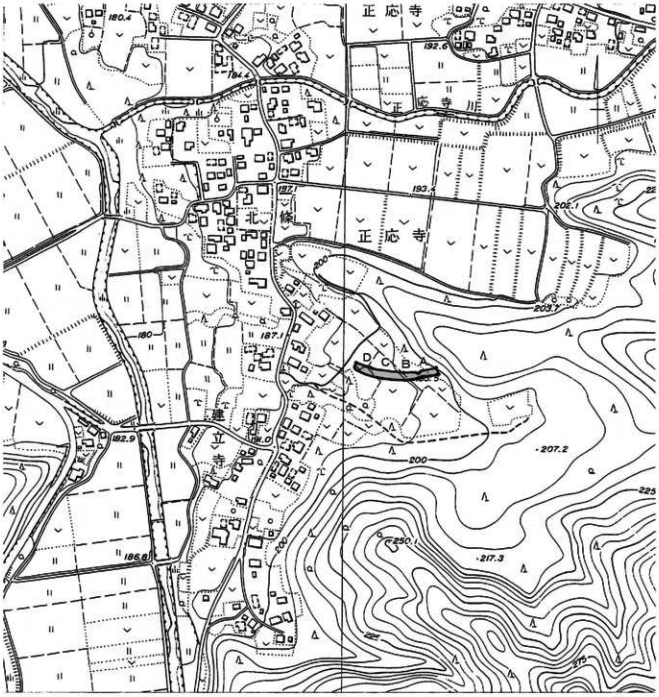
調査区には、国土座標に準じた10m×10mグリットを単位とし、４つの調査区を覆うようにグリッドを設定し、南北方向にアルファベット（北よりＡ.Ｂ.Ｃ.Ｄ）を、また東西方向に数字（東より１.２.３…）をそれぞれ付した。

第２節　基本層序

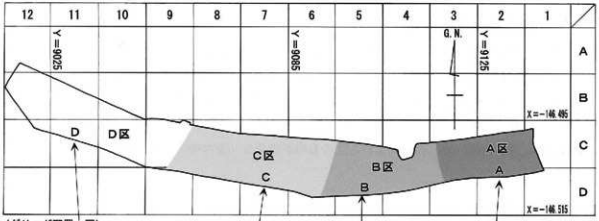
野添遺跡の基本層序を第２図に示した。遺跡周辺は丘陵の尾根筋の地形であったが削平されたために、場所によって大きく地層の堆積が異なる。

第Ⅰ層は褐色の表土であり、調査前まで畑の耕作土であった。調査区全体で確認され45cm～50cmの厚みがある。第Ⅱ層はやや硬質の暗褐色土で、御池ボラを含み縄文後晩期・古墳・中世の遺物包含層である。層さは15cm～20cmである。Ａ・Ｂ・Ｃ区で確認された。第Ⅲ層は黒褐色土層であるが、各調査区の一部にしか堆積していない。第Ⅳ層は黄色軽石層で、霧島御池軽石層と考えられる。Ａ・Ｂ・Ｄ区の一部で確認された。厚さは30cm～35cmである。第Ⅴ層は鬼界アカホヤ火山灰（約6300年前噴出と考えられる）の一次堆積層であり、下部に２～３㎜程度の褐橙色火山豆石を多く含む。第Ⅳ層は暗黄褐色軽石混褐色土で上部に直径２～５㎜程度の黄・クリーム色の軽石粒を多く含み、下部からは２～５㎜程度の橙・

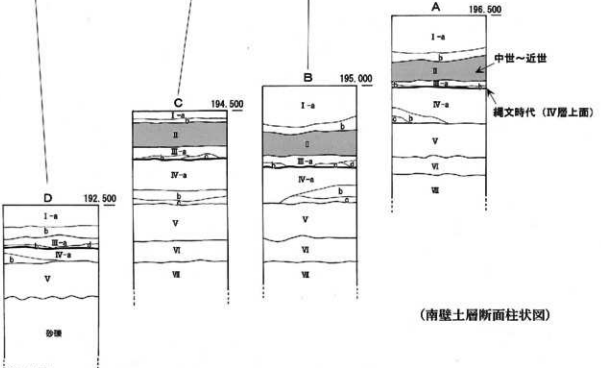
黄褐色の軽石粒を含んでいる。上記の基本土層はA区～C区で確認されたが、D区は河川の氾濫と土地改良によって調査区の半分の層が撹乱している状態である。なおアカホヤ下層の第Ⅵ層以下はトレンチを4m×10m規模で開けて確認したが、遺物、遺構の検出はできなかった。



第1図　野添遺跡　周辺地形図（1／5,000）



（グリッド配置　図）



（南壁土層断面柱状図）

【土層注記】基本土層

Ⅰ－a 褐灰色（10YR５／１）耕作土　しまりがなく、粘性なし
Ⅰ－b 褐灰色（10YR４／１）文明軽石（１％程度）含む。しまりが弱く、粘性あり。
Ⅱ　暗褐色（10YR３／４）文明軽石（５％程度）含む。しまりややあり、粘性あり。
Ⅲ－a 黒褐色（10YR２／２）文明軽石を多量に含む。しまりよく、粘性なし。下位ほど粒が小さく、下層付近では砂粒状となる。
Ⅲ－b 黒褐色（10YR３／２）１～３mmの白色粒子を少量含む。しまりややあり、粘性なし。
Ⅲ－c 黒褐色（10YR３／２）１～３mmの白色粒子が密に混入し、非常に硬くしまる。
Ⅲ－d 黒褐色（10YR３／２）１mm以下の白色粒子を多く含む。しまりなく、粘性なし。
Ⅲ－e 黒褐色（10YR３／１）３～５mmの白色粒子を多く含む。しまりが有り、粘性なし。
Ⅳ－a 黄褐色（10YR５／６）御池軽石層、１～10mmの黄橙色粒子のみで構成、下位ほど粒が大きくなる。
Ⅳ－b 黄褐色（10YR５／８）黄橙色粒子を少量含む。しまりややあり、粘性あり。
Ⅳ－c 黄褐色（10YR５／８）黄橙色粒子を少量含む。しまりよく、粘性あり。
Ⅴ　明褐色（10YR６／６）アカホヤ層、下部に２～３mm程度の橙褐色火山豆石を多く含む。
Ⅵ　褐　色（7.5YR４／３）１～10mm程度の黄色の軽石粒を多く含む。
Ⅶ　にぶい赤褐色（５YR５／４）２～５mm程度の橙色粒子及び赤色粒子をまばらに含む。粘性あり。

第２図　野添遺跡　グリッド配置図（1／500）及び南壁土層断面図

第３節　調査の記録

遺構を検出した第Ⅱ層は標高190m～198mの西向き斜面で、調査区の中央から東側は山頂に向かって急傾斜を形成するが西に向けては緩傾斜となる。確認した遺構は土壙墓（ＳＤ）２基、土坑（ＳＣ）２基、溝状遺構（ＳＥ）２条、道路状遺構（ＳＧ）２条で、緩傾斜面で検出した。第Ⅳ層からは、竪穴住居跡（ＳＡ）９軒、土壙墓（ＳＤ）１基、土坑１基で、竪穴住居跡２軒、土坑１基以外はすべて緩傾斜面で検出した。遺物は縄文時代後期および古代のものが出土し、その中でも縄文時代後期が多数を占める。

１　縄文時代の遺構と遺物

調査区のＡ区・Ｂ区・Ｃ区から本時代に帰属すると思われる遺構が検出されている。検出された遺構は竪穴住居跡７軒、土坑１基である（第３図）。遺物はごく一部の例外を除いて後期に属するものであり、遺構もおおむね同時期の所産と考えられる。

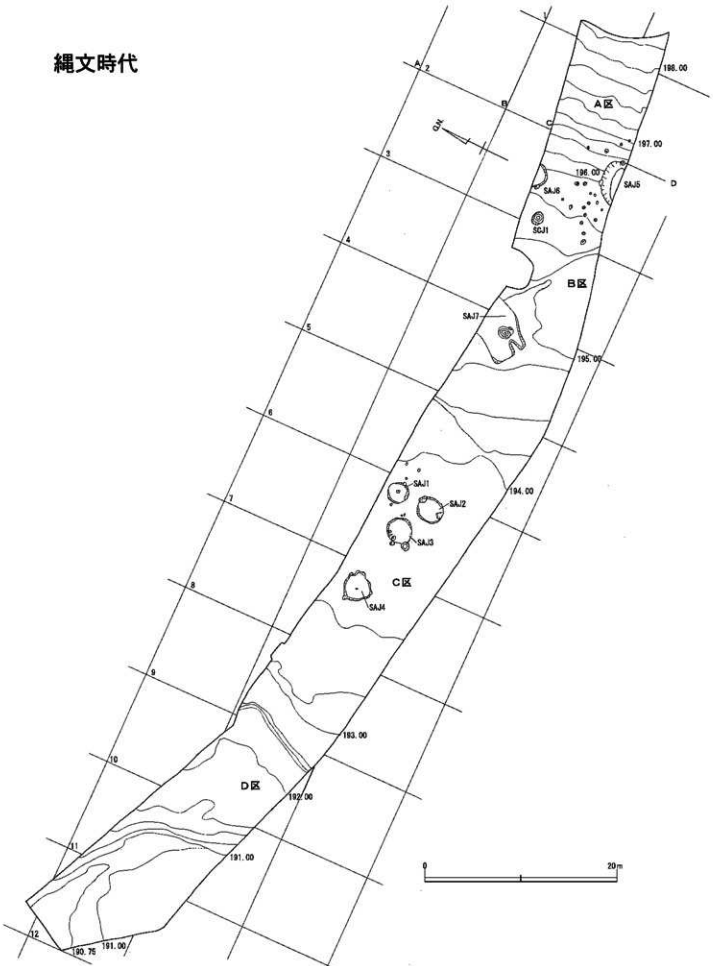
(1)　竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（ＳＡＪ１：第４図）

Ｃ区の中央やや北寄りの御池ボラ層上面で、Ｃ７グリッドから検出された。円形プランの住居跡で、南北方向2.25m、東西方向2.2m、検出面からの深さ12cmを測る。床面中央にわずかに窪みがあり、その埋土中には多くの炭化物が含まれていた。埋土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積する。埋土中には全体的に炭化物が含まれるが、中央付近にその集中があり、土の黒色化がレンズ状に堆積する。埋土中には全体的に炭化物が含まれるが、中央付近のその集中があり、土の黒色化が見られる。しかし床面に硬化面や焼土等は確認できなかった。主柱穴は中央に１基と南側にピット１基を配し、径が15cm～25cm、床面からの深さは20cm～60cmである。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物は第11図～第12図に示している。この住居が伴う遺物（１～17）は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、１は口縁部が緩やかに外反する深鉢で、凹線を口縁端部に２条、胴部屈曲部に２条の凹線を巡らせている。器面調整は内外面にナデを施している。２・３は胴部が張り口縁部が緩やかに外反する深鉢で波状口縁と平口縁である。口縁端部、胴部屈曲部には凹点文と凹線文の組み合わせた文様を施している。内外面ともミガキが施されている。４～６は胴部があまり張らず口縁部が直口する深鉢で凹線を４は口縁端部に１条、５・６は２条巡らせている。４は内外面にミガキが施され、５・６は内外面ともナデが施されている。７は胴部が張り口辺部が外反しながら立ち上がり口縁端部が肥厚する深鉢で、口縁端部に凹線文を２条、胴部屈曲部には凹線文と刺突列点文を巡らせている。器面調整は内外面ともミガキ後ナデを施している。８は土師器甕の口縁部で、遺構への流れ込みである。９～13は外反する深鉢の胴部片と考えられる。９は１と類似するもので、胴部屈曲部に２条の凹線文を巡らせている。内外面ともナデである。10は胴部屈曲部に凹線文及び凹点文を施文するもので、内外面ともナデである。11・12は胴部屈曲部に沈線文を２条に巡らせている。内外面ともナデである。13は胴部部屈曲部に列点文及び沈線文を施文するもので外面にミガキ、内面にナデが施されている。14・15・16は深鉢の底部である。14は全体的に風化のために丸くなっているが、平底でくびれを持たずに胴部が直線的に立ち上がるものと思われる。外面はミガキ、内面はナデが施されている。

縄文時代



第３図　野添遺跡　縄文時代の遺構分布図（１／400）

15は平底でくびれを持たずにやや内湾する胴部が外方に延びる。内外面ともナデ調整である。16は平底でくびれを持たずに内湾する胴部が立ち上がる。外面は工具によるナデ、内面はナデでススが付着している。17は剥片で使用石材はチャートである。

2号竪穴住居跡（ＳＡＪ２：第５図）

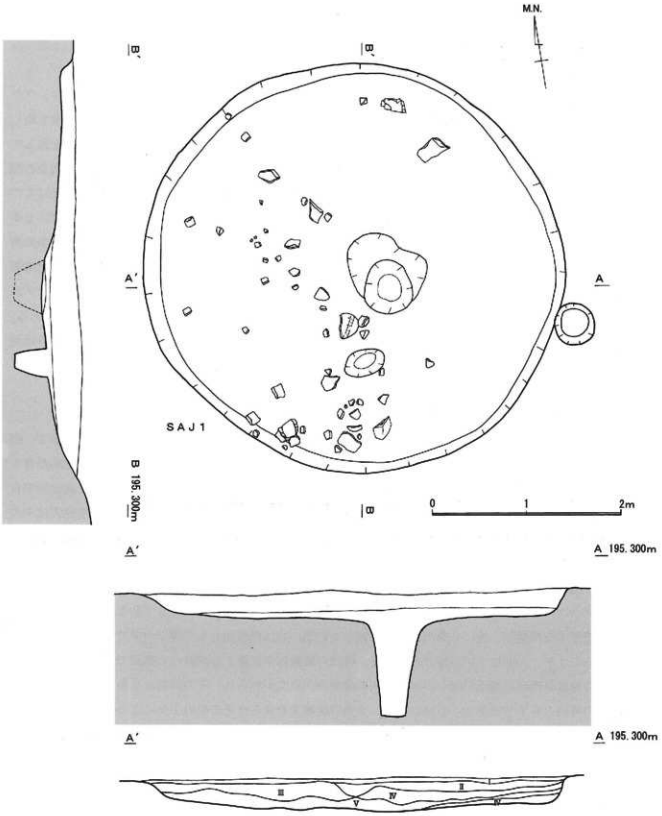
１号住居跡の南側約1.2mの位置に検出された。円形プランの住居で、南北方向2.8m、東西方向2.65m、検出面からの深さは15～35cmを測る。埋土中には多くの炭化物粒が含まれていた。埋土は御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積する。埋土中央部に炭化物が多く含まれ、中央付近に集中している。しかし、床面に硬化面や焼土等は確認できなかった。主柱穴は確認出来ず、西側壁際にピット１基を検出した。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で多量に出土した。土圧で潰されたほぼ完形の土器等も出土している。

出土遺物は第13図～第14図に示している。この住居に伴う遺物（18～34）は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、18～33は深鉢である。18は胴部が張り口縁部が緩やかに外反する深鉢で、口縁部は肥厚し外面には二条の浅い凹線文が巡らせ、三角形あるいは楕円形の凹点文が上に２段、下に１段施される。胴部屈曲部には2条の浅い凹線文を巡らせ、三日月形の上下２段の凹点文を施している。器面調整は外面にミガキ、内面にナデを施している。19は18と同一個体の可能性があるがやや胴部が張っているように図化復元される。胴部凹線文上に上下２段の三日月状の凹点文が施される。外面はミガキ、内面はナデである。20は口縁部が緩やかに外反する深鉢で、口縁部は肥厚し浅い凹線を２条、胴部屈曲部には２条の浅い凹線を巡らせている。外面はミガキ後ナデ、内面はナデが施され、一部剥離がみられる。21は口縁部が緩やかに外反する器形で、口縁部は肥厚し凹線を２条巡らせている。内外面ともミガキ後ナデである。22は口縁端部が肥厚する深鉢で、外面に粗いナデ、横方向のナデを施し、内面に横方向にナデを施している。23・24は口縁端部が肥厚する深鉢で、口縁部外面に２条の沈線文を巡らせている。内外面ともミガキである。25・26は、口縁部の外反が小さく、25は口縁端部に浅い凹線文を２条施し、26は口縁部先端を欠くものの肥厚部にやや深めの凹線文２条と肩部に１～２条の凹線文を施す。内外面ともミガキを施している。27・28は無文の口縁帯を有する深鉢形土器である。27は外面にミガキ、ナデ、内面はミガキである。28は外面に縦方向のキズ状の条痕があるが調整はナデが施され、内面はミガキが施されている。

29～32は胴部の張りが弱い深鉢の胴部で、肩部に29・30は２条の浅い沈線文、31・32は２条の太めの沈線文を巡らせている。内外面ともナデである。33は屈曲して張りだす深鉢の胴部で、屈曲部外面には明瞭な稜線を形成する。内外面ともナデである。34は剥片で使用石材はチャートである。

3号竪穴住居跡（ＳＡＪ３：第６図）

１号住居跡の南西側約1.2mの位置に検出された。円形プランの住居跡で、南北方向2.85m、東西方向2.65m、検出面からの深さは15～18cmを測る。埋土中には少量の炭化物粒が含まれていた。埋土は御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。埋土中には中央部に炭化物が少量含まれ、中央付近に集中している。しかし、床面に硬化面や焼土等は確認できなかった。主柱穴は２基、西側にピット１基を配し、径が20～30cm、床面からの深さは15～30cmである。しかし、柱穴の配置は通常の中央２本主柱や



【土層注記】ＳＡＪ１
Ⅰ　黒褐色（7.5ＹＲ３／１）御池ボラを微量に含み、しまりがある。
Ⅱ　暗褐色（7.5ＹＲ３／１）直径２～３㎜の御池ボラが多く混在する。
Ⅲ　暗褐色（7.5ＹＲ３／３）直径５㎜の御池ボラを多量に含む。少し粘性があり、炭化物が混入する。
Ⅳ　褐　色（7.5ＹＲ４／３）直径１㎜の御池ボラを多量に含む。しまりが弱く、粘性あり。
Ⅴ　褐　色（7.5ＹＲ４／４）直径１㎜の御池ボラを少量含む。しまりが弱く、粘性やや強い。
Ⅵ　褐　色（7.5ＹＲ４／６）多量の御池ボラを含み、粘性が強い。

第４図　野添遺跡　１号竪穴住居跡実測図（ＳＡＪ１：１／40）

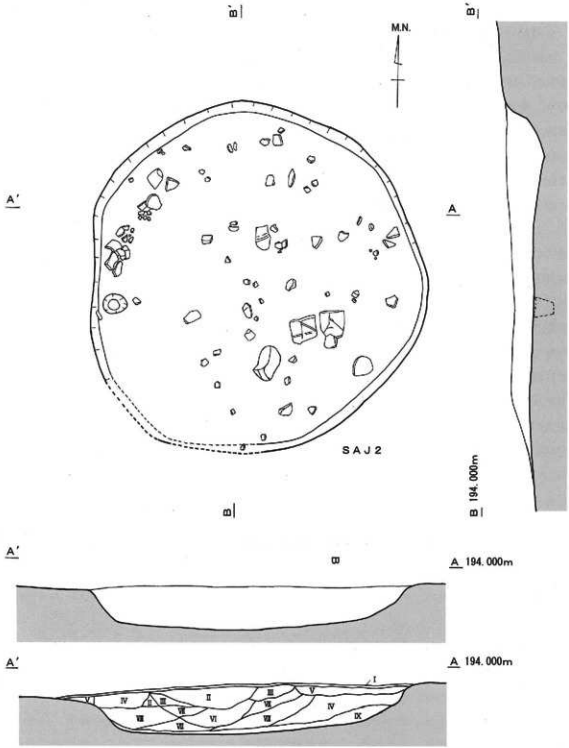
4本主柱のような対照的なものではなく、今ひとつ不確定要素を残す。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物は第15図に示している。この住居に伴う遺物（35～43）は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、35～37は口縁部をやや肥厚させ、その部分に文様を施している深鉢である。35は口縁部肥厚部に2～3条の凹線文と上に1点、下に2～3点の凹点文を施している。内外面ともナデである。外面にはススが付着している。36は口縁部肥厚部にごく浅い1～2条の凹線文が巡る。内外面ともナデである。37は口縁肥厚部に浅い2条の凹線文を巡らせている。外面はミガキ後ナデが施され、内面はナデが施されている。38は張りの弱い深鉢の胴部である。胴部屈曲部に2条の浅い沈線を巡らせている。内外面ともナデである。39はやや胴部が張り、胴部屈曲部上部に2条の浅い沈線文を巡らせている。外面はミガキ後ナデ、ナデが施され、内面はナデが施されている。40は底部から外傾する胴部が直接立ち上がる深鉢である。外面は指ナデ後ナデ、ミガキが施され、内面はナデが施されている。41は擦痕を有する磨製石器の剥片である。使用石材はチャートである。42は敲石である。楕円形を呈し、一部敲打痕が観察される。使用石材は砂岩である。43は打製石斧である。使用石材は頁岩である。上部・下部が欠損しているため全容は不明である。

4号竪穴住居跡（ＳＡＪ４：第７図）

Ｃ区の中央やや北寄りの御池ボラ上面で、Ｃ８グリッドから検出された。円形プランの住居跡で、南北方向2.75m、東西方向2.65m、検出面からの深さは25～28cmを測る。埋土中には多くの炭化物が含まれていた。埋土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。埋土中には全体的に炭化物が含まれるが、中央付近に集中している。しかし床面に硬化面や焼土等は確認できなかった。主柱穴は中央に1基を配し、径が25cm、床面からの深さは23cmである。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で多量に出土した。

出土遺物は第16図～第17図に示している。この住居に伴う遺物（44～52）は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、44～48は深鉢の口縁部である。44・45は口縁端部が肥厚する深鉢で、浅い2条の凹線文を施している。44は内外面とも丁寧なナデである。45は外面に横方向のナデ、内面にナデが施されている。46は口縁端部が肥厚する深鉢の口縁部で、やや丸みを帯びる。口縁部外面には風化が著しいが横2列の縦長の凹点文がみられ、その両側に2条の凹線文が施される。内外面ともナデである。47は口唇部に2条の沈線文を巡らせその間の工具による刻み目を施している。内外面とも横方向のナデである。48は口縁部をやや肥厚させ、その部分に2条の凹線文と凹点文と思われる1個のくぼみが見られる。外面は横方向のナデ、内面はナデである。49・51は深鉢の胴部である。49は胴部がやや張り、胴部屈曲上部に凹線文を3条巡らせている。内外面ともミガキが施され、外面にはススが付着している。50は先端が欠損した肥厚口縁で、やや深めの2条の凹線文が巡らされている。内外面ともナデである。51は胴部が張らず口縁部へ直口する深鉢で、胴部上位に凹線文1条を巡らしている。外面はミガキ後ナデを施し、内面は粗いナデである。52は玉である。緑色結晶片岩で1点のみの出土である。若干、両端より中が膨らむ形状を呈している。両端より穿孔を施している。



【土層注記】SAJ2
Ⅰ　黒褐色（7.5YR3／1）直径1㎜の御池ボラを少量含む。しまりなく粘性なし。
Ⅱ　暗褐色（7.5YR3／2）直径1～3㎜の御池ボラを多量に含む。しまりは強いが粘性なし。
Ⅲ　暗褐色（7.5YR3／3）しまりが強く、粘性ややあり。
Ⅳ　暗褐色（7.5YR3／4）直径1～5㎜の御池ボラを多量に含む。しまり弱く、粘性なし。
Ⅴ　明褐色（7.5YR5／8）直径1㎜の御池ボラを多量に含む。しまり弱く、粘性ややあり。
Ⅵ　褐　色（7.5YR4／4）直径1㎜の御池ボラを少量含む。粘性ややあり。
Ⅶ　明褐色（7.5YR5／6）直径1～3㎜の御池ボラを少量含む。粘性ややあり。
Ⅷ　にぶい褐色（7.5YR5／4）直径1㎜の御池ボラを少量含む。
Ⅸ　黒褐色（7.5YR3／2）直径1㎜の御池ボラを多量に含む。粘性ややあり。

第5図　野添遺跡　2号竪穴住居跡実測図（SAJ2：1／30）

５号竪穴住居跡（ＳＡＪ５：第８図）

Ａ区の南側壁沿中央の御池ボラ上面傾斜地で、Ｄ３グリットから検出された。住居南側の大部分は調査区外の畑下に延びているため、プランの約２分の１を検出した。平面プランは円形プランになるであろう。南北方向に半径1.8ｍ、東西方向に直径4.7ｍ、検出面からの深さは約87㎝を測る。住居の埋土は、御池ボラの混入する褐色土を主体とし、乱れは認められないことからある程度自然堆積したものと考えられる。床面には僅かながら硬化面も確認できた。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で床面西側に出土した。

出土遺物は第18図に示している。この住居に伴う遺物は（53～64）は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、53は口縁部がやや内傾気味に緩やかに外反する深鉢で綾式相当の時期と思われる。口縁形態は波状口縁で、口唇部に斜方向の貝殻腹縁押圧刻みを施し、口縁部外面には棒状工具による連続刺突文、３条の沈線文を施している。内外面ともナデである。54・55は鉢及び浅鉢の口縁部である。54は外傾しながら直口する口縁部で、外面はナデ、内面は横方向のミガキが施されている。55は胴部から口縁部が外反しながら延びる浅鉢で、口縁端部内外に各１条の沈線を巡らせている。内外面とも横方向のミガキである。56・57は口縁部上位に凹線文を集約させ、胴部が張らず口縁が直口する深鉢の頸部で指宿式土器である。内外面ともナデを施している。58は深鉢の口縁部で市来式土器と思われる。外面は貝殻条痕後ナデ、貝殻腹縁による斜位の連続刺突文、その間に太めの沈線文が施され、内面は貝殻条痕文が施されている。59～63は深鉢の胴部である。59は胴部外面に斜・横方向の貝殻条痕後ナデを施し、１条の沈線文の端が見られる。一部ススが付着している。内面には横方向の貝殻条痕後ナデが施されている。60・61は指宿式土器の深鉢である。60は２条の平行沈線文を基本として文様を施す深鉢で、外面はナデ、棒状工具による入組み繋ぎ手文を連続させて文様を描き出している。内面はナデ、貝殻条痕文後ナデを施している。61は胴部が張り、口辺部が外反しながら立ち上がり口唇部が肥厚する深鉢で、外面はナデ、横方向の沈線文を施し、内面は不定方向のナデを施す。62・63は凹線文を施す深鉢で、外面はナデ、内面は貝殻条痕文後ナデを施している。64は甕の底部で丸みを帯びた大きな平底である。内面は剥離が著しいが外面はナデを施している。流れ込みの可能性がある。

６号竪穴住居跡（ＳＡＪ６：第８図）

Ａ区の北壁沿中央の御池ボラ上面傾斜地で、Ｃ２グリットから検出された。住居北側の大部分は調査区外の畑下に延びているため、プランの約２分の１を検出した。平面プランは円形プランになるであろう。南北方向に半径１ｍ、東西方向に直径2.4ｍ、検出面からの深さは約45㎝を測る。住居の埋土は、御池ボラが混入する褐色土を主体とし、乱れは認められないことからある程度自然堆積したものと考えられる。主柱穴は床面中央西側に１基を配し、径が23㎝、床面からの深さは10㎝である。床面には、硬化面や焼土等は確認できなかった。遺物は土器小片が少量床面に出土したが、小片で風化しているため器種については不明である。